Gender and Sexuality

Journal of Center for Gender Studies, ICU

No.04
2009

CGS
Center for Gender Studies
International Christian University
Tokyo……——……Asia

目次

目次 ----------1

研究論文

「高齢者」・ジェンダー・アイデンティティ
池田理知子 ----------3

悪女の「役割」――少女マンガ「ライフ」にみる少女の「女ことば」――
高橋すみれ ----------17

セクシュアリティ診断家としてのミシェル・フーコーとセクシュアリティ研究の対抗言説
川坂和義 ----------39

研究ノート

「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」へのインタビュー調査
加藤悠二 ----------61

ジェンダー研究センター（CGS）活動報告・予定

2008 年度 CGS 活動報告 ----------73
日英 LGBT ユースエクスチェンジプロジェクト ----------77
少数派の孤独は国境を越えて――日英 LGBT ユースエクスチェンジプロジェクト――
ミヤマアキラ ----------85
「自己尊重・コミュニケーショントレーニング 」----------89
2009 年度 CGS 活動予定 ----------97

付記
執筆者紹介 ----------99
CGS 所員リスト ----------100
第 5 号投稿規程 ----------102
編集後記 ----------109

Contents

Contents----------1

Research Papers

Gender, Identity and the "Elderly"
Richiko IKEDA----------3

The Role of the Villainess:
Women's Language in the Japanese Girl's Comic *Life*
Sumire TAKAHASHI----------17

Michel Foucault, and the Counter Discourses
of Contemporary Sexuality Studies
Kazuyoshi KAWASAKA----------39

Research Notes

Heterosexual Women who have Close Friendships with Gay Men
Yuji KATO----------61

CGS Activity Reports and Schedule
AY 2008 Activity Report----------73
Japan-UK LGBT Youth Exchange Project----------77
Minority Loneliness Crosses National Borders
The Japan-UK LGBT Youth Exchange Project
Akira MIYAMA----------85
Developing Self Esteem and Communication Skills----------89
AY 2009 CGS Activity Schedule----------97

Notes
Author Profiles----------99
Regular Members of the Center for Gender Studies----------100
Journal Regulations for Vol. 05----------102
Postscript from the Editor----------109

「高齢者」・ジェンダー・アイデンティティ[1]

池田理知子

1 はじめに

ドキュメンタリー・フィルム『花はんめ』(2004, 金) の舞台である神奈川県川崎市桜本にある「トラヂの会」は、毎週 1 回そこに集まるはんめ（おばあちゃん）たちの歌や踊り、そしておしゃべりや笑い声であふれる、そんな活気に満ちた場である。筆者がフィールド・ワークを行った東京都内にある「東京トラジ会」も、小規模ではあるが、同じように仲間が集い、おしゃべりを皆が楽しむ場であった。[2] ところが、そうした場にはなぜか「高齢男性」の姿がない。「高齢女性」の生き生きとした姿と「高齢男性」の「不在」は、なにもこうした「在日コリアン[3]」が集う場に限ったことではない。両者の対照的な姿は、あらゆるところで報告されている。いったい「高齢男性」の「不在」は何を意味しているのだろうか。

本稿では、男性の高齢期の生活に焦点を当て、そこでの問題とは何なのかを探っていく。高齢期への移行がスムーズだとされる「高齢女性」に比べて、現役退職後、他者との関係がうまく結べないとされる「高齢男性」であるが、その姿が私たちに突きつける課題とは、実はモダニティと深く関わっている。したがって、本稿の広義の主題はモダニティとジェンダーの関係性を解き明かすことである。

具体的には、湯本香樹実の小説『夏の庭―The Friends―』(1992)（以下、『夏の庭』と称す）に出てくる少年たちと 1 人の老人の交流を通して、検討を加えたい。『夏の庭』は、児童文学書に分類されており、中学生の読書感想文の課題になったり、教科書に推薦図書としてリストされたりと、[4] 広く読まれている。また、10 カ国以上で翻訳・刊行されており、米国図書館協会ミルドレッド・バチェルダー賞やボストン・グローブ＝ホーン・ブック賞を受賞するなど、世界的な評価も得ている。[5] さらに、この作品は映画化[6] および舞台化[7] もされており、児童文学という枠にとどまらない作品でもある。1 人の年老いた男性と少年たちの交流を描いたこの作品が幅広い支持を得ていることを考え、当該論文の主題を分析するテクストとして選ぶこととした。この小説の中には、ひと夏の交流によって、ぼくらのおじいさんと、おじいさんにとっての大切な友人である 3 人の少年、というそれぞれのアイデンティティがお互いにはっきりと意識されるようになる様子が描かれている。そして、それぞれが今まで見ようとしなかった自分に気付くことになる。このおじいさんと周りの人たちの変化を中心に、「高齢者」とジェンダー、アイデンティティの問題を考える。

2 モダニティ・効率化・「高齢者」

「ぼくはなかなか、おじいさんの顔をおぼえることができない。もちろん道で会えば、すぐにわかる。でも、家に帰ってひとりになった時思い出そうとしても、なんだか輪郭のぼやけた粘土の人形みたいで、はっきり思い出すことができないのだ」(湯本 , p. 38) と『夏の庭』に出てくる少年の 1 人、木山君はつぶやく。私たちは、自分にとって大して重要でない人や物は単なるカテゴリーとして捉える傾向がある。木山君にとってのおじいさんも、この時点では「おじいさん」というカテゴリーに属す 1 人に過ぎなかったのである。それは、他の 2 人、河辺君と山下君にとっても同じだった。身近におじいさんやおばあさんがいない 3 人にとって、「老人」とは遠い存在であり、人がどうやって死ぬのかを見届けようと、まるで理科の観察のための蛙をつかまえるのと同じように近所の老人を選んだのだった。

偶然捕獲した蛙と、たまたま選んだおじいさん。そこでの＜選ぶ／選ばれる＞という関係は、恣意的なものである。観察の目的さえ果たすことができるのなら、この蛙、このおじいさんである必然性はない。観察に適した種類や大きさであれば、別の蛙でも構わなかったはずだ。少年たちが観察の対象に選んだおじいさんも、近所に住み死にそうだといううわさがあり、彼らにとっては都合の良い相手であったわけで、仮に他に該当する者がいたとしたら、そちらを選んでも構わなかったに違いない。要は、当初の少年たちとこのおじいさんの関係は記号的だったのである。

記号的な関係とは、交換可能で機能が重視される関係である (Gebser, 1985; 池田 & クレーマー , 2000)。両者は目的を果たすためだけの結びつきであるため、その目的以外のつながりにおいては必然性がない。仮に工場のラインで働く人が怪我で作業ができなくなった場合、他の人員がその部署に配置されることによってラインをいつものように滞りなく動かすことができる。このように、1 人ひとりの労働者は機械の部品のような存在と見なされるのだ。効率が悪くなれば、いつでも交換されうる存在なのである。

さらに、記号化された関係の中では、強者と弱者の立場が揺るぎないものとなる。そこでは、機械を動かす＜搾取する側＝強者＞と、その機械の一部となって＜搾取される側＝弱者＞とに分かたれる。二項対立の図式が、こうした記号的世界の関係を象徴している。だが、実は一歩引いた地点から眺めると、どちらも交換可能な存在であることには変わりはない。恣意的な関係であるならば、両者をその位置にとどめておく必然性はないのだ。ただ、お互いにそれが見えていないだけなのである。

記号的関係は、現代における私たちと「高齢者」の関係にも当てはまる。現代社会においては、「高齢者」は機能が落ちて思うようには働けない存在で、社会のいわば「お荷物」として扱われる場合が多い。『夏の庭』のおじいさんもそうした存在として物語の当初は描かれて

いた。たとえば、「おじいさんはコタツに入っている。あいかわらず雨ばかり降って、ちっとも暑くならないせいだろう。でも、くもりガラスに押しつけられた赤っぽいコタツ布団は、なんだか僕を憂鬱にさせた」(湯本 , p. 23) と木山君に言わせるほど、おじいさんは季節からもまた近所からも見捨てられた存在だった。「もうじき死ぬんじゃないか」(ibid., p. 18) とうわさされているにも関わらず、誰も関わりあおうとしない、近所迷惑で困った存在としてのおじいさんであった。そうしたおじいさんを観察する木山君は、憂鬱にならざるを得なかったのである。当初のおじいさんの描写は、「高齢者」はまさに「問題の対象」として語られていることを思い起こさせてくれるのだ。

さらに、木山君が遭遇した病院での出来事が「高齢者」の社会における立場を私たちに確認させる。「おととい、目薬あげたばっかりじゃない。どうしてもうなくなっちゃうの。はっきり言いなさい。どうしておとといあげた目薬が、もうないんだ！」(ibid., p. 42) という診察室の中から聞こえてくる医者の声を聞いた木山君は、てっきり自分のような子どもが怒られているに違いないと思って「びびった」のだが、診察室の扉が開いて出てきたのは「小さなしわくちゃのおじいさん」だったのだ。『夏の庭』に出てくるこの医者は「高齢者」を子ども扱いしている。

いつから「高齢者」はこのように見下される存在となったのだろうか。それは、どうやらモダニティ（近代的なるもの）と関係しているようである。ギデンズ (1990/1993) は、モダニティは「およそ 17 世紀以降のヨーロッパに出現し、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式」(p. 13) と定義し、その特徴の 1 つに生産物と賃労働の徹底した商品化を挙げている。より商品価値の高いものを効率よく生産することが近代社会では求められ、そのためには生産性の高い労働力が望まれるのだ。そうなると、体力も生産性も相対的に落ちた「高齢者」は、近代社会では望まれない存在ということになってしまう。むしろ、「お荷物」ですらあると見なされることになる。

山中によると、日本では高度成長期である 60 年代を境に「高齢者」の広告での描かれ方が変わってきたという。[8] 高度成長期以前は、積極的で活動的な高齢者の姿が広告に登場していたのに比べて、60 年代以降は面倒を見てあげなければならない存在、「客体としての老人」へと変化してきたそうだ。たとえば、トヨタ車の CM では「老人の安全」がテーマになっているし、ある電話の広告では寂しい老人に話しかけてあげてほしいというメッセージが謳われているという。広告の変化の中にもモダニティと「高齢者」をまなざす視線の関係が見て取れるのではないだろうか。

さらに、現在盛んに議論されているのが、「問題の対象」である「高齢者」をどうやって面倒を見ていかなければならないのかという、いわゆる「高齢者」問題である。年金や介護保険

問題、福祉問題が語られる場合、こうした視点があからさまに現れるのである。たとえば年金問題では、世代間格差がこの先ますます広がっていくことが問題視されているが、そこには対等な関係としての両者の姿は見えない。若年層が「高齢者」層を養っていかなければならないとする視点のみで語られているのだ。

3 性差のパラドックス

では、「高齢者」はなぜ弱者としての「高齢者」像を自ら受け入れてしまうのであろうか。いつからそのような自分を受け入れてしまうのであろうか。

一般的に、「高齢期」への移行を危機的な状況として経験する割合は女性よりも男性に多いといわれている。その理由としては、性別役割分業を反映したこれまでの男女のライフコース・パターンの違いが、この時期の男性には生活上のギャップとして大きく作用してくるからだとされている (多賀 , 2005)。つまり、多くの男性はこれまで同じ企業に長年勤めてきて、しかも仕事が生活の中心にあったため、それがいきなりなくなるとどうしたらいいのか分からなくなるというのだ。現役時代は、収入や職業上の肩書きといった仕事に関わる要素がアイデンティティの中核を占めていたが、定年によってそれを一気に失うことになるのである。定年後も名刺に現役時代の肩書きを「元○○」といった表現で残したり、少しでも自分と関わりのある団体名を列挙したりする男性が多いのは、そうした喪失感から逃れるための戦略なのかもしれない。

歴史学者の樺山の表現を借りると、「高齢男性」は「実」と「虚」のベクトルの中であがいていることになる (樺山 & 上野 , 1993, p. 12)。「実」と「虚」とは、消費社会におけるプラスとマイナスのベクトル上の両端に位置するものであり、そこでは生産・消費活動に活発に参加する若者が「実」で、「高齢者」はその対極にある「虚」であると見なされる。肩書きのついた名刺にしがみつく「高齢男性」は、「虚」に移行したにもかかわらず「実」にとどまりたいという願望を持ち続けており、その葛藤に悩んでいる者といえる。そして、時にはその「実」への執着が思わぬ結末を引き起こしてしまうことにもなりかねない。次に紹介する事件は、筆者が思うには無意識のうちに「実」にしがみついていた男性の悲劇なのではないかと思う。[9]

数年前、引退した元大学教授がダンス教室でセクシュアル・ハラスメントの疑いをかけられるという事件が起こった。ダンスのパートナーに対する彼の振る舞いが許せなかったその教室のインストラクターとそこに通ってきていた女性数名が、彼の行為をセクハラだとして簡易裁判所に訴えたのである。パートナーである女性から彼女自身はセクハラを受けた覚えはないと言われたこの男性は、これは不当な訴えだと主張したのであるが、彼の主張は退けられ、原告らの訴えが認められた。彼が理解できなかったのは、彼の加害行為に対する被害者がパート

ナーの女性ではなく、彼の行為によって不快な思いをさせられた周りの女性たちだということだった。おそらく彼が周りとの友好な関係を普段から築いていれば、こうした訴えはなされなかったのではないだろうか。その友好な関係構築を阻んだのが、彼の元の肩書きとそこで身に付けた態度にあったのではないかと筆者は推測する。「実」と「虚」のベクトルのみしか見えずに、それにしたがって行動してしまうとこうした不幸な事件へと発展してしまう。そうならないためには、別のベクトルを導入する必要が出てくるのだが、このことに関しては後述する。

では、家庭内での男性の立場はどうなるのだろうか。退職後、家にいることの多くなった男性は、妻から「粗大ゴミ」扱いされるとよく言われる。性別役割分業に従った生活を営んでいた家庭ほど、そうなる確率は高いだろう。だが、この性別役割分業意識が妻を守ろうとする夫という形で、高齢夫婦間に現れる場合もある。たとえば、「痴呆」の妻を守ろうとする「高齢男性」の姿に、自らの男性性の補充を必死に行おうとする様子が顕著に見出せる (天田 , 2002)。2002 年 5 月に起こった老夫婦の心中事件を分析した天田は、この事件をヘテロセクシズムが引き起こした悲劇とみている。この事件においては、「周囲の差別的・侮辱的な眼差しから防御する行為」をとった男性とその妻の姿を「仲むつまじい」高齢夫婦として周りは評価したようだが、天田はこの行為を「自らの男性性の証明をする言動」と見なしている (ibid., pp. 12-13)。男性が家事や介護を引き受けることは、一見ジェンダー・フリーを実践しているかのように見える。そのため、「不可視化されたジェンダーの構造」がますます見えにくくなる。自らの役割遂行に限界を感じたこの男性が心中という選択をせざるを得なかったのは、異性愛主義に基づく性別役割分業に捉われすぎていたからとする天田の解釈は妥当であろう。弱音を見せないという男性としてのプライドが、他者に頼る、他者と関係を結ぶことをためらわせたのである。

男性の場合、家族のために外で一生懸命働くこと、家族を守ることが「男らしさ」の証明とされてきたし、そのことが逆に「高齢期」になって「弱点」として作用していることがここで引用した事例から見えてくる。一生懸命働き、そのことが家族を守ることだと信じてきた男性がこれまで置き去りにしてきたのが、生活圏における他者との関係だったのかもしれない。こうした関係性がまさに「高齢期」では重要になってくるのだが、引退したからといってすぐに新しい関係を構築することは容易ではないのだ。では、女性の場合はどうなのだろうか。

一般的に、老後の女性は男性に比べて生き生きとしていると思われている。だが、天野 (2003) によると、それはこれまで社会において「弱点」として作用していた「女らしさ」が、高齢期になって「利点」となっただけに過ぎないという。具体的には、以下の 3 つを天野は指摘している。子育てや家計のやりくり、近所づきあいなど「生活を創る」営みに主に従事していた女性が高齢期にさしかかったとしても、基本的に「創る」生活の流れは連続しているという。また、出

産や子育て、ポスト子育て期を経験してきた女性は、役割の変化にこれまでも柔軟に対応してきたので、老年期もその変化の 1 つとして捉えることができるという。さらに、上野 (1986) の「老人問題」に関する指摘を引用して、「愛される」存在として期待されてきた女性は、老後の日本社会における生き方の理想である「愛される老人」に同一化しやすいというのである。「愛される」とは、「自己主張せず、従順に」ということを意味しているという。結局、女性の方が社会の求める高齢期のライフスタイルにたまたま合っていたというだけで、ジェンダーの非対称性を保持したままでは「老い」の生き方に関して新たな方向性が見つかることはないのかもしれない。多賀 (2005) が言うように、「『女』という『二流市民』として社会の『周辺』に追いやられながらも逞しく生きてきた女性たちにとって、老人になったところで同じ『周辺』で生きつづけることに変わりはない」(p. 41) のである。

だが、すべての女性が「二流市民」として逞しく生きてきたわけではないし、「周辺」で生きることに疲れた女性が、高齢になったからといってその状況が相対的によくなるとは必ずしもいえない。『夏の庭』の 3 人の少年たちの母親たちの生活を覗くと、けっして逞しく生きているとはいえないし、こうした状態が続けば、老後が豊かなものになるとは到底思えない。木山君のおかあさんは夫が忙しくて家にいないためか、その孤独を紛らわせるためにアルコールに依存した生活を送っている。河辺君のうちは母子家庭で、息子にしっかり育って欲しいという願いが強く、必要以上に厳しく息子に接している。テストの成績が悪くてベランダの桟に縛られ、夜中にとなりのおばさんがやってきて解いてもらったりといったことがたびたびあるようで、河辺君はそのため少々萎縮しているようだ。山下君のおかあさんは魚屋を営んでいる夫に不満を持っており、息子の山下君にお父さんのようになってはいけない、とことあるごとに言っている。「おかあさんは、おとうさんみたいなちっぽけな魚屋になってどうするのって言うんだ。ろくなお嫁さんだって来ないわよって。だから勉強して、もっと違うことをしろって」(湯本 , p. 82) と言う山下君は、本当はおとうさんのような立派な魚屋さんになりたいと思っている。とてもこの 3 人の少年の母親たちが性別役割分業の範囲内ですら、生き生きと生活しているようには思えない。三人三様に「夫という存在」に振り回されているように思える。つまり、ヘテロセクシズムの＜生産／再生産＞がここでも行われているのである。

したがって、ヘテロセクシズムを脱構築するためには、別な視点を導入する必要がでてくる。そのための試みとして、まずアイデンティフィケーションについてみていくことにする。

4 アイデンティティとアイデンティフィケーション

まず、アイデンティティとは何かを考えてみる。通常、アイデンティティは自己の証明や同一化を示す言葉とされている。身分証明書を ID カード（アイデンティティ・カードあるい

はアイデンティフィケーション・カード）と呼ぶのも、そのカードに記載されている内容が自らを証明するものとなっているからである。また、ID カードの記載内容がめったなことでは変わらないように、アイデンティティはもともと安定し、固定し、一貫した何かを指していた。だが、今の日本社会では法的に結婚すればどちらかの苗字が変わるように、あるいは学校を卒業すれば学生証が ID カードとして使えなくなるように、ID カードの記載内容は固定したものでも一貫したものでもない。人の一生の間に変わることなどないと思われていた「性」についても、性同一性障害で悩む人たちの声を受けて、戸籍上の記載の変更がある一定の条件を満たせば認められるようになった。このように、アイデンティティは状況がかわれば変化するものなのである。

状況の変化によって変わるアイデンティティとは、自分とは際立って異なる他者と交わることによってはっきりとしてくるものである (池田 & クレーマー , 2000)。したがって、誰と交わるかによって変化するし、同じ相手であってもお互いが変わればアイデンティティも変わる。おじいさんの家をたびたび訪ねることになった『夏の庭』の少年たちにとって、おじいさんは特別な存在になっていったし、おじいさんにとっての少年たちもそうであった。また、木山君がおじいさんに教わったように梨を剥いておかあさんに食べさせる場面があるが、お酒ばかり飲んでいて何も食べようとしなかったおかあさんが梨を食べておいしいと感じた瞬間、木山君とおかあさんの関係は今までとは違うものになった。母親は自分の知らない息子をそこに発見したのである。

アイデンティティがお互いの関係性によって変わっていくということは、アイデンティティとは自分ひとりの力では変えることが難しいということでもある。仮に「在日コリアン 3 世」が米国の大学に留学して、そこで「日本人ではない」と主張したとしても、日本から来た留学生であればそうとしか見られないかもしれない。アイデンティティは他者の承認を含んでいるのである。新しい自分に生まれ変わりたいと欲しても、他者がそれを許さない場合が少なくない。他者のまなざしは規範を反映したものかもしれないのだ。アイデンティティとは、「ある秩序に従い、それを維持することに組み込まれているという状態」なのである (坂本 , 2006, p. 62)。所属が記載された ID カードが個人を管理するために機能するのはそのためだし、ホール (1996/2001) が言うように、ID カードは「お前は何者か」という支配側からの問いかけに答えるために発行されているものなのかもしれない。だが、一貫したアイデンティティを前提に、私たちを既存のカテゴリーに押し込めようとする力への抵抗は不可能ではない。それを可能にするのは、他者との＜コミュニケーション＝関係性＞であり、それによって一貫したアイデンティティに亀裂を入れることができる。お互いのアイデンティティが変わっていくのである。

規範に従うことを強いる力がアイデンティティに隠されているのであれば、バトラー(1990/1999) が言うように、「アイデンティティは、つねに状況において構成されるアイデンティフィケーションと考える必要がある」([condensed by] 坂本 , 2006, p. 62) のかもしれない。アイデンティティをつねに達成されていくパフォーマティブなもので、何者かになる過程と捉えるのである。

そして、その過程で重要となるのが、「語ること」なのかもしれない。鄭 (2003) は「語ること」の重要性について次のように述べる。

> 語ることにより、＜私＞の意志は、また＜自己＞から旅立つ。語るということは、今まで構築してきた＜自己＞との決別。＜私＞たちの解散。語ると同時に、新たな意味の空隙が生まれ、人は新たな＜私＞を発見する。(pp. 38-39)

つまり、語ることによって、他者が名づけようとするアイデンティティに抵抗する道が開けるのだ。そうすることによって、自らの異質性、内なる「外部」の発見が可能となり、これまで気付かなかった、あるいはあえて見ようとしなかった＜私＞に出会うのである。

5 可能性の模索

では、「高齢男性」はどのようにして自らのアイデンティティから解放されうるのだろうか。新たな自分の発見の可能性はあるのだろうか。『夏の庭』の少年たちとおじいさんの関係性の変化を手掛かりに考えてみたい。

8 月のある日、台風が来た。あらかじめ示し合わせていたわけでもないのに、3 人の少年はおじいさんのうちの庭のコスモスが気になったのか、おじいさんの家になぜか来てしまった。その夜、少年たちに戦争の話をせがまれたおじいさんは、自分の体験をぽつぽつと語り始める。嵐の夜を共にすごすという雰囲気がそうさせたのかもしれない。生き延びるために妊娠していた女性を殺してしまったこと、帰還後は妻の元に戻らなかったことなど、長い間封印していた話を少年たちにしたのだった。「聞かなきゃよかっただろ。こんな話」というおじいさんに、「そういうことは話しちゃったほうがいいんだよ、きっと」と河辺君が答える。おじいさんは驚いたような表情で、「そうか」と言って窓の外を眺めるが、外は雨が降り続いている。「泣いていた赤ん坊が眠りにつく前のように、時おり激しくしゃくり上げながら降り続く」雨は、おじいさんの心の中のようだった (湯本 , p. 125)。「まるで、袋につめてしまいこんでいたものを、おずおずととりだして見せるように……話し続けた」(ibid., pp. 126-127) おじいさんは、ここでようやく忘れ去ろうとしていた過去と向き合うことができたのである。自ら封印していた

＜自分＞と出会うのである。そして、それを可能としたのは少年たちとの出会いとその後の関係であった。

これまで誰とも交わろうとしなかったおじいさんが、さらに少年たちを驚かすような行動を取る。ある日、おじいさんに連れられて河原にきた 3 人はおじいさんがもと花火職人だったことを知る。その花火がきっかけで、河原にいたカップルとお好み焼き屋に行くことになるのだが、少年たちはおじいさんが楽しそうに他の大人とビールを飲みながら話をするのをはじめて見たのだった。これまで他人と打ち解けて話すことなどなかったおじいさんが、カップルの男性に向かって「そんなに（彼女が）大事なら、いっしょになればいいじゃないか」(ibid., p. 166) と言うのだ。そして、男が「そん時はさ、じいさん、でかい花火を頼むよ」(ibid., p. 167) というリクエストに、「ひき受けた」と答えるおじいさんだった。これまで他者と関係を結ぼうとしなかったおじいさんが、徐々に変わり始めている。他人の人生にまで介入しようとしているのだ。そんなおじいさんを 3 人は、「すごく頼もしい」と感じているのだった。

おじいさんと付き合うようになって、少年たちの周りを見る視点にも変化が生じ始める。たとえばサッカーの合宿に行った時、そこにいたコーチのおばあさんについて、木山君はこんなことを言っている。「ぼくは去年もおととしも、このおばあさんに会っているのだけれど、去年まではなんとなく『お年寄り』というふうにしか見ていなかったことに気づいた。でもそういう見方はちょっと違うんじゃないか、と思う。つまり、コーチのおばあさんは、ぼくたちがいつも会っているおじいさんとはまるで違う。当たり前だ。もっともっと歳を取っているし……」(ibid., pp. 182-183)。毎年合宿に来ているにもかかわらず、初めてこのおばあさんをコーチのおばあさんとして認識したことを素直に驚いているのである。また、ことあるごとにおじいさんならどう考えるだろう、と自問自答している少年たちの姿も小説には描かれている。おかあさんが再婚しようとしている河辺君が、おかあさんの決意を受け入れたのも「もしおじいさんだったら、なんて言うかなって」(ibid., p. 207) 考えたからだった。おじいさんの考えを＜想像＞することで、これまでにない関係を＜創造＞しようとしているのだ。これまで＜想像＞することのなかった関係を＜創造＞しようとする試みこそが、アイデンティフィケーションに他ならない。

そして、少年たちはこの＜想像／創造する力＞を生活者として生き生きと毎日を送るようになったおじいさんとの関係から学び取っている。＜コミュニケーション＝関係性＞が＜想像／創造する力＞を引き出したのだ。

「おじいさんは白い座布団カバーに霧を吹きかけて、熱いアイロンを当てる」(ibid., p. 148)。おじいさんは、家のことは何でも 1 人でやれる。定年後に「粗大ゴミ」扱いされる男性の姿とはほど遠い。生活者としてのおじいさんの姿がそこには描かれている。

生活者は、＜実／虚＞のベクトル上には位置しない。それを無理やりそのベクトル上に置こうとするから、主に生活者として生きてきた女性が「周辺」に追いやられてきたのかもしれない。どうやら別の視点を導入する必要がありそうである。１つの試みとしては、先に引用した樺山が提唱している＜遊＞という考え方である (樺山 & 上野 , 1993)。高齢者が生み出す世界を＜遊＞と捉えると、そこでは権威や富は「たわむれの地位と財産」に姿を変えるという。生活することが＜遊＞であれば、女性に対する視点も、「高齢者」に対する見方も変わるのではないだろうか。効率が悪いとしてこれまで退けてきたものが、手間隙かけることにむしろ面白さを見出すとなれば、見方がまるで変わってくる。実益を生むかどうかではなく、「面白い」、あるいは「楽しい」かどうかが問われることになるのだ。それが生活を楽しむということなのではないだろうか。

そして＜遊＞の世界では、「女性」や「男性」、「高齢者」、「子ども」といったアイデンティティはかく乱される。「高齢者」らしく振舞うことは楽しくないし、「子ども」らしく振舞うことも当たり前すぎて面白くない。『夏の庭』のおじいさんは少年たちを子ども扱いしない。自分の大事なものを託すに値する友人として信頼する。かつて妻だった女性を訪ねて自分を驚かせてくれた少年たちに、口にはださないが感謝している。だからこそ死後の自分の財産を彼女に渡してくれるよう、少年たちに頼んだのである。おじいさんと少年たちの関係には、大人と子どもといった力関係はない。規範から自由になった世界、＜遊＞の世界における関係性なのかもしれない。＜遊＞の世界を＜想像／創造＞することは、一貫したアイデンティティ、秩序に従わせるために機能するアイデンティティに亀裂を入れる試みに違いない。

Reference

天田城介 . (2002).「老夫婦心中論 (1)―高齢夫婦介護をめぐるアイデンティティの政治学―」.『立教大学社会福祉研究』, 22, 1-17.

天野正子 . (2003).「『生と老い』の自画像―性差別のパラドックスを超えて―」. In 天野正子 & 木村涼子 (Eds.),『ジェンダーで学ぶ教育』(pp. 266-282). 東京 : 世界思想社 .

池田理知子 . (2005).「多様化する社会における高齢者問題―在日コリアン高齢者のためのデイケア・センター『東京トラジ会』を通して考える―」.『異文化コミュニケーション』, 8, 87-104.

池田理知子 ., & クレーマー , E. M. (2000).『異文化コミュニケーション・入門』東京 : 有斐閣 .

上野千鶴子 . (1986).「老人問題と老後問題の落差」. In 伊東光晴 , 副田義也 , 日野原重明 , 河合隼雄 & 鶴見俊輔 (Eds.),『老いのパラダイム』(pp. 111-138). 東京 : 岩波書店 .

樺山紘一 ., & 上野千鶴子 . (1993).『21 世紀の高齢者文化』. 東京 : 第一法規 .

金聖雄 . (Producer). (2004).『花はんめ』[Motion picture]. 日本 : 花はんめ製作・上映委員会 ., & ヒポコミュニケーションズ .

坂本佳鶴恵 . (2006).「ジェンダーとアイデンティティ―ゴッフマンからバトラーへ―」. In 江原由美子 & 山崎敬一 (Eds.),『ジェンダーと社会理論』(pp. 51-63). 東京 : 有斐閣 .

多賀太 . (2005).「男性のエンパワーメント―社会経済的変化と男性の「危機」―」.『国立女性教育会館研究紀要』, 9, 39-49.

鄭暎惠 . (2003).『＜民が代＞斉唱―アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』. 東京 : 岩波書店 .

湯本香樹実 . (1994).『夏の庭―The Friends―』. 東京 : 新潮社 .

Butler, Judith. (1999).『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子 , Trans.). 東京 : 青土社 . = (Original work published 1990). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.

Gebser, Jean. (1985). *The Ever-Present Origin*. (N. Barstad & A. Mickunas, Trans.). Ohio: Ohio University Press. (Original work published 1949)

Giddens, Anthony. (1993).『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結―』(松尾精文 & 小幡正敏 , Trans.). 東京 : 而立書房 . = (Original work published 1990). *The Consequences of Modernity*. California: Stanford Univ. Press.

Hall, Stuart. (2001).「誰がアイデンティティを必要とするのか？」. In Stuart Hall & Paul du Gay (Eds.).『カルチュラル・アイデンティティの諸問題―誰がアイデンティティを必要とするのか？』(宇波彰 et al., Trans.) (pp. 7-35). 東京 : 大村書店 . = (Original work published 1996). *Questions of Cultural Identity*. California: Sage Publications Ltd.

Footnote

[1] 本稿は、『メディア・コミュニケーション論』（ナカニシヤ出版、2009 年刊行予定）のために書かれた論文を大幅に加筆・修正したものである。

[2]「東京トラジ会」の活動に関しては、池田理知子「多様化する社会における高齢者問題―在日コリアン高齢者のためのデイケア・センター『東京トラジ会』を通して考える―」を参照されたい。

[3]「在日コリアン」とは、主に 1945 年以前に日本にやってきてそのまま定住した 1 世と、その子孫で日本で生まれ育った者を指す。「在日韓国・朝鮮人」も同義で使われるが、ここでは、大国によって分断された国家体制を反映した言葉でもあり得るこの言葉の使用は避け、「在日コリアン」を使用する。

[4] 平成 14 年度版『現代の国語』2 年 資料編（三省堂）や光村出版のホームページにある推薦図書のリストに載せられている。

[5] 日本児童文学者協会新人賞と児童文芸新人賞も受賞している。

[6]1994 年に劇場公開された。監督は相米慎二、主演は三国連太郎。

[7]2002 年に劇団たんぽぽが上演。脚本は久野由美で、演出はふじたあさや。

[8]http://www.jca.apc.org/pmn/event99/929.html

[9] 加害者から筆者に相談が寄せられた事件。セクハラ関連の著作がある筆者に原告らの訴えが不当であることをサポートして欲しいために相談が寄せられたと思われる。筆者は、この男性自身が勘違いしていることを指摘した。

Gender, Identity and the "Elderly"

Richiko IKEDA

It is said that the transition to old age is comparatively smoother for women than it is for men. "Elderly" men tend to find it difficult to form bonds with others after retirement. This is a theme which is in fact deeply related with modernity. This paper aims to elucidate the issues involved by focusing on the lifestyles of elderly men. Specifically, the paper considers issues of gender and identity that concern the elderly, through a study of the interaction between one elderly man and a group of boys in a novel by Kazumi Yumoto called *Natsu no niwa - The Friends*. This is a tale of the relationship between an elderly man and three boys over the course of one summer. Through their interaction, they each become aware of their respective identities: the man is considered by the boys as *bokura no ojiisan* (our granddad) while the man sees the boys as precious friends. The novel depicts the process of their self realization as they become aware of a part of themselves that they had not even tried to see before. This paper focuses on the changes undergone by the old man and the people around him. Through this old man's life, I unravel the relationship between modernity and gender and aim to elucidate clues for constructing an all new concept of gender.

Keywords: modernity, identity, identification, perspectival world

悪女の「役割」――少女マンガ「ライフ」にみる少女の「女ことば」――

高橋すみれ

「仲むつまじいわねぇ／正義のヒロインちゃんたち／あんたの正義なんかこの手で塗りつぶしてやるわ／真っ黒にね……!!」(Vol. 11, pp. 51-3）[1]

これは少女マンガ連載「ライフ」40 話の最後の場面で、ヒロインとその親友に向かって、一人の少女、安西愛海（あんざいまなみ）が発する言葉である。廊下の向かい側からやってきた彼女は、手を拭っていたハンカチをヒロインに投げつけようとする。この回の最後の頁では、その黒いハンカチを挟んで不敵な笑顔を浮かべる愛海の姿と、ヒロインの衝撃を受けたような表情が対置されている。ヒロインの「正義」を真っ黒に「塗りつぶす」と宣言するこの愛海の言葉は、ここではヒロインを応援する読者の不安や期待を話の続きに向けて掻き立てるかのように響く。

「ライフ」は、月刊少女マンガ誌『別冊フレンド』上で 2002 年から連載されているすえのぶけいこのマンガ作品である。2008 年 8 月現在で連載 70 回を超えている同作は、学校でいじめられる立場になったヒロインが、次々と困難を克服していく過程を描いている。長期に及ぶこの連載において、ヒロインをいじめるクラスメイトの中でも、この愛海という少女の存在感は際立ってくる。彼女は次第に、みずから策略をめぐらし、周囲の登場人物たちを巻き込みながら、ヒロインを陥れるような行動を取っていくようになる。

物語の中でのこうした愛海の描写が垣間見られるのが先の引用である。狡猾さや他人に向ける敵意・憎悪が強調されるような表情描写のもと、彼女は次第にこの物語の中で「正義のヒロイン」に対してみずから悪を名乗り出、挑発するようなふるまいを見せるようになる。注目したいのは、彼女の言動がこのような変化を帯びてくる過程で、先のせりふにみるように彼女が「わね」や「わ」など、従来女性が使うと見なされている文末詞を用いるようになることだ。

近年ではこれら「わね」や「わ」をはじめとする「女ことば」の文末表現の一部は、実際には現代の若年層の女性に使われる傾向にないと言われている。実際に現代の女性のインフォーマルな会話を分析した水本 (2006) によると、30 代以下の女性の会話では、「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「体言＋ね」「体言＋よ」「のよ」「のね」などの文末詞はほとんど使われていないという。　しかし、これらの実用上衰退しつつある表現を愛海という少女はテクスト上で多用している。[2]

興味深いことに、「ライフ」の中ではこれらの文末詞が愛海と同世代の少女キャラクターの言葉にはほとんど出てくることがなく、これらを継続的に用いるのは教師など年上の女性に限られている。また、愛海という登場人物は長期に渡る同連載のごく初期から登場しているが、

はじめから一貫してこのような表現を使い続けているわけではない。物語の中のある時期から、ある状況において彼女はこれらを使い分けるようになっていく。同連載が長期に及ぶものだという点からみると、「ライフ」におけるこのような愛海の言葉遣いの変化は、彼女の人物像の変容や、作中の他の少女たちと彼女の描写の差異化に寄与しているように考えられる。だが、そのために一時期から特殊な言葉遣いが採用されるようになったと考えるならば、なぜそれは女性が使うと考えられている「女ことば」であり、また同時に周囲の少女キャラクターにも使われていないような表現でなければならなかったのだろうか。このような問いのもと、本稿はこの連載少女マンガ「ライフ」における愛海という一登場人物の言葉遣いの変化に注目する。

フィクションの中の「女ことば」を扱う先行研究では、「女ことば」というカテゴリーと社会や文化の中で構築される女性のイメージとの関係が注目されてきた。現実で実際に女性によって話されているか否かに関わらず、「女ことば」は女の話し方としてのみならず、女性の言葉遣いの規範としても認識されるものだ (中村 , 1996/2001/2007)。そうした認識が強化されていくのは、フィクションの中の「女ことば」が、「やさしい、おとなしい、かわいい、あるいは、上品な女」などの望ましい「女らしさ」についての知識や規範を受容者に刷り込んでいくからとも考えられる (佐竹 , 2003, p. 56)。その一方で、近年見直されつつあるのが、キャラクターがコンテクストに応じて「女ことば」を使い分けることの効果である (因 , 2003/2005/2006; 山路 , 2006)。「女ことば」の意味や機能を登場人物の発話意図のもとで、あるいはテクスト上の表現との関連のもとで理解しようとするこのような視点からは、フィクションにおける「女ことば」が必ずしも女性に望まれる柔らかさや上品さといったイメージに結びつくものではないという点が注目されている。しかし、フィクションの中の「女ことば」を扱うこれらの先行研究においては、言語使用とフィクションの物語構造との関わりは軽視される傾向にあった。[3]

本稿は愛海という登場人物によって用いられる「女ことば」の意味を、「ライフ」という物語テクストのもとで読み解くものである。しかし、本稿は「女ことば」が「女らしさ」の規範を表現するものか否か、また「女ことば」が体現する「女らしさ」とは何であるかを厳密に追究するものではない。むしろひとつの物語の中で、ある発話者が「女ことば」の使用によってどのような女として構築され、物語世界のなかにどう位置づけられるのかを検討しようとするものである。この物語の中で、愛海という少女は「女ことば」をある意味状況に応じて、また時に意図的に用いているように見える。しかし、その言語使用は同時に、愛海という登場人物が物語の中で描写される過程と背中合わせに展開している。もしも「女ことば」の使用が話者のパーソナリティ[4]の構築や、また何らかのイメージやステレオタイプの形成に関わるものならば、物語の中ではそれが多層的に進行していくことになる。

本稿ではこの物語テクストにおける言語コミュニケーションの多層性に注目し、愛海の「女ことば」使用がテクスト上で担う意味を明らかにしてみたい。[5] また、本稿がこの「ライフ」という物語テクストを扱う目的は、同連載が少女マンガ誌において読者の人気を得、またとりわけ少女の学校生活を描いたものとして話題を呼んだということにも関わっている。同連載は2006 年度に講談社漫画賞を受賞し、そのコミック単行本も 2008 年には発行「累計 850 万部」を超えたと公表されている。[6] こうした人気を受けて「ライフ」は 2007 年夏にフジテレビで連続ドラマ化もされている。連載マンガ「ライフ」における一登場人物の言語使用を取り上げ、その意味を多層的に分析するという本稿の試みが最終的に目指すのは、この少女間の葛藤を描き反響を呼んだ連載テクストのフィクション性そのもの、およびそれに介在するさまざまな力関係に視野を開くことである。

1 物語の中の「女ことば」

連載少女マンガ「ライフ」の登場人物である愛海、および彼女によって発される「女ことば」の意味を解釈するために、本節で注目するのは物語の展開とその中で繰り広げられる人間関係との関連である。「ライフ」では学校におけるいじめを描いているが、次第に設定が大掛かりなものとなり、一時期に急な展開を見せ、攻撃描写が激化していく。それゆえ、物語の中での登場人物の位置づけや登場人物間の関係性が大きく変わることもある。この「ライフ」において愛海という少女は、はじめはヒロインの親しい友人として描かれる。しかし彼女はヒロインが自分の恋人を横取りしようとしていると誤解し、他の友人たちと一緒になってヒロインを攻撃するようになる。さらに彼女は、ある時期から周囲の少女たちと連帯しての攻撃とは別の形で、ヒロインを苦しめようと個人的に企むようになる。このような連載の過程で愛海の人物描写は大きく変化を帯びてくる。この連載のある時期から愛海は「女ことば」を使い、また状況に即して意図的に使い分けているように見えるが、こうした愛海の言葉遣いの変化には、物語が経る展開や、物語中の錯綜する人間関係というコンテクストが関与している。[7]

中村 (2007) のように「女ことば」が発話者のパーソナリティを構築するような資源だと考えるならば、愛海の用いる「女ことば」はこうした物語の展開や複雑化する人物間の関係を読者に提示する上でも機能していたとも考えられる。金水 (2003, p. 205) は「特定の人物像」と結びつく形で想起されるような「特定の言葉遣い」を「役割語」と呼び、テクスト上で虚構のキャラクターが用いる言葉の特徴と、文化的ステレオタイプとの関連に議論を開いている。ある特徴をもつ言葉遣いによって何らかの人物像がイメージされるのは、その表現に特定の人物カテゴリーに対する私たちのステレオタイプ的知識が強固に結びついており、この関連性のもとで特定の人物像が認識されるからである。山口 (2007, p. 22) は「物語内の会話においてあ

る登場人物が別の登場人物に向けて発した発話」を「微視的伝達」、その「読者（観客）に向けられた」面を「巨視的伝達」と呼び、虚構の物語における役割語の機能について次のように述べている。

> 役割語を話す人物は筆を割かずともどのようなキャラクターなのかステレオタイプ的に把握することができる。その分、作者も読者もストーリー展開に集中できる。つまり、通り一遍のステレオタイプ的把握になろうとも、役割語は物語を効率よく提示するという巨視的伝達の要請に裏付けられているのだ。(山口 , 2007, p. 23)

役割語はステレオタイプに基づいた人物像のコードに依拠することで、ストーリーを読者の前に「効率よく提示」するのに貢献する。そのため、会話表現としては不自然な部分を含んではいても、読者のイメージに沿ったわかりやすい形で物語を提示することができるのだ。このような面から見ると、本稿の冒頭で挙げたような愛海が唐突な描写（彼女がヒロインに突然ハンカチを投げつけた後、二人の顔が対置して描かれるなど）のもと、日常会話としては不自然な表現（本稿の冒頭で挙げた「正義のヒロインちゃん」、「正義」を「塗りつぶしてやる」、など）とともに「女ことば」を用いるようになる過程は、言語を用いる愛海自身の意図や心境にのみ注目するのでは十分に解釈できないと思われる。こうした物語における演出の変容を考慮に入れるならば、むしろ愛海の多用する「女ことば」は、読者に物語世界を効果的に示すために用いられるレトリックの一部として機能していたと考えられないだろうか。[8]

この観点のもと、以下では愛海の用いる「女ことば」の意味を、ストーリーの展開と密接に関連しあう二つの次元で捉えていこうと試みる。物語の中の人間関係において愛海が「女ことば」を使い分ける文脈を検討する「微視的」な面からは、愛海の「女ことば」の使用が物語の中での彼女のふるまいや、彼女の置かれた状況とどのようにかかわっているのかを明らかにできる。また、テクストにおける登場人物の位置づけと「女ことば」との関係を見る「巨視的」な面からは、愛海の「女ことば」がどのようなイメージと結びついた上で物語世界が理解されるのかを検討することができる。しかしながら、これらの二つの側面は、相互に関わりあうものでもあることを忘れてはならない。以下第 2 節、第 3 節ではこの「女ことば」が用いられる場と状況の重なりに留意しながら、テクストで愛海が用いる「女ことば」の意味を「微視的」な側面、「巨視的」な側面の順に検討していく。

2 彼女の「戦略」――「微視的」にみる愛海の言葉――

愛海は物語のどのような段階において、どのような状況で「女ことば」を多用するようになるのか。それを見ていくための前提として、まずは連載初期における「ライフ」の物語展開を、物語の一登場人物としての愛海の主観に寄り添う形で追ってみよう。愛海が初めて登場するのは高校生になったヒロインの生活を描きだす第 2 話である。なかなかクラスになじめないヒロインの椎葉歩（しいば あゆむ）に、人気者の愛海は明るく声をかけ、彼女と友達になろうとする。愛海には、ルックスもよく成績も良い佐古克己（さこ かつみ）というボーイフレンドがいるが、キス以上になかなか進展しない彼との関係にやきもきする気持ちを、歩だけには打ち明けるようになる。そんな中、突然彼女は克己から別れを切り出される。そのショックから精神的に不安定になり、学校を休むようにもなる。しかし後で歩に説得されたという克己が復縁を申し出てくる。このことで愛海は歩に感謝し心を許すが、次第に歩のふるまいに不信感を抱くようになる。そんな中、周囲の少女たちの話を聞き、歩が克己と肉体関係にあるらしいとわかる。自分が一度は心を許した歩が自分の恋人を横取りしようとしていたのを許せない愛海は、自分に同情する少女たちとともに、ヒロインを攻撃するようになる。しかし、歩は彼女たちがいくら攻撃してもなかなか屈しようとしない。それだけでなく、自分たちが目の敵にしているクラスメイトの羽鳥未来（はとりみき）とヒロインが友情を育み、またヒロインに対する自分たちの攻撃を非難する生徒も出てくるようになり、愛海は苛立ちを抑えきれない。そこで彼女はこの状況を変えるために、他校の男子学生と会うようになる。

これは主に学校内で愛海と周囲の少女たちが歩に対して攻撃を行っていくという、23 話までの流れである。藤井 (2007, pp. 62-4) は「女の子言葉」を使わず「男っぽい言葉」を使うようになった現代の少女像と対比する形で、愛海が「「女性は弱くて守ってもらうもの」というジェンダーに乗っか」っていると述べる。その上で特に「カツミの前だけではすごくかわいくふるまう」彼女に「王子様的な存在の人に愛されたい」という考え方があると指摘されている (藤井 , 2007, p. 64)。しかし、実際にここまで見てきたストーリー展開における愛海の言葉遣いにのみ注目すると、愛海は他の友人らといるときや歩に対して話すときですら、克己といるときとさほど言葉遣いが変わることはない。

他の少女たちの話し言葉と比べてみると、ここまでの愛海の話し方の特徴には文末の言葉を伸ばすこと、および文末にくる文字の母音にあたる音が小さく書かれて付されていることなどが挙げられる（e.g.,「アユムはかわいーよォ？／マナねー／最初話しかけたとき思ったもん !!」(Vol. 1, p. 121)）。また、「女ことば」に分類される文末詞の中でも「の」「なの」、また訴えや甘えを表現する「もの」を撥音化した「もん」などが多用されている。気分が高揚しているときなどは「♡」「☆」「♬」などの記号を文末に伴う場合があり、克己との会話に特に多

用されるが、これは歩や他の友人たち、また他の男子キャラクターに向けられた発話にもみられる。もしもこのような愛海の言葉遣いが「かわいくふるまう」「弱くて守ってもらう」ようなパーソナリティに関わっているとするならば、その言葉遣いやふるまいは克己以外の男性やクラスメイトたちの前など他の人物の前でも維持されていることになる。ここまでで彼女の言葉遣いに大きく変化が見られるのは、彼女自身が歩の前で怒りを爆発させたときの、「男ことば」と言われるような断定調の言葉や直接的な命令形が用いられる部分くらいである（e.g.,「黙れ」「一本だけでも飲ませてやる・・・・・・」(Vol. 4, pp. 56-60)）。

これらの「かわいくふるまう」「弱くて守ってもらう」というパーソナリティに結びついた愛海の言葉遣いを、以降の議論では便宜上「女の子ことば」と呼ぼう。[9] 愛海の「女の子ことば」と性格は、彼女の取り巻きである 4 人の少女たち（エミ、チカ、イワちゃん、ヒロ）の言動と部分的に対照をなす。彼女たちは同意を求める場合や推測する場合の「だろ」や「だよな」、要請をする際の命令形「しろ（よ）」、「だ」で終わるような断定的な表現、「〜ない」という否定を表現する場合の「〜ねー」など、「男ことば」と見なされるような表現を多用する。上述のストーリーの過程で、彼女たちは歩に一度克己を横取りされたかわいそうな愛海を庇護する立場にあり、彼女にかわって堂々と歩を非難し、歩に対して攻撃を行っていく（e.g.,「なに言ってんだよ !! イミわかんねー」「んなことするワケねーだろ !!」(Vol. 4, p. 52)）。

先に述べたように、物語が進むにつれクラスの中では、これらの友人たちと愛海が歩に行う攻撃を批判する人物も出てくる。そしてちょうどその頃、愛海は他校の男子学生である狩野アキラに関わるようになる。アキラは不良グループのリーダー的存在であり、愛海に好意を持っている。アキラは愛海の依頼を受けて 26-27 話では歩と未来を拉致するが、その後歩と未来を監禁した廃墟が炎上し、彼は逮捕される。

興味深いことに、愛海が継続して「女ことば」を用いるようになるのは、このアキラというキャラクターが物語の主軸に介入してくる頃からである。愛海がアキラと関係を持ち、彼に歩を襲うように依頼するにいたる 23-25 話を境に、愛海の発話には時に「のよ」（e.g., 23 話「なんでカラオケ BOX でヤッちゃわなかったのよ」(Vol. 6, p. 156)）、「わよね」（e.g., 25 話「わかってるわよね」(Vol. 7, p. 72)）などの女性文末詞が見られる。また、これらのエピソードの後で再び歩と未来が学校に戻ってきた 33 話以降の展開では、愛海の発話には現代口語では衰退の傾向にある「女ことば」の文末詞「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「わよね」「体言＋ね」「体言＋よ」「のよ」「のね」[10] などが多用されるようになる。

この 23 話から 33 話以降の物語においては、愛海が二面性をもつ少女として描写されている。この時期に愛海のパーソナリティに生じる変化を具体的に検討するために、その変化の契機と考えられる 23-24 話のエピソードを取り上げてみよう。23 話で愛海と肉体関係を持った

アキラは、24 話のはじめに克己を襲っている。この 24 話では、克己が暴漢に襲われたという知らせが広がる学校で、愛海は涙を流して悲しむようすを見せる。このような愛海のようすと、周囲の少女たちが愛海に同情しながら無表情な自分を非難するようすに、歩は嫌気がさし、「ざまあみろ」と呟く。その行いは男子をも含むクラスメイトたちの反感を買い、歩が愛海をいじめているのだという噂すら呼ぶ。しかし悲しんでいたかに見えた愛海の携帯電話には、克己を襲った場での写真を添付した「かわいそうなお姫様へ　悲劇のヒロインにはなれたかい？」というアキラからのメールが届いている。

このエピソードにおいて、愛海はクラスメイトや教師などの前では被害を被ったかわいそうな立場を演じる一方で、彼らの見えないところで歩を攻撃することに成功している。アキラからのメールにある「悲劇のヒロイン」のごとく、クラスメイトや担任教師の目から見ると、愛海は傷ついた恋人を心配する状況にあり、同情されるべき存在である。周囲の人物が彼女に同情するのは、彼らにとって、愛海が純粋で従順に克己を愛しているように見えるからだ。そしてそのような愛海と歩を対置するがゆえに、彼らは歩を非難する。特に周囲の少女たちの中では、歩が克己に横恋慕しているという認識がある。そのため、克己の危機にも平気な顔でいる歩が薄情に見えるのだ。さらに、彼らにとって愛海の苦しみも知らないようにふるまう歩は非道ですらあり、愛海に対して悪意を持っているようにすら見える。この周囲の目によって愛海は再び「弱くて守られるべき」立場として支持を得、歩は非難されて当然と見なされる立場になる。一方、彼らクラスメイトたちの知らないところで愛海は克己以外の男と関係を結び、その男に克己を襲わせている。さらにその行いを通して周囲の人物に歩を非難させることに成功するばかりか、歩にさらなる攻撃を加えようと画策している。このように、愛海は皆の前で「弱くて守られるべき」立場に居続けることで、周囲の人物の支持を得ようとしている。そして同時に彼女は人前で「弱くて守られるべき」存在としてふるまうことによって、歩をより激しく攻撃するという自分の意図や策略を隠蔽しているのだ。このような自身のパーソナリティの操作に基づいた愛海の複雑で巧みな策は、アキラの登場によって可能になったと言える。[11]

33 話以降の展開に見られる愛海の「女ことば」の多用は、このアキラが物語の舞台から退いた後に、再び学校での「いじめ」の物語を描いていくための必然性と関わっているように見える。これまでの展開を踏まえ、愛海が歩を攻撃していくというストーリーを再び学校を舞台にして描いていくためには、愛海は先述したようなパーソナリティの使い分けを行っていかねばならない。皆の前で愛海は「かわいい」存在、「弱くて守られるべき」女の子でいることによって周囲の支持を集めようとする。彼女がそのようなパーソナリティを維持し、歩に対して強者の立場でいるためには、自分が歩に攻撃されていると周囲に思われていなければならない。そのため、彼女が歩に対してとる攻撃的な態度は、それを示したところで彼女自身の立場が脅か

されることのないような状況でのみ表現される。愛海が同様に攻撃性を表現するときの言葉遣いで、特に彼女が激情に駆られたときに使う先述の「男ことば」は、この「意図的」か否かという点で彼女の「女ことば」の使用と異なると言える。

実際に愛海の「女ことば」の使い分けの例を、35 話と 36 話の描写に見てみよう。以下（A-1 ～ 3）、（B-1 ～ 4）の例では、35 話、36 話で各々数ページに渡って連続して愛海のふるまいが描かれていく頁での彼女の言葉を抜き書きしたものである。

「役者」と題した 35 話から引いた以下の言葉は、アキラたちによる歩と未来の拉致に愛海が関与しているのではないかと、歩が愛海を問い詰めている場面のものである。先に触れた 24 話では、歩は周囲の状況に耐えかね、愛海に対して「ざまあみろ」という言葉を発していた。その後、愛海は歩がこれから克己よりも酷い目に遭うのだという謎めいた言葉を彼女に返している。33 話で歩は愛海のこの不吉な言葉を思い出し、さらには自分を襲った男と愛海が知り合いだと聞き、愛海が自分を陥れようとしたのではないかと思うようになる。廊下にいる愛海を歩は呼び止め、自分たちの拉致に対する彼女の関与を問う。

（A-1）「言いがかりはやめてくれる？／迷惑だわ」(Vol. 9, pp .130-1)
（A-2）「・・・・・・・・・ ／ひどいよ ・・・・・・ ／あれはアユムにざまあみろなんて言われて ・・・・・・ ／くやしくて言っただけなのに ・・・・・・ ／たったそれだけのことでマナが犯人だって言うの ・・・・・・ ？」(Vol. 9, p. 134)
（A-3）「マナの予言は必ず当たるのよ／これからもずっとね」(Vol. 9, pp. 136-7)

歩に対して愛海が（A-1）のように答えるとき、頁上では歩と愛海の二人のみが描かれている。続く 2 頁の間では、かつてほのめかしていたように愛海が自分たちを陥れようとしたのではないかと歩が問い詰め、二人が揉み合っている。そのうちに廊下に他の学生たちが数人出てくるようすが描かれる。すると突然愛海は（A-2）のように言葉遣いを変え、泣き出し始める。その次には廊下に出てきた学生たちが、災難を「人のせい」にしている歩を非難し、愛海を「かわいそー」だというようすが描かれる。しかしその後、涙を拭って立ち去ろうとするかに見えた愛海は笑みを浮かべ、すれ違いざまに（A-3）のように、今回の事件と自分の関与ばかりでなく、今後も歩を陥れることをほのめかすような謎めいた言葉を彼女に告げる。

（A-2）を挟んだ（A-1）と（A-3）において、愛海は女性文末詞「わ」、「のよ」を用いている。（A-1）と（A-2）のいずれにおいても、愛海は事件についての自分の関与を否定する。しかし（A-1）では高圧的な態度を取っているのに比べ、廊下に他の生徒たちが出てきた（A-2）では、愛海が初期から用いている「の」という文末詞や、各々のフキダシに多く含まれた間（「・・・」）

などが泣き出す彼女の言葉に幼さや非力さを漂わせている。その言葉に反応するかのように周囲の学生たちが「かわいそー」な愛海を擁護し、一方の歩を非難しだすと、（A-3）で愛海は今後も歩に対して危害を加えることを宣言するかのような、挑発的な態度を示す。こうして愛海は自分が憎む歩に対しては強者としてのふるまいを見せつけ、他の人の前では弱者を装い、彼らの同情を買って歩への非難を促している。

さらに、「陰謀」と題された 36 話では、担任の教師と父親の前で、愛海が器用に言葉を切り替えるようすが見られる。前の二段で示した 35 話の展開の後半では、愛海は歩に攻撃を受けたと装い、保健室に運びこまれる。保健室にようすを見に来た愛海の取り巻きの一人、ヒロ（廣瀬）は、愛海の策略を知ってしまったゆえに、彼女から脅される。その際愛海はヒロを威嚇するように保健室を荒らしている。その後を描く 36 話では、愛海と歩の担任教師である戸田が、愛海が保健室から歪んだ笑みを浮かべて出てくるのを目撃し、さらに保健室の有様を見て驚愕するようすがある。以下に抜き出した（B-1 ～ 3）は、その後の一連の行いの中で愛海が発するものである。

> （B-1）「もしかして　アレ？／アレ見たんですか先生っ!! ／もー超――びっくりしましたよぉ／ ･･･ だれかいるのかなーと思って ･･･ ／カーテン開けたらあんな状態で ･･････ ／ひどいイタズラする人がいるんですねー」(Vol. 10, pp. 24-5)
> （B-2）「マナを疑うことなんて二度とできなくなるわよ（フキダシ外の「ハン」という手書きの文字とともに）」(Vol. 10, p. 29)
> （B-3）「･･････パパ･･･ ／ごめんなさい ･･････ ／もう学校行きたくない ･･････ ／マナいじめられてるの ･･････」(Vol. 10, pp. 37-9)

偶然愛海と会った戸田は、保健室の惨状について問いかけつつも、言い出し辛そうなようすを見せる。愛海は丸く目を見開いて、無邪気なようすで（B-1）と言う。愛海が元気に帰っていくようすを見て安心しつつも、戸田は彼女の歪んだ笑みを思い出し「･･･ 気のせいなのよね ･･････ ／あれは ･･････」「本当に椎葉さんに殴られたのよね ･･････ ？」(Vol. 10, pp. 27-8) と一人つぶやく。愛海の耳と、振り返って戸田の後姿を見る愛海の横顔が描かれた後、次の頁では愛海の怒りをたたえた表情と、歪んだ口元の描写とともに（B-2）がある。その後公園の砂場に直進し、頭から砂を被り、制服を汚して帰ってきた愛海は、心配げな父の前で（B-3）のように言いながら泣き崩れる。娘を抱きしめ、「･･･ かわいいマナちゃんをいじめるなんて ･･････ ／このワシが絶対に許さんからな ･･････!!」(Vol. 10, pp. 41-2) と叫ぶ愛海の父の血走った目と、父の胸元でほくそ笑む愛海の表情が大きく描かれたところで、36 話は終わる。

（B-2）では「わよ」が用いられているが、これは会話の相手がいない、愛海の独り言である。（B-1）では、だれかほかの「ひどいイタズラする人」によって荒らされた保健室を目撃し、「超びっくりし」たという彼女の無邪気なようすを、彼女の口語混じりの敬語が強調している。しかし、戸田の言葉から、彼女が歩に攻撃される立場にあるという認識が揺らぎつつあることを察するや、（B-2）のように「わよ」という「女ことば」でつぶやく。ここで愛海が企むのは、自分が攻撃される立場であるという周囲の認識が揺るがぬようになる策である。その上で、（B-3）のように彼女は父に「マナいじめられてるの」と頼りなく訴える。彼女はここで、自分を守ろうとする父が行動を起こすことを見込んでいる。興味深いことに、先に示した（B-3）を受ける愛海の父のせりふは、「ワシ」を自称詞として用いるなど、金水 (2003) が「役割語」のなかでも「博士語」「老人語」と呼ぶところの言葉遣いをしている。愛海の父は教育委員会に発言権を持つ社長であり、このような言葉遣いに伴うイメージのように、威厳や権威をもつ人物として描かれる。娘を守る父の威厳のもとでふるまうかのように、彼はこの後学校に対して娘がいじめられていると訴え、歩と未来に処分を下させようとする。

このようにして 34 話以降、愛海はヒロインを追い詰めていく上で、自分が弱い立場にあると周囲の人物に信じ込ませることで状況をうまく切り抜ける。この後彼女はさらに前述の友人ヒロを脅し、これまで歩に対して行われてきたいじめの主犯格として名乗り出るよう命じる。また、自分の行いに干渉してこようとする副担任の教師である平岡を、教育委員会に対して発言権を持つ父に頼んで異動に追い込む。このようなストーリーの中で彼女が自分の攻撃性を悠々と表現しうるとき、たとえば（A-1）（A-3）のように自分が敵意を向ける相手を挑発するとき、また（B-2）のように人に聞かれていないとき、そしてアキラのようなその時点で自分が共謀しうる、あるいは支配下に置きうる相手に指図するとき、愛海は「女ことば」を用いていく。

愛海は周囲の人々の前では「女の子ことば」のもと、イノセントでかよわく、庇護されて当然の存在として自分を演出している。このような場面とは別に攻撃的で利己的、また狡猾な態度を彼女が意図的に表現するとき、「女ことば」が用いられる。この「女の子ことば」と「女ことば」を使い分け、彼女は「悲劇のヒロイン」として周囲に同情されることで、歩に対する自分の攻撃性を隠蔽しながら、あるいは駆使しながら、巧妙に歩を攻撃していく。彼女の言葉の使い分けにあるこのような意図は、場に応じた言語使用のストラテジーにとどまるものではない。この物語の中で彼女は、ヒロインを虐げ、自分が彼女より優位に立つための文字通りの「戦略」を意識しているときに「女ことば」を使い分けているように見える。

しかし、このような愛海の戦略は次第に綻びを見せ、彼女は周囲の信用を失っていく。愛海がヒロを自殺に追い込んだという噂が広まり、59 話で担任の戸田は愛海が「イジメの主犯格」

であると学校で白状する。するとかつての愛海の取り巻きも含めクラスメイトたちもいっせいに愛海を非難し、無視するようになる。このような展開の中で、ここまで見てきたような「女ことば」は愛海のせりふから次第に姿を消していく。ついに校内で彼女が大勢の生徒に非難を浴びせられるという、「地獄」と題された 64 話の一場面で、追い詰められた愛海が叫ぶのは「・・・おまえらに／なにがわかる・・・・・・」「だれが　土下座なんかするか　ボケェェ！！」(Vol. 17, pp. 23-5) という「男ことば」である。

この過程で、彼女はもはやかよわくふるまったところで周囲の庇護を受けられない、寄る辺ない状況に追い込まれる。クラスメイトたちが愛海への不信感を強めていく 57 話に、次のような場面がある。愛海が教室に向かって廊下を歩いていくと、教室から「ムカつくよね　マナちゃん」(Vol. 15, p. 68) という声が聞こえる。教室の中ではかつて愛海を取り巻いていた友人を含む 8 人の少女たちが円をなし、各々交代で愛海の真似をしては大声で笑っている。

> 「ねぇねぇ／パパァ〜〜〜〜ン／マナね〜〜ぇ？／いじめられてるのぉ――」[…]「やめてよ／・・・ひどい・・・／・・・マナの／マナのモノマネするなんてっ・・・・・・／ゼッタイパパに言いつけてやるんだからぁ〜〜〜〜〜〜っ」[…]「カツミくんだってっ・・・・・・／カツミくんだってマナのこと守ってくれるんだからぁ〜〜〜〜」[…]「マナは悪くないもん／戸田先生がやったんだもんっっ／マナはいつだって悪くないもぉ〜〜〜〜〜〜〜〜ん！！」(Vol. 15, pp. 69-72)

愛海の普段用いる「女の子ことば」の特徴を強調するように、彼女たちは愛海の真似をしている。いまや愛海を問題視するこれらの少女たちのふるまいがカリカチュアライズするのは「パパ」や「カツミくん」といった男たちに「守って」もらおうとし、常に自分が「悪くない」立場でいようとする愛海の態度である。このように誰かに庇護されようとする彼女のふるまいには自分の責任を否定する狡猾さや「言いつけてやる」という間接的な攻撃性が見出されてもいる。少女たちが愛海に「ムカつく」という非難を向けるのは、彼女たちが「女の子ことば」を用いる愛海のパーソナリティに、こうした否定的な側面を見出そうとするからだ。もはやかわいらしさ、かよわさといったパーソナリティが周囲に歓迎されず、歩に対する彼女の優位が保証される土台にもならず、人の嘲りや非難の対象にすぎなくなる。この展開において愛海の戦略が破綻していくとともに、彼女の「女ことば」はテクストから姿を消していく。

3 悪女の「役割」――「巨視的」にみる愛海の言葉――

読者の視点からストーリーをたどると、愛海がヒロインに対して怒りを向け、ヒロインへの攻撃に固執していくようすは不条理な、あるいはいきすぎたものとして解釈されるだろう。物語の初期から、愛海や彼女に同情する少女たちがヒロインに向ける怒りは、歩が愛海との友情を裏切り、彼女から恋人の克己を奪おうとしていたはずだという共通認識を土台としている。しかし、テクスト上ではヒロインのふるまいが彼女たちに誤解されていくようすもまた、読者の前に提示されている。テクストでは失恋して元気のない愛海の力になろうと、復縁を説得するためにヒロインが克己に近づくこと、そして彼に暴行され、以後彼が愛海と復縁した後も脅迫されるようになることが物語られる。この物語テクストを通して、克己とヒロインの間に本当に起こっていることを知らないがために、愛海や周囲の少女たちが彼女を攻撃するようになるのだと読者は理解するであろう。[12]

先の節で、愛海が克己をもアキラに攻撃させ、しだいに複雑な形で策略を展開してくることについて述べた。その過程において、この愛海の策略の根底にあるのは主にヒロインへの怒りであり、こうした怒りの原因である「誤解」は解けていない。興味深いことに、愛海が策略を繰り広げていくストーリーが連続する中で、作品の中では次第にこの「誤解」について言及されなくなってくる。マンガ誌連載では第 3 話から「前回のあらすじ」欄が本編の最初の頁に設けられ、愛海についてはこれまでその内容が 6 回書き換えられている。「高校に入ってからできた歩の友達」（3 話以降）の愛海が歩を「完全に誤解」していると書かれるのは 13 話であるが、この点についての記述は次第に「歩がカツミとつきあっていると思い込み」（22 話以降）、「歩とカツミの仲を疑い」（49 話以降）、とあいまいになってくる。51 話以降ではその点について言及もされなくなり、「歩が憎しみと怒りの標的。超自己中な性格」（49 話以降）という記述に「友人をも恐怖で支配」という言葉が加えられ、彼女が歩に向ける感情とともに、自己中心的で恐ろしいという彼女の強烈なパーソナリティが強調されていくようになる。[13]

前節では愛海が自分を弱くて庇護されるべき存在として見せていくため、「女の子ことば」と「女ことば」を切り替えていく過程を見てきた。一方で彼女はみずから歩を攻撃せず、アキラに拉致を依頼したり、また大人たちや他の生徒たちに歩が責められる状況を作ったりすることで、歩を苦しめていく。こうして間接的にヒロインを攻撃していく彼女が「女ことば」のもとで悠々と策略を述べる場面では、愛海はもはや弱い存在であるどころか、支配者であるかのような態度を見せる。例えば 41 話で愛海は自分を守ってくれると言う克己に対して信頼を寄せるかのようにふるまった後、「‥‥‥ ほんとつまんない男／なんでマナあんな男（ヤツ）のこと本気で好きだったのかしら／ ‥‥ まぁ ‥‥‥ ／マナの思い通りになる駒は必要だしね ‥‥‥」(Vol. 11, pp. 70-1) と一人でつぶやいている。「女ことば」を使う愛海はまるで自分が力を握る強い

存在であるかのように話し、また周囲の人物を矮小化するかのように表現する。本稿の冒頭に挙げた「正義のヒロインちゃん」に対するせりふは、愛海が強者のようにふるまうこの種の表現の一つであるが、相手を小娘のように扱う意味合いが込められている。

こうした愛海のイメージには、斎藤 (2001) が指摘する「女の子向けアニメ」の悪役として登場する女性像に通じるものがあるように見える。子ども向けアニメの中では悪役に女性が多く、そのイメージは「世界征服」や「権力欲」よりも「嫉妬ないしは物欲」といった私的感情を動機に主人公を攻撃する「母性を欠いた大人の女」であるという。特に女の子向けアニメの場合、悪の側の帝王のような立場にある女の悪役が、部下を遣わせてヒロインを襲わせ、最後にヒロインとみずから対峙して負けるという「女の敵は女」「少女の敵は熟女」という女同士の対立の構図がある (斎藤 , 2001, pp. 55-60)。[14]

愛海は驚くほどの行動力で様々な策略を編み出しては歩を攻撃するようになるが、その行動原理にあるのは、自分が愛されるべき存在でありたいということだ。克己がヒロインに横取りされたという誤解をもとに、彼女がヒロインに向ける怒りは肥大していく。このヒロインに対する敵意はまた、「カツミくんのお嫁さんになるのが夢だった」(Vol. 1, p. 199) はずの彼女が克己以外の男と関係を持ち、彼を軽視するようになってもなお維持され、エスカレートしていく。また愛海がアキラと肉体関係を持つにあたって、彼女は自身の性的魅力を用いて男をあやつる、性的な存在としてテクスト上に立ち現れるようになる。そんな愛海はいかにヒロインへの敵意が募ろうと、なかなか自分で手を下して攻撃することなく、他人を利用して彼女を苦しめていく。

こうした一見矛盾しているかのような愛海の行動やふるまいが、女の子向けコンテンツにおいて繰り返し語られる女の悪役像についての知識、またとりわけ「大人の女」のイメージと結びついていたと仮定すると、愛海の用いる「女ことば」が役割語としての機能を担っていたようにも見える。愛海の「女ことば」が、彼女の普段用いている「女の子ことば」からも、周囲の少女たちの言葉遣いからも異なるものとしてしるしづけられているとしよう。一般に「女ことば」は「大人の女らしさ」と結びついていると言われており (中村 , 2007, p. 37)、また序に述べたように、「女ことば」を作中で継続的に用いるのは少女たちよりも年上の女性である。この点から考えるならば、愛海が継続的に「女ことば」を用いることが「大人の女」の言葉で話すことを意味し、さらに「大人の女」を悪役と位置づけるようなステレオタイプと関連することで、彼女の一面が担う狡猾な悪役としての役割をわかりやすいものにしていたとも言えるのではないか。

こうした女の悪役として愛海の立場を見直す上で、特に重要なのは、女の悪役がストーリーを刺激する存在だということだ。「自分の論理で積極果敢に動く」女の悪役キャラクターが、「単

調な女性の登場人物が多い」アニメの物語世界を「活気づかせる」影の主役でありながら、最終的には「負ける」ことが約束されていると斎藤 (2001, p. 60) は述べる。少女コミュニティの中での複数の少女たちによるヒロインへの攻撃と、それに立ち向かうヒロインを描いていくだけでは、物語は単調になる。そんな中、愛海がアキラと関係を持つことで、少女コミュニティ内でのいじめの物語はより錯綜し、ミステリアスな展開を帯びるようになる。第 2 節の例に見る、愛海が「女ことば」を駆使しつつ、自分の策略を述べるようすは、読者の目にも触れることで、再びヒロインが脅かされる可能性を示唆し、ヒロインの近い未来についての不安を読者に抱かせる。そのため、彼女のふるまいは次話への読者の期待を誘い込むようになる。ここから見ると、愛海はアキラとの関係を境に「女ことば」を用いるようになったことで、悪役としての位置づけを得るだけでなく、物語のプロットや連載の構成において重要な「役割」を果たしていたともいえる。

複雑化する一方のストーリーの中で解決されずにきた愛海と歩の間の誤解は、連載開始から約 6 年後の 2008 年 3 月号、69 話のクライマックスにおいてようやく解ける。多くの生徒たちに追い詰められた愛海は、学校から逃走して克己を頼ろうとする。しかしそこで、克己がかつて歩に対する暴行を行ったことだけでなく、彼が最初から愛海を愛してなどいなかったことが明らかになる。絶望に陥った愛海は、克己を刺し、自分も死のうとする。それを必死で止め、彼女に生きるよう訴えかけるヒロインの言葉を聞き、歩と自分が出会った頃の回想をめぐらしながら、愛海は感極まって涙を流す（71 話）。さらに、72 話では愛海が自殺しようとしたと知り、かつての取巻きの少女たちが「友達」であった愛海に対して行った自分たちの行為を悔いる。このクライマックスに至って、一見この「ライフ」という物語は、長い間の誤解と葛藤の末にようやく二人の少女が理解しあい、少女間の絆が再び結ばれるまでを描いているようには見える。

しかし、愛海の「女ことば」に先の女の悪役としての役割を見出すならば、物語はすでにもう一つの次元で女性間の対立を描き、そして女性を取りまくもう一つの力構造を含み込んでいたかのように見える。第 2 節の最後では、愛海が周囲の生徒たちに非難される立場になり、次第に「女ことば」を用いなくなるという状況について触れた。この場面は女の悪役が、ストーリーを活気づかせた後に必然的に迎える「負け」として解釈することもできる。愛海の継続的に用いる「女ことば」が、人を巧みに操ろうとする狡猾さや自己愛、逸脱したセクシュアリティといった要素とともに、威圧的な態度の邪悪な「大人の女」という役割をしるしづけるものだったとしよう。このクライマックスは、そのような愛海の中の「悪女」がさんざん踊らされた挙句に倒され、その後でようやく少女たちの世界に平和がもたらされるという物語の結末でもあるように見えるのだ。[15]

「ライフ」は少女マンガ連載として多くの読者の人気を得、物語が「リアル」であるという反響を呼んでいる。このような反響は、時に、このフィクションの世界が現実におけるいじめの問題や、少女間の葛藤を反映しているものだという言説を呼ぶことがある (高橋 , 2007)。また、「ライフ」に関連させていじめ問題のルポルタージュを著した藤井 (2007, p. 102) は、第 2 節で見てきたような「いじめられている歩と、いじめている愛海」の間の錯綜した関係に言及し、「いじめは事実関係の確認がとても難しい」問題だということを説明している。しかし、少女間のいじめを描いたこの物語が多くの読者の共感や支持を得るようになったのは、ひとえに作品が少女たちの「現実」を描いていたからだと言えるだろうか。連載の中で一時期「女ことば」を多用するようになるという愛海の言葉遣いの変化を通してむしろ見えてくるのは、その物語世界の受容がいかにフィクション上の言語や、ジェンダーをめぐる我々のファンタジーに依拠しているかということである。

むすび

本稿では二つの面から愛海が「女ことば」を用いる過程を検討してきた。微視的な面からは、愛海の「女ことば」の使い分けには、彼女が巧みに自己像を切り替えることでヒロインに対して優位に立つという「戦略」があることを指摘した。その戦略とは周囲の人物に対して「かわいい」、弱くて守られるべき、そして愛されるべきパーソナリティとして自己を提示し、その対照として歩の攻撃的なイメージを流布することで、自分が愛される一方で歩が非難されるという状況を作るというものである。巨視的な面では、「女ことば」を使用する愛海の描写には、女の子向けの物語における大人の女の悪役に通じる要素があることを指摘した。「女ことば」を用いる上で、愛海はその「悪女」のイメージをまとい、テクスト中でヒロインを脅かす威圧的な存在として位置づけられることで、物語にとって都合よい形で扱われ、やがて物語世界から排除されるに至ったかのように見える。この点で愛海の用いる「女ことば」は、物語の構成においても重要な「役割」を体現するものであったと言える。

本稿では物語世界の中で周辺化される要素との関連に注目し、愛海の「女ことば」を扱ってきた。しかし、このような視点から本稿をまとめる上で、いくつかの論点を捨象せざるを得なかったこと、またそのために見解の偏りが生じているということも認めなければならない。本稿の目的のひとつは、彼女の「女ことば」を通してある女性像が物語世界の中で構築され、排除されていく過程を辿ることであった。しかしながら主に第 3 節で見てきたこの「女ことば」の意味は、第 2 節で見た愛海自身の使い分けの中での「女ことば」の意味と、完全に一致することはない。そのため愛海の言葉遣いの切り替えとジェンダー規範との関わりについて、テクストはまだ解釈の余地を残すのである。この点で特に心残りに思うのは、愛海による「女

ことば」の切り替えを、周囲に期待される「女の子らしさ」の撹乱として読み解く可能性について十分に触れられなかったことである。第 3 節では愛海が物語の展開を刺激する存在になるようすについて触れたが、これをもし愛海が読者から人気や注目を集め、アンチヒロインとして立ち現れてきた過程として捉えるならば、物語の中で愛海が「女ことば」を用いることによって担うようになった「役割」についての解釈ももっと開けてくるはずである。例えば第 2 節の一部では、彼女が権威をもつ父の前で庇護されるべき、弱くてかわいそうな少女を演じることで、自分の策略にいともたやすく彼を巻き込んでいるようすについて触れた。このような描写においては従順でか弱い少女という「女の子らしさ」に向けられる期待を、彼女が「女ことば」を用いながら出し抜き、裏切ろうとするようすが読者に爽快感をもたらしていたとも考えられる。もしそこに読者と愛海との絆を見出そうとするならば、男性の権力や男性に守られるような「女の子らしさ」の規範に屈するように見せかけて、その状況を手玉に取ろうという、ジェンダー秩序への挑発的な価値観がテクストを通してもたらされていたとも考えられるであろう。言語使用とジェンダー規範に関わるこのような抵抗的な読みの可能性についてはいつかまた、他の機会に改めて論じてみたい。[16] 虚構の物語の中で用いられる「女ことば」とジェンダー規範との関連性は、読まれることに介在するこのようなさまざまな視点や力のせめぎ合いの中で生じたり、見出されたりするものではないだろうか。本稿では物語テクストにおける言語コミュニケーションの多層性を通して、物語構造における「女ことば」の機能について検討してきた。この多層的に媒介された、いわば多声性に満ちているフィクションの言語が、テクストを取り巻く社会的な力とかかわることでいかに意味をなしていくかという面についても、今後は議論を開いていきたい。

Reference

金水敏 . (2003).『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』. 東京 : 岩波書店 .
斎藤美奈子 . (2001).『紅一点論』. 東京 : 筑摩書房 .
佐竹久仁子 . (2003).「テレビアニメの流布する「女ことば / 男ことば」規範」.『ことば』, 24, 43-59.
すえのぶけいこ . (2002-2008).『ライフ』(Vols. 1-18). 東京 : 講談社 .
高橋すみれ . (2007).「＜邪魔 (オッド) な娘 (ガール) は消せ (アウト) ！＞――すえのぶけいこの三作品に描かれる、「少女間のいじめ」をめぐって」.『女性学年報』, 28, 41-65.
高橋すみれ . (in press).「挑発する「女ことば」――少女マンガ「ライフ」にみる少女の二面性と言語使用」.『多元文化』, 9.
因京子 . (2003).「マンガに見るジェンダー表現の機能」.『日本語とジェンダー』, 3, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no3/No3_2.htm# B00a
因京子 . (2005).「女性語のゆくえ――絆として鎧としての女性語の可能性」.『言語文化叢書』, 15, 30-45.
因京子 . (2006).「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」. In 日本語ジェンダー学会 (Ed.)『日本語とジェンダー』(pp.53-72). 東京：ひつじ書房 .
因京子 . (2007).「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い――女性ジェンダー標示形式を中心に」.『日本語とジェンダー』, 7, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no7/02_chinami.html
中村桃子 . (1996).「言語規範としての「女ことば」.『自然・人間・社会』, 20, 33-60.
中村桃子 . (2001).『ことばとジェンダー』. 東京 : 勁草書房 .
中村桃子 . (2007).『〈性〉と日本語――ことばがつくる女と男』. 東京 : NHK 出版 .
Burr, Vivien. (1997).『社会的構築主義への招待』(田中一彦 , Trans.). 東京 : 川島書店 . = (Original work published 1995). *An Introduction to Social Constructionism*. New York: Routledge.
Booth, Wayne C. (1991).『フィクションの修辞学』(米本弘一 , 服部典之 & 渡辺克昭 , Trans.). 東京 : 書肆風の薔薇 . = (Original work published 1961). *Rhetoric of Fiction*. Chicago: Univ. Chicago Press.
藤井誠二 . (2007).『学校は死に場所じゃない――マンガ『ライフ』で読み解くいじめのリアル』. 東京 : ブックマン社 .
水本光美 . (2006).「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」. In 日本語ジェンダー学会 (Ed.),『日本語とジェンダー』(pp. 73-94). 東京 : ひつじ書房 .
水本光美 ., 福盛壽賀子 ., & 高田恭子 . (2008).「ドラマに使われる女性文末詞――脚本家の意識調査より」.『日本語とジェンダー』, 8, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no8/02_mizumoto.html
山口治彦 . (2007).「役割語の個別性と普遍性――日英の対照を通して――」. In 金水敏 (Ed.),『役割語研究の地平』(pp. 9-25). 東京 : くろしお出版 .
山路奈保子 . (2006).「小説における女性形終助詞「わ」の使用」.『日本語とジェンダー』, 6, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/ journal/no6/03yamaji.html
「ライフ 第 69 回 (扉絵頁)」. (2008, February 13).『別冊フレンド』, 2008 年 03 月号 , 269.

Footnote

[1] テクストからの登場人物のせりふを引用する部分では、すえのぶの同一作品のみの取り扱いとなるため、便宜上 (コミックス単行本の巻 , 頁) という表記を用いる。また、せりふの引用において、連続するせりふが幾つかのフキダシに跨っている場合、フキダシ間の区切りを「／」で示している。

[2] 水本 (2006) は 20 代、30 代、40 代の女性たちの親しい者同士の会話データから、「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「体言＋ね」「体言＋よ」「のよ」「のね」「の（非疑問系）」の 10 種の「従来女性特有とされた文末詞」の使用状況を分析している。その結果、30 代以下の女性のサンプルでは「の」と「のね」以外はほぼ死語となっていることが明らかにされている。

[3] フィクションにおけるキャラクターの言語使用をテクスト全体の世界観と関連させた先行研究には、翻訳マンガにおける女性キャラクターの言葉遣いを扱った因 (2007) の分析がある。この先行研究では、複数のテクストにおける女性の言語使用と伝統的なステレオタイプ的女性像との関連性を検討することに重点が置かれている。これに対し、ある物語世界が受容されるための修辞の一部として「女ことば」の機能を多層的に捉えようとする点で、本稿の着眼点は異なる。

[4] 本稿で言語使用と人物像との関連について言及する際に用いる「パーソナリティ」は中村 (2007, pp. 25-28) の用いている「アイデンティティ」とほぼ同義であり、言語使用やふるまいを通して構築されるような、ある人物が「どのような人物なのか」という統合的なイメージをさす。しかし、ある少女が二面性をもち、「女の子ことば」と「女ことば」を使い分けていく過程を分析する本稿で、この「 アイデンティティ 」という用語を使用することは議論の混乱を招く。そこで同様に社会構築主義の立場からバー (1997, p. 34) が「人間行動を説明するための、そして他者との社会的相互作用で自分の役割を予知しようとするための」概念として扱っている「パーソナリティ」という言葉を用いる。

[5] マンガ表現は、言葉と絵によって成り立つものである。愛海のパーソナリティの切り替えや変化は絵によっても強調されているが、本稿は物語中の「女ことば」の使われ方を検討するものであるため、絵による描写への言及はこれらの言葉遣いの分析に関わる部分にとどめておく。

[6] 『別冊フレンド』2008 年 3 月号の「ライフ」69 話の扉絵頁には、当時 17 巻まで発行されていたコミック単行本について「累計 850 万部突破」という情報が書き込まれている。

[7] この点に関して、「皮肉・嫌味を込め」た文脈で用いられる「かしら」、および「主張度の強い場面で用いられる」「わ」や「わよ」といった女性文末詞がドラマで頻用される理由について、水本 et al.(2008) が「ドラマがドラマティックであるゆえの、主に日常的な対立場面の多さ」を指摘している点は興味深い。

[8] この「レトリック」という言葉を本稿では、文学テクストの構成を論じる上でブース (1991, p.9) が定義するところの「書き手が、みずから意識しているか否かは別として、自分のフィクションの世界を読者に押し付けようとする時に利用することができる修辞的な手段」として用いている。

[9] この「女の子ことば」という用語は本稿で愛海の言葉遣いを整理するために便宜上設定しているものであり、テクスト中の「少女」キャラクターや、実際の若い女性に用いられている

言葉遣いを総合的に指すものではない。少女キャラクターの一人として登場した物語初期から見られる愛海の言葉遣いの特徴をカテゴリー化するためのものである。

[10]「のよ」「体言＋よ」に関しては、実際に愛海の友人たちが使う場面もある。12 話で、路上で知らない男といる愛海を見つけ、彼女たちがあわてて駆け寄る中で言われる「なにやってんのよ／だれよその男ー」(Vol. 4, p. 20）がそれである。また、39 話であれこれと策略をめぐらす中で愛海がクラスメイトたちから得ている信頼が揺らぎつつある中、ヒロインの歩が彼女に「大変そうね／嘘で塗り固めるのも」(Vol. 10, p. 164) と告げる場面もある。しかし、このような発話は愛海の「女ことば」使用のようにパターン化されているものではないと判断する。

[11] 先に挙げた、愛海が「わよね」を使う最初の場面の後では、おそらく一度他の女と関係をもった克己を想って、突然激昂した愛海がホテルの部屋の中で「思い知れ !! ／ ･･･ マナが一番かわいいんだ／マナが一番愛されるはずなんだ !! ／どんな手を使ってでも ･･････!!」(Vol. 7, pp. 75-7) と暴れるようすが描かれる。愛海がこのような断定の調子の強い「男ことば」を使うようすは、その後も特に彼女の感情が乱されているときに見られる。

[12] このような認識を促す「ライフ」のテクスト構造については、高橋 (2007) で一部触れている。

[13] 講談社発行『別冊フレンド』2002 年 5 月号 -2008 年 7 月号の各連載記事を確認の上、これらのあらすじ部分について記述している。61 話以降では、51 話以降の文にある「友人をも恐怖で支配」の前に「かつては」が入る。

[14] 一方、男の子向けアニメでは女性の悪役はめったに支配者の立場に立たず、「巨悪は男／小悪は女」「男は大敵／女は小敵」という図式があるという (斎藤 , 2001, p. 57)。このような男女別に与えられる物語は大人世界の縮図をなすものであると斎藤 (2001) は指摘し、これらの物語のジェンダー・イデオロギーを明らかにしている。

[15] 本稿では「ライフ」第 1 話から第 73 話（『別冊フレンド』2008 年 7 月号掲載）までの物語を分析対象としている。そのため、以降の物語展開における愛海の言葉遣いの変化を考慮することができていない。この後 74 話から 77 話の展開で、愛海は病院に運ばれた後に脱走し、歩のもとへ向かう。この展開での愛海のせりふには、場に応じて言葉遣いを極端に使い分けるという傾向は特に見られない。2008 年 12 月号に掲載されている第 77 話「決断」には、かつていじめを主導してきた自分を警察に告発するよう歩に告げる「生かしたんなら最後まで責任取りなさいよ／･･･このままじゃマナはからっぽのまんまなんだ／うんざりなのよ／もう／パパに全部勝手に決められんのは」(pp. 50-1) という愛海のせりふがある。このように、その後の愛海のせりふには時に「～だ」という強い言い切りの表現や、一部の「女ことば」などが混用されている。本稿脱稿後に見られたこのような愛海の言葉遣いは、愛海が「女の子ことば」を使うことや、言葉遣いを物語中で頻繁に切り替えていたことの意味についてもさらなる検討を促す。なお、その後「ライフ」は『別冊フレンド』2009 年 3 月号掲載の 80 話で最終回を迎えている。

[16] 本稿で十分に扱いきれなかったこの点については、本稿での議論を一部受ける形で「挑発する「女ことば」――少女マンガ「ライフ」にみる少女の二面性と言語使用」(高橋 , in press）にて論じている。同稿では読者の取りうる複数の視点、および少女コミュニティをめぐるセクシュアリティ規範と「女ことば」の規範性との関わりに注目し、愛海の「女ことば」使用が担っ

ていた意味を捉えようと試みている。

The Role of the Villainess: Women's Language in the Japanese Girl's Comic *Life*

Sumire TAKAHASHI

"Women' s language" in fiction has been discussed in terms of its role in constructing or representing gender norms in society and culture. Research in recent years has included a re-examination of this relationship between gender norms and women' s language in fiction. However, there has been little focus on the relationship between the fact that certain characters speak in "women' s language" and the context surrounding their speech in the narrative structure. This paper examines the meaning and function of one female character' s use of women' s language in the narrative structure of a Japanese girl' s comic called Raifu (Life). From a certain point in the series, the character starts to make extensive use of female-specific sentence endings that are not used in modern-day speech. If we consider the intention behind her speech in context, the use of women' s language can be linked to her artful strategy of attacking the heroine. On the other hand, given her marginalized position in the story, her use of women' s language identifies an important role that she has come to play in the narrative structure. With regard to the role of women' s language here, it could be argued that this is a story that not only depicts solidarity among girls, but also female conflict.

Keywords: women' s language, role language, Japanese girl' s comics, narrative structure, rhetoric

セクシュアリティ診断家としてのミシェル・フーコーと セクシュアリティ研究の対抗言説

川坂和義

1 はじめに

1976 年に出版されたミシェル・フーコーの『性の歴史Ⅰ　知への意志』(1976) は、現在までに大きく分けて二つの関心分野の間で広範な影響を及ぼし、多くの論文で参照や分析がなされている。ひとつは、ある戦略の中で働くミクロな権力の分析の書としてであり、もうひとつは、セクシュアリティがある文化的規範や法の中で抑圧される自然的本性ではなく、まさにある特定の文化によって生産され管理されるものであるという歴史観が検証された書としてである。前者は、フーコーが社会の隅々で働くミクロな権力という新たな権力概念を提出し、従来の権力分析で用いられる「抑圧」や「抵抗」、「解放」という考え方に疑問を呈したことで、『知への意志』をフーコーの権力論として主にこの本の中のフーコーが権力を論じた十数ページを中心に分析される。後者は、言説によってセクシュアリティが形成されるという『知への意志』の基本的分析を中心に西ヨーロッパの 400 年ほどのセクシュアリティの歴史を多少図式的に分析したものとして参照される。権力論として『知への意志』が読まれるとき、この本はフーコーの系譜学が強調する知と権力の関係を論じたものとして抽象化され、「セクシュアリティ」は近代西洋の様々なテクノロジーを構成する知のひとつの例としてしか扱われない (Deleuze, 1986/1987, pp. 111-146)。一方、セクシュアリティの歴史書としての『知への意志』に興味を抱く者は、フーコーが極めて説得力を持ったかたちで示した、「セクシュアリティ」は身体に埋め込まれた普遍的な自然物ではなく、言説によって構成された歴史的存在であるという論述に肯定的であれ否定的であれ惹かれるが、同時にフーコーの安定的な抵抗の形態や解放を認めない権力論とも何とかして折り合いをつけなければならない。例えばデイヴィッド・ハルプリンはフーコーの良き擁護者としてフーコーの理論がゲイの解放に大きな貢献を果たしたと断言したが、その際にフーコーの理論がエイズ・アクティヴィズムやホモフォビア言説の分析、身体の新たな関係を探求する「クィアなセックス」に適したものであったなど実際の政治的成果を用いて主張しなければならなかった (Halprin, 1995)。

しかし、この二つの傾向の読み方の間で、もうひとつの別種の分析があまり注目されないまま取り残されてきたように思われる。フーコーは、近代社会において権力を産出し運搬する知として「セクシュアリティ」に特権的な地位を与えているが、多様に産出される近代の「セクシュアリティ」の言説のいかなる側面が権力との親和性を生み出したのだろうか。身体と権力の接触点としてフーコーは監獄や学校などに現れた様々な規律権力や生命を管理する生権力の出現を強調しているが、「セクシュアリティ」を取り巻く理性はいかにこれらと結び合わさ

れるのだろうか。これらの問いにおいて、フーコーのセクシュアリティ研究の正当性や近代の「セクシュアリティ」の特異性の問題を検討することができるようになるのである。

さらに、近年、フーコーを積極的に参照してきた人々の間においても、現在とフーコーが考察した時代との乖離が強く意識され始めている。『知への意志』以降、アイデンティティや主体化の理論は洗練されていき、現代ではむしろフーコーの『知への意志』の主体化＝従属化の理論構築の不備や、フーコーの主体化の議論が政治的抑圧ばかりに結びつけられる一面性の問題が目立つようになっている。それに対し、ヤナ・サヴィッキやハルプリンはその不備や一面性をフーコーの哲学的「クィアネス」や反‐理論として読むことによってフーコーを擁護するが、同時にフーコーのそのような不備そのものの改善の必要性も認めている (Sawicki, 2005; Halprin, 2002)。また、ジェフリー・ウィークスは、フーコーの生きた時代と現代の社会の変化を強調し、アイデンティティの意味やエイズ危機以降の政治闘争の変化を考慮することによって、フーコーの議論の中で現在でも有用な部分と再考すべき問題点を見極めようとしている (Weeks, 2005)。このようなフーコーの救済の必要性そのものが、フーコーの議論と私たちが直面している問題の差異を際立たせているだろう。だが、もしフーコーと私たちの「セクシュアリティ」に関する言説に何かしらの差異があるならば、私たちはフーコーを用いることによって、現在の私たちの「セクシュアリティ」に関する言説の特徴を把握することができるのではないだろうか。近年のセクシュアリティ研究の言説は、フーコーが分析したような「セクシュアリティ」の言説とどのように異なるのか。そして、レズビアン・ゲイ研究やクィア理論は、初期の頃から自身が持つ学問の政治性を強調し続けてきたが、これらの政治性をフーコーのセクシュアリティ研究から位置づけることができるだろうか。

本稿は、フーコーが『知への意志』で分析した「セクシュアリティ」の言説の機能とその領域を簡潔に分析し、現代のセクシュアリティ研究は実はフーコーが分析した「セクシュアリティ」と対峙するように「セクシュアリティ」を考察し用いているのではないかということを検証する。そうすることによって、現代のセクシュアリティ研究はフーコーが注目した 18 世紀に出現した「セクシュアリティ」への対抗言説であるのではないかという仮説を提示すると同時に、現代のセクシュアリティ研究が持つ政治性の特徴を分析したい。

2『性の歴史 I 』における「セクシュアリティ」の特徴

2.1 セクシュアリティの潜在性

フーコーは「セクシュアリティ」を記述する際に、「セクシュアリティ」に明確な定義を与えていない。フーコーの記述における近代の「セクシュアリティ」とは、フーコーが前提となる性（Sex）を想定することに批判的であることから示されるように、何か固有の意味や性質

を有した対象であるというよりも、身体の周辺に徐々に構成されていった異種混交とした言説にすぎない (Foucault, 1980, p. 210)。フーコーの「セクシュアリティ」の分析では彼の言説分析の特徴である唯名論的な性格が顕著にあらわれているために、フーコーの記述中の「セクシュアリティ」が何を指し示すのか極めて掴みづらい。だが、このことはさほど重要ではない。フーコーの言説分析は、言説の意味や対象に固執するよりも、諸々の言説が社会の中でいかに構成・配分され、そのことによってどのような効果を生み出すかということに注目するからである (Foucault, 1969; Balibar, 1989)。すなわち、「セクシュアリティ」とは何かという問いではなく、「セクシュアリティ」はどこでどのように問題化され、それへの対処がどのような効果に帰結したのかという問いが重要なのである。

フーコーは、歴史分析の中でそれぞれの時代における「セクシュアリティ」の意味内容ではなく、「セクシュアリティ」という言説を構成する実践、特に「告白」という実践を重要視している。フーコーが注目する告白の効果は、自身の内面を語ることで性を言語化し対象化していく作用のみではない。むしろ、フーコーが興味を抱いているのは、告白によって決して現われることのない、言葉の間を滑り込んでいく性の不透明な部分が構成される様子である。フーコーは、キリスト教による性の告白の成果が性を謎として仕立てあげたことであったことを強調している。「忘れてはならないのは、キリスト教司教要綱は、性を、すべてに優って告白されるべきものに仕立てることによって、常に性を不気味な謎として提出していたことだ」(Foucault, 1976/1986, p. 45)。フーコーが注意を促す「性は言説外にあり、ただ障害の除去、秘密の打破が、性へと導く道を開いてくれるだろう」(ibid., p. 45) という告白を成立させる前提は、性の真実が未だかつて一度も言語として結実しなかったということを意味すると同時に、そのセクシュアリティの潜在的な要素のために絶えず語られなければならないという動機づけを行う。フーコーが告白という言説の産出方法で注目するのは、セクシュアリティの潜在化の傾向である。

フーコーが描き出すセクシュアリティの潜在性は、フロイトのリビドーの潜在性と対極のものとして考えられなければならない。フーコーはフロイトの『性理論三篇』(1905) を「セクシュアリティ」が産出する権力の表出であるかのように書き換えようと努めている。フーコーとフロイトの分析方法は、その潜在性が構成する「真理」に対して対極的な態度を取る。フロイトにとってリビドーの潜在性は、性や心理現象を解明するために取り除かなくてはならない障害であると同時に、その潜在性ゆえに何かしらの真実の把握を約束するものである (Freud, 1905)。フーコーはセクシュアリティの潜在性を、フロイトのように解明すべき真理であると考えるのではなく、知を構成する規則性であり臨床医学を成立させた要素であると論じる。

> 性現象（sexualité）に本質的である潜在性という原理によって、困難な告白の蒙るべき強制を、科学的実践へと有機的に連結することが可能になっている。告白はまさに力ずくでも強奪しなければならない、なぜならあれは隠れているからである。(Foucault, 1976/1986, pp. 86-7)

告白が形成するセクシュアリティの言説は常に不完全な結果に終わるためにセクシュアリティを謎として位置づけ、その解明を使命とする性科学が構成されるが、性科学もセクシュアリティの潜在性をその真理の担保とするためにセクシュアリティを完全な明晰性の元に引き出すことができない。フーコーが歴史上の様々な言説を分析することによって描き出すセクシュアリティの潜在性は、知の目標であると同時に終わらない問いを問い続ける根拠となるものである。

フーコーが述べるセクシュアリティの潜在性には二つの顔が存在する。ひとつは、歴史的に形成されたセクシュアリティの言説の意味に付与される性質であり、もうひとつはセクシュアリティに対する諸学問の態度である。

2.2 セクシュアリティの危険性

フーコーの記述で瞠目すべき点は、セクシュアリティの潜在性を知を構成するものであるとすると同時に、セクシュアリティを取り巻く社会的な効果、とりわけ「危険性」と結びつけている点である。『知への意志』では「法」に依拠する権力からミクロな権力、すなわち個人の規範化や集団の管理・調整を行う権力へと近代社会における支配の形式の変化を論じているが、フーコーはセクシュアリティがこのような変化に重要な役割を果たしたと主張する。このときフーコーがとりわけ注目するのは、逸脱者への権力の係わり方の変化である。フーコーが述べるところによると、17 世紀から 18 世紀に至るまで反自然的な逸脱者は、犯罪性が備わるものと見なされていた。すなわち、その存在が潜在的な法の逸脱であった。だが、19 世紀になると、この関係が逆転し、あらゆる犯罪に逸脱性が見出されるようになる。この逆転に、精神医学と司法と社会的規範の結びついた言説を可能とする領域が生れる。そして、精神医学が対象とする異常性の問題は、セクシュアリティの問題によって貫かれることになる。性倒錯者は、社会に隠れ潜む犯罪と狂気を併せ持った者として出現したのである (Foucault, 1976/1986, pp. 51-2)。

フーコーがセクシュアリティを系譜学的に分析するとき、セクシュアリティは次の三点の間で問題となっている。「犯罪と異常者」、「本能とセクシュアリティ」、「遺伝と身体」である。

犯罪と異常者という問題は、犯罪とその処罰の技術的問題から言説が生産される。本能とセクシュアリティという問題は、19 世紀に増殖していく異常者や倒錯者たちの原因を個人の中に見出すことで構成される。そして、遺伝と身体という問題は、異常者個人の身体の原因をより広範な因果性のもとで分析しようと試みられるときに形成される。セクシュアリティは、この三つの問題を構成すると同時にそれらの解決を約束する役割を果たすのである。

異常性の原因究明と抑止、そしてそれがもたらすであろう社会の安定と発展が、フーコーが近代の権力として特徴づける「生権力」とセクシュアリティを結び付ける要点のひとつなのである。フーコーは生権力の説明において生命をいかに増大させるかという権力の使命を強調するが、このような目的を持った生権力とセクシュアリティは、異常性の排除、オナニーなどの性の浪費の制約、女性の管理といった様々な問題化によって結ばれることになる。生命の増大という目的のために、セクシュアリティは、異常性を極力抑制し、秩序化するために絶えず管理が必要な「危険なもの」として扱われ、利用されるのである (Foucault, 1976/1986, p. 134)。フーコーがセクシュアリティの歴史においてキリスト教的伝統から精神分析に至るまで、他の差異や性への知的態度の変化に留意せずに直線的に結ぶのは、セクシュアリティが魂の救済や精神、そして肉体にとって「危険である」という特徴においてに他ならない。

フーコーの『知への意志』の分析において「セクシュアリティ」に与えられた特徴は、性の周辺に構成する「潜在性」と「危険性」であると考えることができる。フーコーが分析するところでは、「セクシュアリティ」は、その「潜在性」と「危険性」において、性の真理を告げ、注意を喚起し、管理を必要とするのである。

2.3 セクシュアリティの領域

フーコーはセクシュアリティの領域を「女性の身体のヒステリー化」、「子どもの性の教育化」、「生殖行為の社会的管理化」、「倒錯的快楽の精神医学への組み込み」という四つを挙げ、これらは自律的でありながら相互に影響し合う社会における体系的な知の配置であると述べている。フーコーは社会においてセクシュアリティが問題となる実践の場からセクシュアリティの知の領域の確定を行っているが、ここでは多少抽象化してセクシュアリティの問題化が行われる領域そのもの、つまり、セクシュアリティが直接的に問題化される場に注目しよう。すると、以下の三つの領域が考えられるだろう。

＜人格＞

まず、セクシュアリティの管理の場であり同時にその結果でもある＜人格＞という領域がある。人格は、精神医学のあるセクシュアリティの異常化によって出現するセクシュアリティとの格闘の場であり、子どもの性の管理や教育の目的でもある。

＜関係性＞

また、セクシュアリティは自己完結的に働くことはない。よって、セクシュアリティの領域として＜関係性＞を考えることができる。フーコーは、権力と身体を結びつける知を新しい知である「セクシュアリティ」と古くから存在する「象徴秩序」の二つを歴史的出現の順によって区別し、19 世紀後半以降におこった両者の特殊な結びつきを強調している。たとえば、「象徴秩序」のひとつである血の象徴性とセクシュアリティの混合は、遺伝や民族主義、そして人種差別などとして出現し、もうひとつの「象徴秩序」である法の問題とセクシュアリティの混合は、セクシュアリティと法を再統合とすることに成功した精神分析という新たな知として成立する。権力におけるセクシュアリティと象徴秩序の結合は、ある関係をタブー化し、危険視することによって果たされる。セクシュアリティは、あるタイプの人間と人間の関係性を危険化するものとして出現したと考えられる。

＜国家＞

最後に、フーコーが生権力をセクシュアリティによって解読できると考えたのは、＜国家＞があるためである。フーコーは、国家をこのように定義づけている。「国家、それは、多数多様な統治性の体制によってもたらされる動的効果に他ならない」(Foucault, 2004/2008, p. 94)。ここではとりあえず、＜国家＞を多様な権力によって構成され維持される秩序であるとしよう。生権力がある生命を対象として設定することができたのは、権力が範囲とする領土、権力が対象とする住民、そして権力が目的とする国力や統治という明確な戦略を描くことができたからである。ここに、フーコーがセクシュアリティの領域とする「生殖行為の社会的管理化」というテーマが現われるのである。セクシュアリティは、国家の繁栄を約束する鍵となると共に、破綻をもたらすかもしれないリスクとなる。維持されるべき＜国家＞によってセクシュアリティは、問題化されるのである。

このようなフーコーの研究の問題設定は『知への意志』の中で明確に提示されてはいないが、コレージュ・ド・フランスの講義では中心テーマとして取り上げられている。＜人格＞のテーマは『異常者たち』(1999) で取り上げられ、＜関係性＞は晩年の古代ギリシアの問題へと発展し、＜国家＞は統治性の問題として『安全・領土・人口』(2004) や『生権力の誕生』(2004) で論じられている。

以上のことを踏まえて、フーコーが特徴的に描いた「セクシュアリティ」の潜在性と危険性という性格とセクシュアリティ固有の領域である＜人格＞、＜関係性＞、＜国家＞に注目し、「セクシュアリティ」がどのように扱われたのか、そして潜在的で人びとの様々な活動を危険化する近代の「セクシュアリティ」への対抗言説としての現代のセクシュアリティ研究が自身にどのような政治的使命を課しているか、そしてそのような使命をもったセクシュアリティ研

究が直面している限界や問題がどのようなものであると考えることができるかを批判的に分析しよう。

3 セクシュアリティと人格

フーコーが指摘する「異常者」という概念の出現による、逸脱したセクシュアリティの内面化の論述は、単にアイデンティティが権力の結果であるとかアイデンティティ・ポリティックスは権力を再生産するということを意味するのではない。デイヴィッド・ハルプリンが強調しているように、フーコーはセクシュアリティ研究において実際に存在した人々の性行動や性アイデンティティを論じているのではない。フーコーはあの有名な「ソドミー」と「同性愛者」の変化の記述において社会の中の性の扱われ方の変化を説明しているのである (Halprin, 2002, pp. 26-32)。

「異常者」という概念の出現は、規範から外れた些細な行動までも問題化し、異常化の徴候の発見と矯正の使命を精神医学や教育に与えたとフーコーは指摘している。フーコーは、「異常性」を論じる精神医学を「病理的なもの」と「規範」の対立によって特徴づけて、このように述べている。「精神医学は、常にいたるところで、つまり、最も些細で、最も平凡で、最も日常的な行動や、自らにとって最も馴染みの深い対象において、規範としてのノルムに対する逸脱であると同時に正常なものにたいする病理的な機能不全であるようなものにかかわることになる。秩序の混乱と機能の障害とが目の詰まった織物のなかで互いに絡み合って混ざり合うような一つの領野が、そこに構成されるのである」(Foucault, 1999/2002, p. 178)。「異常者」とは、単なる逸脱した行為の総体的主体ではなく、日常的なある行為に付随する徴候や避けなければならない帰結として、まず立ち現れてくるのである。このような「異常者」の形態は、セクシュアリティの潜在性という性質がなければ、些細な行動を徴候として読み取ったり、異常化を矯正によって抑止できるものとして規定することができない。「異常者」を創り出すかもしれないセクシュアリティは、人格に対しては危険なものとして、そして日々の実践の中では潜在的なものとして出現するのである。

ここで、＜人格＞をフーコーが強調するような正常と逸脱を通じて構成される規範的なものとして考えるだけではなく、＜人格＞がチャールズ・テイラーの指摘するような近代社会における道徳の源泉としても機能している点を忘れてはならない。チャールズ・テイラーは、自己の解釈を繰り返すことによって見出される「本当の自己」に忠実であるということが近代社会において道徳的理想となったと論じている (Taylor, 1989)。テイラーの議論に従うならば、＜人格＞は各個人の固有性を確保すると同時に、社会においてそのような固有性は尊重されるべきものとして理想化されることによって一般性をもって社会の中に位置づけられるのであ

る。テイラーの「自己という理想」をめぐる議論にフーコーはおそらくそのような自己は「異常者」や狂気の排除によって可能となったと留保をつけるだろうということは容易に推測できる。だが、テイラーの道徳の源泉としての人格とフーコーの規範の目的とされる人格という完全に分離していないが性質の異なる人格をめぐる議論が、ともに近代社会において＜人格＞が個人という特殊性と全ての人間に関係するという一般性の両方を持ち合わせているものとして扱われていることを強調している点を見逃してはならない。その点に留意することで、「異常者」として発見されるであろう少数の者が社会全体にとっても大きなスキャンダルになることが理解できるのである。

フーコーが指摘する「異常者」の出現は、特に本能とセクシュアリティの問題化の中でセクシュアリティと人格の間にこのような関係を打ち立てたと考えることができる。ある欲望や行為、またはある行動傾向の出現そのものを人格構成の失敗として描けるようになった。つまり、正常性を目的とするセクシュアリティの管理の問題において、セクシュアル・マイノリティーズの存在そのものが、その出現においてもこれから存在しうるという可能性においても規範化の失敗を意味するのであり、対処しなければならない問題なのである。セクシュアリティの正常性の要請を掲げる人々が主張するようなセクシュアル・マイノリティーズへの攻撃的な意見や態度を、単に「フォビア」だと片付けることができない理由がここにあるだろう。「セクシュアリティ」とは、そもそもある人格を危険性のもとに揺るがし続けるという意味で反人格的な働きをするのである。

このような反人格的なセクシュアリティの作用の中に、現代のセクシュアリティ研究の政治的領域を見出すことができるように思われる。ある欲望や行動、振る舞い、独自の文化など非「正常」者であるセクシュアル・マイノリティーズの存在を肯定するという政治的要請である。反人格的なセクシュアリティに対し、あるセクシュアリティやそれを持った人格を肯定することそのものが、一見個人のレベルのみで重要なように見えるのだが、社会のレベルにおいてもすでに政治的な行為なのである。それも、彼／女らの行動や欲望が、何か潜在的で徴候的なものではなく、それ自体の価値があり完結した固有の存在として取り扱うことが重要となる。人格やマイノリティの主体の肯定的な言説や態度によって「可視化」という政治的手段が出現し、普遍的な人権概念を経由する権利運動だけでなく、表象や表現、もしくは、人びとの経験の一つひとつが、固有の政治的場や政治的存在として現われてくるのである。テイラーが強調するような人びとの存在をその固有性において肯定し人びとの経験や感情をその独自性で捉えること、もしくはフーコーの戦略であるある人びとを危険化し排除しようとする権力を分析しその権力を裏切ることを試みることなどがセクシュアリティ研究という学問が持つ政治性として位置づけられる。

この観点から、「アイデンティティ」の問題がなぜ政治的に些細なことであると同時にいくらかは危険なものでもあるかが見えてくるだろう。政治的に些細なことであるとは、「アイデンティティ」が自己を意味するのか社会的カテゴリーを意味するかに関わらず、それに頼ろうが頼るまいが、欲望や存在を肯定することとは直接の関係はないからである。たしかに、アイデンティティの肯定がマイノリティーズの重要な存在肯定にはなるだろう。だが、マイノリティーズの肯定は、必ずしもアイデンティティを経由する必要はない。アイデンティティの承認は人格肯定のひとつの形態であるが、様々な文化的背景の人びとを含めた全体的な法的自由の拡大やある特権を持った人びとの特権を縮小することによる全体的な平等化など他の形態も同様に存在する。[1] 同時に、アイデンティティの危険性とは、アイデンティティへの所属がひとつの政治的規範化や生存条件の一形態となったり、排除の理由になったりする場合がある。だが、この危険性がすなわちアイデンティティ批判となるわけではないだろう。問題は、承認と排除を生み出す形式であるからだ。人格の問題としてのセクシュアリティの政治からは、アイデンティティと政治的成果は密接に関係しながらも、必然的に結び付けられるものではない。おそらく「アイデンティティ」の政治は、セクシュアリティの脱潜在化の戦略として考えられるべきだろう。セクシュアリティによる「アイデンティティ」は、セクシュアリティをある個人を「異常者」に変えるような潜在的で危険なものとして扱うのではなく、個人や集団を固有の存在として決定するものや結びつけるものとして取り扱うことを可能とする。セクシュアリティは「アイデンティティ」によって、潜在的なものから外面的な特徴となるのである。[2]

また、反人格的な作用をするセクシュアリティを問題化し、それにどのように対処するかという政治的要請の中で、ジュディス・バトラーの理論がいかに豊かな可能性を有しているかが明らかになる。バトラーのパフォーマティヴィティ（performativity）や精神（psyche）といった概念は、人々の行為や主体化を可能とする条件が同時に現在の権力を撹乱する可能性を持つという、マイノリティーズの存在やある人格の肯定とその人格を否定的なものとして排除しようとする権力の撹乱という政治的要請の両方を同時に満たすことが可能なのである。近年のバトラーの理論への熱狂的注目は、セクシュアリティ研究の政治的要請のひとつの側面として捉えることができるのである。

4 セクシュアリティと関係性

フーコーの「異常者」の誕生の強調に見られるように、フーコーはセクシュアリティを「関係」的なものに還元することに警戒しているようである。例えば、フーコーが注目する「同性愛者」の誕生は、法に違反した関係を意味するのではなく、「自己の内部で男性的なものと女性的なるものを転倒させる」(Foucault, 1976/1989, p. 56) ことによって定義されたある性質

の誕生を意味する。フーコーは晩年のインタビューにおいて、性の実践や他者との関係の構築をセクシュアリティの問題として取り扱うのではなく、生の様式や倫理の問題として扱っている (Foucault, 1985/1987)。フーコーがセクシュアリティの作用において重要視しているのは、人を「種」としての扱うと同時に個人化していく権力の運動である。だが、決してフーコーはセクシュアリティが関係的なものとして扱われていなかったと主張しているのではない。むしろ、彼が現代の支配形態の分析には適していないとして批判する「法」とセクシュアリティの奇妙な混合態の次元において、セクシュアリティは関係性と結びつく。フーコーは法とセクシュアリティの不幸な結婚を、権力の分析においては「法」という古い偏見に染まったもので現代の権力分析には適したものではないと退けようとするが、ナチスのホロコーストや優生学、そして性に基づいた精神医学まで歴史の中で最も強力に働いた権力の形象でもあることに気づいているために、彼は『知への意志』の記述ではとても曖昧な態度を取っている。[3]

だが、セクシュアリティがある関係性にとってどのように働くかは、フーコーは明確に述べている。セクシュアリティは「肉欲」の問題として捉えられることによって、フーコーが「婚姻の装置」と呼ぶ法と関係の問題と接合されることになったが、そのような接合によってセクシュアリティは家族の中に脅威を持ち込む。その脅威とは、「絶えず要請され、しかも絶えず拒絶されており、強迫観念と呼び掛けとの対象であり、恐れられている秘密であると同時に不可欠な継ぎ手」(Foucault, 1976/1986, p. 140) である「近親相姦」の恐怖であり、「逸脱した婚姻と異常な性的欲望」(ibid., p. 142) が生み出す「異常者」たち、そしてセクシュアリティの管理の失敗が約束するであろう家系の貧困化である。セクシュアリティは、親子の間を性的に危険にし、家系の末裔の健康や繁栄に不安をもたらす。セクシュアリティは、婚姻の装置の中において感情や欲望を介して絶えずある関係に不安を喚起するような「反関係的なもの」として組み込まれるのである。[4]

フーコーのセクシュアリティを「反関係的なもの」であると特徴づけると、アンソニー・ギデンズのフーコー批判を思い出さずにはいられないだろう。フーコーによるセクシュアリティ研究へのギデンズの不満は、フーコーはセクシュアリティの研究において近代の性的関係に特徴的な「愛情」を軽視しているという点である。ギデンズは、この近代の「愛情」の出現こそ家族の形態の変化や「倒錯」という精神医学の概念への攻撃を可能にした当のものであると強調している。セクシュアリティとロマンティック・ラブが結びつくことによって、「セクシュアリティ」の概念は著しい変化を被ったのであって、フーコーのようにキリスト教から近現代までの性の言説を直線的に描き出すことはできないとギデンズは批判する。「ヴィクトリア朝時代の医学文献が暴露し、その結果事実上周縁に追いやっていたセクシュアリティと、今日数多くの書物や論文等が記述する日常的な現象としてのセクシュアリティとの間には、著しい差

異がある」(Giddens, 1992/1995, pp. 41-2) のである。ギデンズのフーコー批判は、正しいが、見当違いでもある。正しいとは、現代の「セクシュアリティ」とフーコーの「セクシュアリティ」を同一視できないことである。見当違いなのは、全く異なった作用をするフーコーの「セクシュアリティ」と「ロマンティック・ラブ」を同一視している点である。フーコーの「セクシュアリティ」は、家庭の中で反関係的なものとして現われ、様々な人間関係を潜在的に危険なものとしていくが、「ロマンティック・ラブ」は、関係的なものであると同時にその特別な関係を肯定的に描くものである。ギデンズは、この両者を同一視することによって再帰的な親密な関係性と逆再帰的な関係性である嗜好的関係性や衝動強迫的関係性を分割し、行き来しなければならなくなっている。さらに、ギデンズは、性的暴力やセクシュアリティにまつわる精神的な不安を関係性構築の失敗としか描くことしかできていない。関係性がそれほど重要ならば、セクシュアリティと関係性の間にこれほどまでの強力な結びつきを求め、両立させる必要はないだろう。ギデンズが強調するような親密性が、ヴィクトリア朝のセクシュアリティに対する対抗言説としてなぜ可能となったのかは、セクシュアリティがそれ自体反関係的なものであるからである。反関係的な作用をするセクシュアリティに対して、ある関係性の肯定が抵抗となったのである。ギデンズのように関係性の変化を「セクシュアリティ」の発想の変化として扱うと、なぜ今でもイヴ・セジウィックが論じたホモセクシュアル・パニックのようなかたちで存在する関係構築の失敗が存続しているのかが説明できないし、「倒錯」という概念への抵抗やタブー視されていた異人種間などの結婚の政治的主張に「愛」や「関係性」の問題化がうまく働いたのかといった問いは、近代の運動という抽象的なものに還元されてしまうだろう。

おそらく、ギデンズが指摘するような現代の「セクシュアリティ」の言葉の変化も、反関係的に作用する「セクシュアリティ」と関係性の差異の間に見出せる。反関係的に働く「セクシュアリティ」への対抗言説としての、関係肯定的なセクシュアリティ研究の出現である。興味深いことに、フーコー自身も関係の肯定や新たな関係の出現可能性を政治的抵抗として捉えており、インタビューの中でこのように述べている。「同性愛は、関係、そして感情の潜在的可能性を再び開く歴史的な機会です」(Foucault, 1981/1987, p. 16)。「家族」という制度化され規範を伴う関係の下でのみ許され、そこで反関係的に機能するセクシュアリティに対して、あるべきとされる関係以外の「関係」の肯定的言説はそれ自体で政治的になるのである。ここに、国家による法的保護である「同性婚」や「パートナーシップ」の要求、「結婚」に反対したとしてもある関係を承認しようとする動き、同性カップルやジェンダー・マイノリティーによる子育てや親子関係の研究、一見、政治的なものに見えることのない「客観」的な「コミュニティ」研究に至るまで、これらはある関係を危険化しようとするセクシュアリティに対して潜在的な抵抗となる理由があるのである。これまで危険視されていた関係のセクシュアリティ

研究の注目と肯定的見解は、現代のセクシュアリティ研究の政治性の特徴である。そして、政治的効果が出る早さや範囲、その強度には差があるだろうが、性的な愛情関係に留まらず、友情や家族との愛情、もしくは感情の伴わない単なる肉体関係にいたるまで「マイノリティ」と呼ばれる人びとの関係性を肯定的に、または危険なものとして扱わずに描こうとするあらゆる試みは、政治的なものとして解することができるのである。

だが、「関係性」の肯定は、ギデンズの研究ばかりではなく、ユルゲン・ハーバマスの先駆的なコミュニケーション理論においても見られるのにも関わらず、そして膨大な量になりつつある現代のセクシュアリティ研究の関係肯定的な言説があるにも関わらず、なぜある関係を危険化しようとするセクシュアリティの働きは未だに顕著に見られるのだろうか。そこで、フーコーが指摘するセクシュアリティの「潜在性」という特徴に注目したい。「潜在」的で「危険」なセクシュアリティは、ある関係の中に十全に表現され、顕在化することはない。このために、どの関係が安全であり、どのような関係が危険なのか分からないという必然的な不安が既存の関係性を揺るがし続けるのである。イヴ・セジウィックの『クローゼットの認識論』(1990/1999)は、近代西洋社会におけるホモ／ヘテロセクシュアルを分割する認識作用の分析として読むよりも、セクシュアリティの潜在性を分析し表現したものとして読んだほうが興味深いだろう。セジウィックがかなり複雑な分析で示した様々な二項対立的思考の中に沈殿していく近代のホモ／ヘテロセクシュアルの定義の不可能性は、セクシュアリティの潜在性をうまく掴み取っている。セジウィックは騙し絵を見るときのように視点を少し変えるだけで同じような男性同士の関係が安全なものから一瞬で危険なものへと様変わりする様子を分析しているが、このような根本的な変化を可能にするのがセクシュアリティの潜在性であり、セジウィックが様々な分析から取り出そうとしているホモ／ヘテロセクシュアルの非一貫性である。フーコーは、セクシュアリティの潜在性を「告白」において決して現出しない部分に見たが、セジウィックは近代の男性同士の関係の不安定性において見ているのである。もちろんセジウィックの独創性は、言説の匿名性を好み知と権力の配置を俯瞰的に描き出そうとするフーコーに対し、「アンチ・ホモフォビア」という政治的要請を彼女の分析の基礎に据えることによって近代のセクシュアリティの潜在的で不安定な性質から派生する認識そのものを男性同性愛の排除の形式として規定しなおす力業にあるのだが。このようなセクシュアリティの潜在性は、ハーバマス的な理性によるコミュニケーションの普遍的基盤においては予め排除しなければならないが、その排除はセクシュアリティが関係構築において排除可能なものだと意味するために様々な関係において不可視的に働くセクシュアリティを過小視する問題も孕んでしまうのである。

5 セクシュアリティと国家

フーコーのセクシュアリティ研究は、従来の主権国家の問題に囚われた政治学への鋭い批判を含んでいるが、だからといってフーコーは国家を問うことは必要ではないと主張しているわけではない。むしろ、フーコーは国家の問題は彼の諸研究の核心にあると述べている。「私がやろうとしたのは常に、いくつかの実践、いくつかの振舞い方、いくつかの統治性が、確かに断片的であるにせよ連続的なやり方で段階的に国家化されていくそのプロセスを評定することだった。国家化の問題は、私が提起しようとした諸問題の確信そのものにある」(Foucault, 2004/2008, p. 93)。ここでは、すでに数多くの研究がなされているフーコーのセクシュアリティ研究が導く国家の問題とともに、特に現代のセクシュアリティをめぐる言説と国家の交差に注目したい。

フーコーのセクシュアリティ分析を読むとき、セクシュアリティと国家の関係は、セクシュアリティの特徴がその否定的性格において目立っていた＜自己＞や＜関係性＞とは異なり、よりアンビヴァレントなものである。国家内でセクシュアリティを介して働く規律権力と生権力は、国家の繁栄を約束するものであると同時にその失敗は国家の衰退を招くものであるために、「セクシュアリティ」は国家の存続と繁栄のために必要で絶えず監視や調整が求められるが、同時に国家を内側から蝕んでいくものである。

フーコーは、生権力が目的とする人口の調整や人びとの健康管理のために、「異常者」や「欠陥」を持った人間の排除によって国家全体を統制する働きを強調している。生権力に特徴的な危険性の管理方法は、予防と排除である。予防とは、伝染病の予防やフーコーが「ポリス」と名づけた都市計画や食料の計画的な供給などによる人びとの生の維持である。排除とは、監獄や病院への「異常者」の監禁や、遺伝という発想から「異常者」の正常ではないものを子孫に伝える可能性を極力抑制することを手段とする。現代では、フーコーが指摘するような極端な排除のメカニズムが見られることは少なくとも自由主義諸国で見られることは少ないし、優生学や遺伝のテクノロジーも科学自身が否定していったものである。

だが、住民の繁殖の管理は国家の仕事であり続けているし、人びとの想像の次元ではまだセクシュアリティの異常化は国家の脅威となり続けている。セクシュアリティが国家の危機に結びつくという発想は「保守的」と呼ばれる人々の強迫的な恐怖感だけには納まらない。トニー・クシュナーの『エンジェルス・イン・アメリカ』(1992) では、アメリカの国家の危機とエイズによって破壊されていくゲイの人々の体験が結ばれている。クシュナーが描くところでは、ゲイの人びとやその周囲の人間が体験する悲惨さこそが国家の危機なのである。クシュナーはセクシュアリティと国家を、これまでのセクシュアリティのテクノロジーを支えた国家の危機とは全く異なった「危機」として結びつけたが、彼が描くようなある人々の悲惨さと国家の危

機の結びつきは、現状の革新的な変化を望む人々の政治的動機となるものである。

クシュナーが「レーガン政治」として象徴化したような、国家の危機とあるセクシュアリティの存在とを結びつけ、そのセクシュアリティを執拗に排除しようとする政治に対して、国家の危機とセクシュアリティをいかに切り離し、国家が排除しようとするセクシュアリティの承認を求めようとする傾向は、学術的な言説よりも政治やアクティヴィズムの言説に現在はより多く見られるかもしれない。ひとつの戦略として、例えば「ホモセクシュアル」と「ペドフィリア」の差異や現実的な「実践」と「幻想」の間の断絶の強調、犯罪とセクシュアリティの結びついた表象への批判など、あるセクシュアリティから本当に「危険」な要素を切り離し、その断絶を強調することが考えられるだろう。すなわち、一部のセクシュアリティの脱危険化である。また、同様に、セクシュアル・マイノリティーズの人びとがいかに良き市民であるのか、「LGBT市場」と呼ばれるものがいかに国家の経済に恩恵を与えるのか、または、歴史上の偉人や天才たちが実は国家が危険視するようなセクシュアリティを持った人びとであったという歴史の解釈を発掘し持ち出すことによる国家への有意義性の強調の戦略も見出すことができる。すなわち、一部のセクシュアリティの有用化である。

あるセクシュアリティの国家に対する脱危険化と有用化は、その分かりやすさと効果の即効性によって政治的に大きな意味を持ちえる。おそらく、このような政治的戦略こそが、現代の「セクシュアリティ」と「国家」がある関係を結ぶあり方の顕著な傾向のひとつである。フーコーが 1970 年代に分析したようなかたちでセクシュアリティと国家が結びつくことが目立たなくなったが、セクシュアリティと国家は未だに特殊な関係を必要としているのである。

6 それぞれの限界と問題点

以上の三つの領域における「セクシュアリティ」の作用と、それへの対抗言説としての現代のセクシュアリティ研究の基本的な姿勢の特徴を図式的に枠づけてきた。現代のセクシュアリティ研究は、歴史的に構成されたセクシュアリティの言説に寄り添いながらそれを反転したり、新たな経験の可能性を指摘したり、思考をその限界まで突き詰めることによって、セクシュアリティの諸言説の空白を執拗に抉り出そうとする。セクシュアリティ研究は、自らの言説を可能とした歴史に、特殊な戦術をもって自分自身の言説を重ね合わせることで、己の政治性を確保すると同時に独自の思考の場を形成しているのである。このような現代のセクシュアリティ研究を可能とした「セクシュアリティ」への知的態度の変化を、「エピステーメー」の転換として認めるべきだろうか。だが、現代のセクシュアリティ研究の持つ理論的問題は、近代の思想や現代の多くの理論が持つ問題とそう大きな隔たりがあるようには私には思われない。これらの対抗言説としての特徴は、実際の歴史的言説のうちに自らを置いているために、他の

全ての理論と同様に特有の限界や問題点があると考えられる。私が限界や問題点だと考える特徴は、その利用者にとってみれば同時に理論的な優位性であったり、また魅力でもあるのだが、ひとつの解釈として問題点を指摘するのは、無駄ではないだろう。

反人格的に働くセクシュアリティへの対抗としての様々な人格の肯定的言説は、他者の問題を問い続けなければならない。いかに他者から自己の尊厳や唯一性を傷つけられずに扱われるかという問題は、いかに自己と同様の重要性をもって他者を扱うことができるかという問題を導き出す。さらに、このような相互依存的な関係のために自己と他者をどれほどまでに自律的な存在として考えることができるかという問題も最重要の問題のひとつとして浮上してくるだろう。もし、自己と他者が全く同様の存在として考えられれば自己と他者の唯一性を傷つけることになるだろうし、もし他者の唯一性を先行させれば反人格的なセクシュアリティの自分への働きを受け入れなければならなくなるかもしれない。すなわち、近代哲学が常に直面している自己と他者のアポリアを正面から扱わなくてはならなくなるのだ。

自己と他者が同様の重要性と尊厳を持って扱われるためには、自己と他者が出会う世界（社会）の想定も必要となる。よって、自己と他者と世界（社会）の調和的な理論の構築こそが問題となる。おそらく、現代の理論では、この困難な問題に関して二つの批判的アプローチ方法が与えられていると考えられる。ひとつは、主にデリダ派のアプローチであり、自己の有限性を核とし、他者理解の完全な達成の不可能性を他者存在の大きさとして認識することによって、自己の他者への責任の不可能性そのものを倫理的な源泉とし、他者の無限性に向かって正義を考察することで未来の共同体の可能性を探求するアプローチである。もうひとつは、ポスト・ハーバマス的なアプローチであり、自己と他者が相互承認された理想化された共同体を想定し、それと現在との距離を、承認をめぐる闘争の過程として理論化するものである。いわば、現在の自己と他者と世界（社会）の調停の問題に対し、最終的な解決が困難で絶えず後退していく理想的な状態を現在の批判と未来への可能性として活用するか、または理想的な状況と現在の間の断絶そのものを社会における相互承認の運動の原動力とするか、のどちらかである。デリダ派とフランクフルト学派は理論的な立場の違いがあるが、両者とも調和的な世界の到達可能性の困難さそのものを批判的理性のエネルギーにすることによって、この問いに答えようとしている。[5] この両者は、困難な問いを解決することよりも、問いそのものを活用して現在に対し批判的に用いようとするものである。だが、ここでの問題は、もし私たちが発している問いそのものが解決不可能ならば、そのような問いに煩わされ続ける必要が本当にあるのだろうかという問いが、思考に絶えずついて回ることではないだろうか。近年の決断主義の興隆やアカデミックな言説そのものへの反発や不信に見られるように、思考の限界が思考の放棄へと突然切り替えられる危険性を思考そのものが孕んでいるのである。

デリダ派やポスト・ハーバマス的なアプローチのジレンマは、私たちに重要な示唆を与えてくれるものである。彼／女らは、これまで本稿が特徴づけ辿ってきた＜人格＞、＜関係性＞、＜国家＞の個人の理性からの包括的な理論構築がいかに困難なものであるかを教えてくれるだけではない。包括的な理論構築が不可能であるという認識を批判的に利用しようという戦略も、一種のジレンマを生み出しているのだ。それゆえに、デリダ派とフランクフルト学派という対極的な他者概念を構築しようとする二つの立場が、自己中心主義に陥ること、そして理性や思考を放棄してしまうことの二点を理性ではなく倫理的に抑制しなければならないことに同意するのである。統合的理論の行き詰まりの戦略が断たれているだけではない。統合的理論が不可能であるという、まさにその事実を利用しようとする戦略も行き詰っているのである。

様々な関係性に肯定的態度を示そうとするセクシュアリティ研究に対して、経済的なものが一種のジレンマとして立ちはだかるだろう。なぜなら、経済的なものとは、ある関係を利潤を生み出すものに変え、侵食するからである。そのために、ハンナ・アーレントやハーバマスは理性による純粋な関係性を築く公共空間から経済的なものを追放しなければならないか、少なくとも公共空間を歪めるものとして経済的なものを位置づけなければならなかったのである。セクシュアリティを介した関係からどれほど利益を得ることができるのか、またはできないのかは問題ではない。その関係が利益関係に転化されてしまうかもしれないという可能性こそが問題なのである。90 年代に起こった様々な論争で「クィア・ポリティックス」の潜在的な政治性を論じるときに、ナンシー・フレイザーやジュディス・バトラー、そしてスラヴォイ・ジジェクまでセクシュアリティからの問いかけが現代の経済的格差の是正を促す批判となるか、いかに現在の経済活動への根本的な批判となるかがひとつの論点になっていたのは見落とすべきではないだろう。ジジェクがクィア・ポリティックスの潜在的な力に根本的な疑問を投げかけるとき、彼の批判はクィアの新たな関係構築や生活が現代の消費型資本主義と結びついてしまっているのではないかという視点から行われている (Žižek, 1999, pp. 221-6)。彼の批判を、セクシュアリティ研究をマルクス主義に従属させようとしていると一蹴することができない理由がある。もし、セクシュアリティ研究がある関係性の肯定的言説を生産することによってその政治性を担保しているのならば、その肯定化された関係が利潤や搾取関係が成立する経済的なものに転落してしまうとき、セクシュアリティ研究は自分が約束する政治的な力を自分自身で裏切ることになってしまう。経済的なものは、セクシュアリティ研究が救おうとするある肯定すべき関係性を、支配の形式や単なる利益関係へと変えてしまう可能性をもたらすのである。[6]

セクシュアリティと国家の関係において、もし国家が想定する「危険性」がセクシュアリティの政治が約束する「非危険性」と「有用性」を上回ってしまうと、自分自身の政治的な発言が

国家による攻撃の理由となってしまうことが予想できるだろう。だが、理論的に論じるならば、果たして私たちは「国家」とセクシュアリティを論じるにあたって、適切な言葉を見つけているのかということを検討すべきだろう。国家を法的な次元で考えることはできるが、フーコーが常に力説していたように、セクシュアリティは法的な次元で働くことはない。そこで、法の次元以外から国家を考えるとき、多くの場合は経済や「権力」という視点が用いられるが、経済や「権力」を国家分析に適用するとすぐに国家を飛び越えて（「グローバリゼーション」や「帝国」などどのような概念を使うかは理論家次第なのだが）、地球規模の分析へと拡大してしまう。一方、国家の結合体を説明しようとして「ナショナリズム」という人々の心的なものに注目することもできるが、ここでは国家の複雑な排除のシステムや政治運動などに見られる人々と国家との複雑な関係が個人の心的なものに還元されてしまう。法の概念に頼ることなしに国家を語ろうとすると、国家を飛び越えてしまうか、人びとの心理にミクロ化されてしまい、国家そのものはうまくすり抜けてしまうのである。国家とセクシュアリティの関係は、これからひとつの主要なテーマとして扱われ、言葉を洗練させていく必要があるだろう。

最後に、セクシュアリティへの対抗言説として、セクシュアリティの潜在性と危険性そのものを最大限に利用してしまおうという理論的な傾向も指摘しておかなければならないだろう。これは、ジョルジュ・バタイユやレオ・ベルサーニといった理論家が取る戦略である。セクシュアリティが危険であり、自己や他者との関係、そして国家を危険にさらす働きをするのならば、その危険性そのものを大胆に肯定し、むしろそれらの解体のためにセクシュアリティを用いることができるのではないだろうか。そのような視点から、セクシュアリティの肯定的言説を形成するのである。彼らのセクシュアリティの潜在性や危険性の肯定の戦略に用いるために重要視されるセクシュアリティの理論家が、ラカンやフーコーではなく、セクシュアリティを最も潜在的なもので確定不可能なものとして扱うフロイトであるという共通点も偶然ではないだろう。だが、彼らの言説の興味深いところは、セクシュアリティの破壊力を肯定する一方、実際に自我が「崩壊」していると社会的に烙印を押され排除されている精神病やヒステリーなどの精神病のジェンダー性、そしてセクシュアリティの「破壊力」の口実のもとに巧妙に排除と矯正を行う諸テクノロジーへの言及の少なさである。もし、実際にセクシュアリティによる破壊から何らかの解放が導き出せるのならば、これらの問題に言及し、現在起こっており同時に排除もされている精神的破壊とこれから起こるであろう解放的な破壊を峻別するか接合する必要があるだろう。ここに、デリダがヴォルター・ベンヤミンやハイデッガーを批判しながら正義を論じるときに問題とし、脱構築の倫理的態度である責任＝応答可能性を支える論点でもある「破壊」と「解放」の間の緊張が存在するのである (Derrida, 1994)。彼らのセクシュアリティによる破壊の美学化は理論的には大変洗練されたものであるが、それでも彼らが唱える

「破壊」の美学は、伝統的な文化的エリートの美学による社会批判とセクシュアリティの危険性との耽美的な昇華と自己閉鎖的な破壊の賞賛に留まっているように思われる。

このようなセクシュアリティ研究の＜人格＞に対する他者、＜関係性＞に対する経済的なもの、＜国家＞に対する法ならざるもの、といった理論的なジレンマとセクシュアリティの破壊‐革命的利用の問題は、次のように整理することができるだろう。１.「＜人格＞、＜関係性＞、＜国家＞の統合的理論展開の困難」、２.「肯定すべき関係性の純化の困難」、３.「権力関係からの国家論の展開の困難」、４.「セクシュアリティの危険性の革命的使用の困難」である。これらは、今まで論じてきたセクシュアリティ研究が源泉とする政治性に伴う理論的難点である。フーコーも『知への意志』以降このような問題を新たなアプローチから論じようと試みており、晩年のフーコーの仕事はこれら四つの問題をいかに新たな問題から問い論じることができたかということに尽きるだろう。現代のセクシュアリティ研究も晩年のフーコーと同様の問題に直面しているのである。もし、＜人格＞の肯定をその政治性として担保するならば、いかに＜他者＞を考えることができるか。＜関係性＞の肯定をその政治性として担保するのならば、いかにその肯定する＜関係性＞を誰か一部の者の利益や支配に利用されないように警戒するか。＜国家＞との共存を図るのならば、いかに国家を捉え共存可能なものとして構築することができるのか。そしてセクシュアリティの危険性をその戦略に用いるのならば、「解放」の幻影によって正当化することで満足するのではなく、破壊そのものへの責任＝応答可能性をいかに確保することができるのか。これらの理論的な困難は、セクシュアリティ研究に政治性をもたらすとともに、新たな思考の必要性を強く要請するものでもあるのである。

Reference

Balibar, Étienne. (1989). Foucault et Marx: L'enjeu du nominalisme. In François Ewald, *Michel Foucault philosophe: rencontre internationale Paris, 9, 10, 11 Janvier 1988* (pp. 54-76). Paris: Seuil.

Butler, Judith., Laclau, Ernesto., & Žižek, Slavoj. (2000). *Contingency, Hegemony, Universality: Cotemporary Dialogues on the Left*. New York: Verso. = (2002)『偶発性・ヘゲモニー・普遍性――新しい対抗政治への対話』(竹村和子 & 村山敏勝 , Trans.). 東京 : 青土社 .

Deleuze, Gilles. (1986). *Foucault*. Paris: Les Edition de Minuit. = (1987).『フーコー』(宇野邦一 , Trans.). 東京 : 河出書房新社 .

Derrida, Jacques. (1994). *Force de Loi*. Paris: Éditions Galilée. = (1999).『法の力』(堅田研一 , Trans.). 東京 : 法政大学出版局 .

Duggan, Lisa. (2002). The New Homonormativity: The Sexual Politics of Neoliberalism. In Russ Castronovo & Dana D. Nelson (eds.), *Materializing Democracy: Toward a Revitalized Cultural Politics* (pp.175-194), Durham: Duke University.

Esposito, Roberto. (2003). Biopolitica, immunitàm, communità. In Laura Bazzicalupo & Roberto Esposito (Eds.), *Politica della vita; Sovranità, biopotere, diritti* (pp. 123-133). Roma-Bari: Laterza. = (2006, February 10).「生政治、免疫、共同体」(多賀健太郎 , Trans.).『RATIO 01 号』. 東京 : 講談社 .

Freud, Sigmund. (1905). *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. Wien: Deuticke. = (1997).「性理論三篇」(中山元 , Trans.).『エロス論集』. 東京 : ちくま学芸文庫 .

Foucault, Michel. (1969). *L'archéologie du savoir*. Paris: Gallimard. = (1980).『知の考古学』(中村雄二郎 , Trans.). 東京 : 河出書房新社 .

Foucault, Michel. (1976). *Histore de la sexualité, vol.1: La Volonté de savoir*. Paris: Gallimard. = (1986).『性の歴史Ⅰ　知への意志』(渡辺守章 , Trans.). 東京 : 新潮社 .

Foucault, Michel. (1980). The Confession of the Fresh. In Colin Gordon (Ed.), *Power/Knowledge* (pp. 194-228). New York: Panteon.

Foucault, Michel. (1981, April). De l'amitié comme mode de vie. *Gai Pied*, 25. = (1987).「生の様式としての友情について」. In Michel Foucault,『同性愛と生存の美学』(増田一夫 , Trans.) (pp.8-20). 東京 : 哲学書房 .

Foucault, Michel. (1985, January 5). Lorsque l'amant part en taxi. *Gai Pied Habdo*, 151. = (1987).「恋人がタクシーで去るとき……」. In Michel Foucault,『同性愛と生存の美学』(増田一夫 , Trans.) (pp. 45-77). 東京 : 哲学書房 .

Foucault, Michel. (1999). *Les anormaux. Cours au Collège de France 1974-75*. Paris: Gallimard. = (2002).『異常者たち コレージュ・ド・フランス講義一九七四‐七五年度』(慎改康之 , Trans.). 東京 : 筑摩書房 .

Foucault, Michel. (2004). *Naissance de la biopolitique Cours au Collège de France*. Paris: Gallimard. = (2008).『生政治の誕生』(慎改康之 , Trans.). 東京 : 筑摩書房 .

Giddens, Anthony. (1992). *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Cambridge: Polity Press. = (1995).『親密性の変容――近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム――』(松尾精文 & 松川昭子 , Trans.). 東京 : 而立書房 .

Halprin, David M. (1995). *Saint Foucault: Towards a Gay Hagiography*. New York: Oxford University Press. = (1997).『聖フーコー―ゲイの聖人伝に向けて』(村山敏勝 , Trans.). 東京 : 太田出版

Halprin, David M. (2002). *How to Do the History of Homosexuality*. Chicago: University of Chicago Press.

Honneth, Axel. (2000). *Das Andere der Gerechtigkeit: Aufsätze zur praktischen Philosophie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. = (2005).『正義の他者　実践哲学論集』(加藤泰史 & 日暮雅夫 , et al., Trans.). 東京 : 法政大学出版 .
河口和也 . (1997).「賢明にゲイになること――主体、抵抗、生の様式」.『現代思想』, 25(3), 186-194.
Kushner, Tony. (1992). *Angels in America: A Gay Fantasia on National Themes, I: Millennium Approaches*. New York: Theatre Communications Group.
Sawicki, Jana. (2005). Queering Foucault and the Subject of Feminism. In Gary Gutting (Ed.), *The Cambridge Companion to Michel Foucault*. (2nd ed.) (pp. 379-400). New York: Cambridge University Press.
Sedgwick, Eve Kosofsky. (1990). *Epistemology of the Closet*. CA: University of California Press. = (1999).『クローゼットの認識論』(外岡尚美 , Trans.). 東京 : 青土社 .
Taylor, Charles. (1989). *Sources of the Self: The Making of Modern Identity*. Cambridge: Harvard University Press.
Weeks, Jeffery. (2005). Remembering Foucault. *Journal of the History of Sexuality*, 14(1/2), 186-201. Austin: University of Texas Press.
Žižek, Slavoj. (1999). *The Ticklish Subject; The Absent Centre of Political Ontology*. New York: Verso.

Footnote

[1] バトラーは同様の見解を同性婚をめぐる議論において示している (Butler, Laclau, & Žižek, 2000/2004, pp. 214-218)。マイノリティーズの肯定をアイデンティティの肯定として捉える思考の欠点は、アイデンティティは可変的なものであり、アイデンティティの捉え方は人によって多様であり、また必ずしも他者がある人間のアイデンティティを適切に捉えるとは限らないという三点を過小評価していることである。そのようなアイデンティティの側面を重視しつつ、マイノリティーズの肯定をそのアイデンティティの肯定とする原理を厳密に適用すると、もはや誰も肯定されることはなくなるだろう。

[2] そのようにアイデンティティを位置づけた論考として、(河口 , 1997) を参照。

[3] このフーコーのブレは現在でも重要な論点となっている。例えば、ロベルト・エスポジトは、フーコーの「生政治」の概念化の際に見られる主権と権力の間の揺れから彼の「免疫化」という概念を導き出している (Esposito, 2003)。

[4] ここでは確かに、セクシュアリティは家族内でのみ反関係的に機能しているようにしか位置づけられていない。フーコーは婚姻の装置とセクシュアリティの装置の接合によって「家族が 18 世紀以降、情動と感情と愛情の唯一可能な場になった」(Foucault, 1976/1986, p. 139) と述べているので、セクシュアリティを関係性の視点から考える場合、このような限定は不可欠なように思われる。しかし、同様のことはギデンズの研究にもいえるのだが、フーコーのセクシュアリティ研究では梅毒などの性病への恐怖を過小評価しているために、性病への恐怖が実際にいかに人々の身体を規範化し、また人々の接触や関係性のあり方を限定的にしたのかという問題にあまり注意が払われていない。ここでは詳しく論じられないが、セクシュアリティの反関係的な作用はより広範に機能したと考えられる。

[5] 近年、デリダ派とフランクフルト学派の間の緊張はより縮まっているように思われる。例えば、アクセル・ホネットによる「正義の他者――ハーバマスとポストモダニズムの倫理学的挑戦」(Honneth, 2000) という論文は、デリダの他者概念を積極的に評価しハーバマスの道徳原理に見られる性急さを修正しようと試みられている。

[6] この観点から、ネオリベラリズムはセクシュアリティ研究において警戒の対象となっている。例えば、(Duggan, 2002) を参照。

Michel Foucault, and the Counter Discourses of Contemporary Sexuality Studies

Kazuyoshi KAWASAKA

This paper aims to investigate the characteristics of contemporary sexuality studies through a study of Michel Foucault's *The History of Sexuality Vol. 1: The Will to Knowledge* which has had such a wide-ranging influence on queer theory and sexuality studies. *The History of Sexuality Vol. 1* and subsequent research related to it will be examined from the perspective of how contemporary sexuality studies not only confront but also resist the concept of "sexuality" presented by Foucault. The analysis shall then be used to elucidate the characteristics of sexuality studies and the theoretical limits that arise from them. This paper focuses on the functions of Foucault's discourse on "sexuality" and defines it as "latent" and "dangerous," for it is based on an idea of sexuality that is closely associated with power. Along with interpretations of a wide range of sexuality theories, a hypothesis is presented here: the politics of contemporary sexuality studies can arguably be seen in their production of discourses that oppose this "latent" and "dangerous" nature of "sexuality" in the realms of individual personality, relationships and the state.

Keywords: sexuality, Michel Foucault, queer theory, identity, familiarity

「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」へのインタビュー調査

加藤悠二

1 はじめに

私は2002年にICUに入学して以来、常々、異性愛者が持つ同性愛者への好奇心・興味関心は、いったいなんなのだろうか、という疑問を持っていた。同性愛者への興味を持つ人は、往々にしてヘテロセクシュアル女性（生物学的性別が女性、性自認が女性、性的指向が男性である（とされている／と感じている）人）であり、彼女たちの好奇心の対象は、往々にしてゲイ男性（生物学的性別が男性、性自認が男性、性的指向が男性である（とされている／と感じている）人）だった。[1] ゲイ男性の友だちが欲しい。ゲイタウンである新宿二丁目に行ってみたい。そんなことを興奮した様子で語り合うヘテロセクシュアル女性が、私の身の回りには多くいたためである。

その一方で、2004年からCGSの活動に関わるようになっていくなかで、セクシュアルマイノリティをサポートしていきたい、という意志を持つヘテロセクシュアル女性・男性に知り合う機会もまた、得られるようになっていった。CGSで知り合った教職員や学生だけでなく、学外では「LGBTの家族と友人をつなぐ会」をはじめ、多くの人々や団体と接触を持つ機会が、だんだんと増えていったのである。

私は以上のような個人的経験を発端に、「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」に対してインタビュー調査を行なうことを計画した。ゲイ男性と関わりを持とうとするヘテロセクシュアル女性が、興味本位であれ、そうではない問題意識を持つからであれ、なぜそうしたいと思うのか、その動機や背景を聞いてみたいと感じるようになったからである。日本において、ヘテロセクシュアル女性とゲイ男性の関係を描いたメディアに対する検討・批判は行なわれてきた一方で、ゲイ男性と交流を持つヘテロセクシュアル女性に対する調査研究は行なわれてこなかったためである。

前述の通り、ヘテロセクシュアル女性とゲイ男性の関係は、1990年代に日本のマスメディア上で起きた“ゲイ・ブーム”を巡るかたちで論じられてきた(McLelland, 1999/2000; 石田, 2007a/2007b, etc.)。日本における“ゲイ・ブーム“とは、一般的に、1991年2月に発行された女性誌「CREA」の「特集ゲイ・ルネッサンス’91」という記事を端緒に、「実写と小説・漫画とを分ちがたく捉え、ゲイのライフスタイルを、エッセイや座談会、インタビューの形式で積極的に読者に与えていた」マスメディア上での現象で、1995年頃までその状態が続いていた、と考えられている(石田, 2007a, p. 48)。この“ゲイ・ブーム”においては、「男と男の恋愛や、ゲイという存在に、女性たちはなぜ惹かれるかという謎解きが頻繁になされた」とい

う (ibid., p. 49)。

ヘテロセクシュアル女性がゲイ男性に惹かれる理由は、彼女たちが置かれた性差別構造にあると、“ゲイ・ブーム” 研究では論じられている。ヘテロセクシュアル女性は、「男性の女性に対する構造的なアドヴァンテージ」が基盤となり、「女性たちの間に、相対的に優位に立つものと相対的に劣位に置かれるもの、というもう一つの差別」が生じる、「二重化」された性差別の構造に置かれている (吉澤 , 2006, p. 97)。この構造においてゲイ男性は、ヘテロセクシュアル女性にとって、男性上位・女性下位の性抑圧構造から脱却させてくれる「新しい男性」であり、自分と男性を奪い合うライバルとはならない「身を委ねられる女性」である、「理想的ゲイ男性」として表象されていた。そのなかで、ゲイ男性は「社会的には男性からの差分として、真意的には女性への近接として」、理想化されていった (石田 , 2007a, p. 51)。

しかし、これらの理想像は幻想であるとして、ゲイ男性・レズビアン女性の研究者やアクティビストを中心に、様々な批判がなされた。Hall は研究者の立場から、ゲイ男性の理想化は、ゲイ男性とヘテロセクシュアル女性の両者にとって、性抑圧構造の問題を解決せず、むしろ問題の所在を隠蔽し得るものである、と批判している (1998/1999)。Hall と同様の立場からヴィンセントは、“ゲイ・ブーム” で見られる一見肯的に見えるイメージは、しかし、そのイメージから外れる者に対する差別が生じる危険性があるという意味で、「非常に扱いにくい差別の形態」であると指摘する (小谷 & ヴィンセント , 1996, p. 84)。そしてこのイメージは、欧米に見られるような身体的な暴力ではないものの、蔑視・差別を加える日本的な同性愛嫌悪であると指摘している (ibid., p. 84)。また、ゲイ・アクティビストであり文筆家である伏見は、勝手に理想的なイメージを抱いてゲイ男性に近づき、そのイメージに裏切られたときに怒り出すヘテロセクシュアル女性の行動を端的に、「女のセクハラ」と評している (伏見 , 2004, p. 565)。平野 (1994) や掛札 (1992) も同様に、“ゲイ・ブーム” による同性愛者を称揚するイメージは、異性愛者が安全である限りにおいて同性愛者を認める、という立場から発されたものであることを指摘している。“ゲイ・ブーム” を「くだらない」ものとして否定する声は、ブームの当初から、ブームの前段階からでさえも、繰り返しなされてきたのである (石田 , 2007a, p. 52)。

はたして、私の身近にいたヘテロセクシュアル女性たちのゲイ男性に対する興味関心は、“ゲイ・ブーム” で見られた「扱いにくい差別の一形態」としての「理想的ゲイ男性」像と等しい性質をもつものなのだろうか。しかし、本研究では、ヘテロセクシュアル女性が持つゲイ男性への興味関心は同性愛嫌悪の一種である、という分析には与しないものとしたい。本論文の目的は、ヘテロセクシュアル女性の持つゲイ男性像を糾弾することではない。本研究では、ヘテロセクシュアル女性たちが、性差別構造のもとでどのように生き、ゲイ男性との親交を望むよ

うになったのか。また、実際にゲイ男性たちとはどのようなコミュニケーションをとっているのか。その一例を示すことを、第一の目的としたいためである。

2 研究手法

本研究では、「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」14 名に対して、インタビュー調査を行なった (see Table 1)。対象者の年齢は 20 代～ 40 代（20 代 9 名・30 代 4 名・40 代 1 名）で、筆者知人のゲイ男性に紹介してもらう・対象者の友人を紹介してもらう、という形式で集めた。ここで「親交」とは、携帯電話の番号やメールアドレスを交換していたり、インターネット上でつながりを持っていたりするため、頻繁に連絡を取り合うことができ、また、よく実際に会うこと」と定義した。また、対象者がゲイ男性とのコミュニケーションをどの程度頻繁にとっているか、また、どの程度慣れているのかを感覚的に計り、インタビュー本題につなげていく尺度のひとつとして、「顔見知り」程度のゲイ男性が何人いるかも尋ねた。「顔見知り」とは、「連絡先を交換はしているが、そこまで頻繁には連絡を取り合うことがない仲の人」ないし「連絡先の交換などはしていないが、特定の場所（学校や職場、新宿 2 丁目 のゲイバーなど）に行けばよく会える相手で、互いに挨拶をしたり、会話を交わしたりはする仲の人」または「最近は連絡を取っていないが、かつては仲が良かった人」のことと定義した。

Table 1 にも見られるように、今回のインタビュー対象者のうち 6 名（A さん～ F さん）は、知人に頼んで紹介してもらったり、ゲイバーやゲイ男性中心のクラブイベントに出向くなど、積極的に行動した結果、初めてゲイ男性と知り合う機会を得た人たちである。例えば F さんは「ゲイの友だちって、まだいないよなって思って、だったら欲しいなー、って、前々から思ってた」ため、知人に頼んでゲイ男性を紹介してもらい、親しくなったという。また、A さんは、「東京に住んでいて、なかなかゲイの人に、出会う機会、っていうか、そういうのがなくって、けど、ゲイナイトに行ったら、ほんとに別世界で、見たことのないような人たちがいっぱいいるよ、っていう話を（ゲイナイトに行ったことのあるヘテロセクシュアル女性の友人が）してて、で、私も興味があって、行きたい、って言ったんです」と語っている。このような、身近にはいないゲイ男性への興味関心が、これらの対象者らが行動を起こすきっかけとなっている。

他の 8 名（G さん～ N さん）は、高校や大学などで、友人からカミングアウトを受けたり、ゲイであることを公言している人と出会うなど、偶然ゲイ男性と知り合う機会を得た人たちである。特に戸惑うこともなくゲイ男性の友人を増やしていった K さんのような対象者もいる一方で、「私ほんとに普通のうちで育ったので、そういうことに関してそういうものの存在とか、なにも知らなくて、はじめ結構こう脳みそがこう、なんかこう調整に時間がかかりましたね」と語る I さんのように、ゲイ男性の存在を受け入れるまでに時間がかかった対象者もみられた。

Table 1
インタビュー対象者一覧

	年齢	職業	親交のあるゲイ男性の人数	顔見知り程度のゲイ男性の人数	初めてゲイと知り合った経緯
A	20 代	会社員	0	1	自発的（ゲイクラブに連れて行ってもらった）
B	30 代	デザイナー	10〜	10〜	自発的（知人からの紹介）
C	30 代	保育士	10〜	10〜	自発的（ゲイバーに連れて行ってもらった）
D	20 代	主婦	20	20-30	自発的（ゲイバーに連れて行ってもらった）
E	40 代	デザイナー	5	20-30	自発的（ゲイクラブに連れて行ってもらった）
F	20 代	イラストレーター	3	5	自発的（知人からの紹介）
G	20 代	会社員	5〜	20	偶然（学校で友人になった）
H	20 代	学生	1	1	偶然（友人からのカムアウト）
I	30 代	翻訳業	10 前後	10〜	偶然（友人からのカムアウト）
J	20 代	会社員	2, 3	0	偶然（友人からのカムアウト）
K	20 代	会社員	20	多数	偶然（学校で友人になった）
L	20 代	会社員	3	多数	偶然（学校で友人になった）
M	30 代	デザイナー	2	0	偶然（共通の趣味で知り合った）
N	20 代	学生	2	2	偶然（友人からのカムアウト）

インタビュー調査は、「ゲイ男性とどこで知り合い、どのような交流をしているか」「ヘテロセクシュアル女性／男性とは、どのような関係を築いているか」、また、「レズビアン女性の友人はいるか」などの質問を用意し、約 1 時間行なった。インタビューは全て録音し、音声データを書き起こしたものを分析対象とした。本論考では、対象者がゲイ男性との間でどのような関係を築いているのかにフォーカスを当てるべく、「ゲイ男性との関係の居心地の良さ」と「ゲイ男性との関係の居心地の悪さ」に論点を絞り、調査の成果を紹介したい。

3 調査結果

3.1 ゲイ男性との関係の居心地の良さ

対象者が感じるゲイ男性との関係の居心地の良さのひとつは、ヘテロセクシュアル男性と違い、お互いに性的欲望や恋愛感情を向け合うことが無い、という点に見られる。特に、ゲイ

男性が多く集まるクラブにおける安心感は、A さんをはじめ、複数の対象者が語っている。また、クラブで開催されているゲイナイトに関する語りも、多く聞くことができた。なおゲイナイトとは、新宿 2 丁目のクラブに限らず、渋谷や新木場など、様々なクラブで多種多様に開催されている、ゲイ男性を主な対象としたダンスイベントである。受付で女性の入場が断られる場合もあるが、女性も入場できる、いわゆる「MIX」のイベントも多く開催されている。

A さんは、青山や渋谷にあるクラブで、ヘテロセクシュアル男性から「女っていうかもう、ほんとメス、みたいにしか見られないのは、いやで」ある、と考えている。実際にヘテロセクシュアル男性から「いきなり、（腕を）ガッとか掴まれたり」するなど、危険な目に遭ったこともあるため、性的欲望を向けられることへの危機感を覚えている。そのため、A さんにとってゲイナイトは楽しいだけでなく、「安心感、っていうのも、あった」イベントだったという。N さんもまた、六本木のクラブと、新宿二丁目のゲイ中心のクラブを比較し、次のように語っている。

> N「ダンス踊ってても、そのやっぱり、こう、六本木のほうだと、もう、やっぱもう、異性愛、の男性、しかいないじゃないですか。だから踊ってても、なんか腰触ってきたりとか、ほんとにいやらしい、のがつきまとってくるんです、けど、でも、あのやっぱ新宿とかだと、彼、らは、その女性？　に興味ないっていうのはわかってるから、こう、不快感がないっていうか。そういうので安心する面っていうか、そういうのがありますね」

そしてこのような安心感は、クラブのように不特定多数の人が集まる場面だけではなく、親しいゲイ男性との間においても見てとることができる。I さんは、親友のゲイ男性とのコミュニケーションを、「なんかこう脳みそ全部、こう、投げつけても大丈夫、みたいな（笑）」ものであるとして、笑いを交えながら、次のように語ってくれた。

> I「たまたま私がはじめに友だちになったゲイの人が、とってもこう、感受性、心の豊かな人なのね？　だから、こう、なぁんていうのかな、こう、んー、悩みとかも楽しいときも、苦しいときも受け止めてくれるし、たぶんこっちも彼にそうしてると思うのね、なんかそういう関係ってほんとに（ヘテロセクシュアルの）男と女だと、すぐ恋愛とかになっちゃうじゃない？　だから逆に続かない？　でも、こう彼とかの場合は、絶対そこがないから、うん、だから逆に、家族じゃないけども、こう守り合う、みたいな、ちょっと守り合う、的なところも、どっかあって」

Iさんと同様にDさんは、「ノンケ（ヘテロセクシュアル）の子は、やっぱり、普通に会話してても、若いと、恋愛面に持っていこうとする（笑）、人が多いし、でもゲイの人は、まずないから、で、どう友だちになれるかなぁとか、そのぐらいしか頭にないから」、余計な気を遣わずに会話を楽しむことができる、と感じている。また、Dさんは、ヘテロセクシュアル女性のなかでも「男の前と女の前で態度が違う」ような「ブリブリしてる子が苦手」であり、「それ（男性への媚び）を利用してる女を見るのが辛かった」と語っている。しかし、ゲイバーではそのようなヘテロセクシュアル女性を見ることもなく、また、ゲイ男性と恋愛関係になることもなく、友達として仲良くなれることが嬉しかったのだという。これらの発言からは、ヘテロセクシュアル女性からもゲイ男性からも恋愛感情が沸かず、恋人関係になり得ない関係の居心地のよさを見てとることができる。

なお補足として、レズビアン女性から性的な関心を向けられることに対して危惧感を覚えている対象者も見られた。なかでもDさんは具体的に、「2丁目中を追っかけられたことがあって、それ以来ちょっと女の子がこわくなったんですよ2丁目にいる女の子が。スカートめくりとかもされたんですよ。ちょっと酔っぱらってるときに押し倒されたりとか」と、レズビアン女性に追いかけられた経験から恐怖感を抱くようになった様子を語っている。しかし、「あんまり心を開けない子がいて、だけどレズなんだみたいな、その子と仲良くなって、話ししてるうちに、まあ、あんまりそんなにビックリしなくなったけど」と語るように、次第にレズビアン女性とも友人関係を築けるようになっていったそうである。

また、性的な関心を向けられない場面であっても、普段ヘテロセクシュアル男性に対して抱いているストレスを感じないことが居心地が良い、とする語りも聞くことができた。Eさんは、「いばってる人大っ嫌い。なんか男だっていうだけで、あの、いばってる人いるじゃない。なーにもできないのに、っていうのが大っ嫌い」と、ヘテロセクシュアル男性から感じるストレスを端的に表現している。Eさんのゲイ男性の友人にはそのようなストレスを感じさせる人はおらず、そのことが居心地の良い関係を作りだしているという。

Hさんは普段、「男友達と話すときは、私はとっても、自分の言動に気を遣うっていうか、できるだけ、理論的に話そうと思うの。そうしないと（男友達は私の言っている意味が）分かんないから」と語るように、ヘテロセクシュアル男性との会話はいつも自分が一方的に気を遣うことになるため、疲れるものである、と考えている。一方で、ヘテロセクシュアル女性同士の場合は「相手の気持ちを考えながら、受け止めながら話すっていう感じの人が多くて、で話してると楽なんだよね」と感じており、また、ゲイ男性の友人との会話も同様に、「人の気持ちにすごい考えてしゃべってるなっていうか、なんか楽、なんだよね。そういう感じっていうのはやっぱ女の子のほうに多くって、そういう男友達は、いないね」と捉えている。このように、

気は遣いながらも、ヘテロセクシュアル女性の側ばかりが疲れることにならない関係が、H さんにとっては居心地がよいものとして捉えられている。

H さんとは逆に、ヘテロセクシュアル女性同士の関係が苦手ために、ゲイ男性との関係を好ましく感じている、という語りも見られた。F さんは、自分は「基本的には個人プレイ」の人間であるため、学生時代は「女子って、全員一緒、みたいな感じだから、やっぱりきつかったよね」と、ヘテロセクシュアル女性同士の関係を振り返っている。それに対比するかたちで、F さんはゲイバーでの人間関係を次のように語ってくれた。

> F「私がよく、連れてってもらって行ってたところって、ほんっとにすごいのねパワフルで。だからー、みんなもなんかそういう感じのこと（註・仕事上のストレス）でギャーっって言うから（略）みんなが言いたいことを言ってるから、言わなきゃ損損、ってのもあるしー、しかも聞いてるようで自分のこと言いたいのが一番で聞いてなかったりだからー、それも気が楽じゃん、すごく親身に取られるよりもさー、『うわー！』って、みんなで言いたいだけ言って、スッキリするみたいな」

このように、F さんにとってゲイバーは気遣いが全く必要のない場であった。そして、そこでの人間関係は「向こう（註・そのバーにいたゲイ男性たち）がどう思ってるかは、定かじゃないけど」「あたし的には、すごくつきあいやすい」ものだったという。

3.2 ゲイ男性との関係の居心地の悪さ

前項で見たように、インタビュー対象者はゲイ男性との関係を楽しんでいるが、ときに居心地の悪さを味わうこともある。その居心地の悪さは、インタビュー対象者が女性であること、ヘテロセクシュアルであること、あるいはヘテロセクシュアルの女性であることに由来するものである。

H さんは女性であるが故にゲイ男性から無視された経験を持っている。H さんは初めて参加したゲイナイトを振り返り、「怖かったね、あの一番は、こんなに男の人が多い環境に、いたことが、なかったので、怖いよーってなっちゃったし、受け入れられるオーラもなかったから、『ふわぁー』みたいな（笑）」と、そのときの感覚を語っている。ゲイナイトの楽しい思い出を事前に友人から聞いていたり、ドラマやマンガに出てくるようなゲイ男性のキャラクターに憧れを抱いていたという。H さんは自分が持つゲイ男性への憧れや、ゲイ男性の友人を欲しがることについて、「興味本位になっちゃうのかな、失礼な話だね」と考えている。しかし、興味を強く抱いていた分、ゲイ男性から「女である自分が邪魔」と見られる感覚は、より一層に衝

撃的な体験であったのだろう。H さんはゲイナイトにおいて、「女である自分が邪魔っていうのは初めてだった」と、学生時代にも、職場や社会でも味わったことのない、初めて経験するような排除感を味わったそうである。

また、ヘテロセクシュアルであることを理由に、ゲイ男性から排除された経験を持つのが、K さんだ。K さんは「東京レズビアン＆ゲイパレード 2006」に参加した経験を持つ。このパレードは、「セクシュアルマイノリティの可視化を目的とした人権パレード」であり、「セクシュアルマイノリティ（性的少数者）やその理解者が、各々の表現方法で」参加するものである（東京レズビアン＆ゲイパレード 2006 実行委員会 2006）。つまりパレードは、ゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティ当事者だけではなく、ヘテロセクシュアル女性が参加することも推奨されたイベントとして開催されている。K さんは、これらの主旨に賛同し、また、K さん自身や彼女の友人の多くが大学でジェンダー論・セクシュアリティ論を勉強していたこともあり、セクシュアルマイノリティ当事者の友人たちと一緒に、パレードに参加した。

そのパレード会場で K さんは、初めて出会ったゲイ男性に、「ノンケは帰りなさいよー！」と言い放たれ、ショックを受けたという。K さんはこの発言に対し、「パレードを、当事者の、お祭りみたいな、考え方でとらえてる人も、少なくないんだなーっていうのを、知」り、パレードの意義が参加者全員に必ずしも理解されていないことに動揺したという。また、K さん自身はパレードに参加する理由は「足りなくないし、別に、いいと思うんだけど」としながらも、ゲイ男性から「当事者じゃないことをそんな風に熱心に言って、あんた何様？」と問いつめられたように感じ、「ちょっとグサっときましたね」と、そのときの気持ちを語っている。

また、ゲイ男性と仲が良いヘテロセクシュアル女性、という事実自体が不快感の原因となることがある。つまり、いわゆる“オコゲ”として扱われる、ということである。“オコゲ”とは“オカマ（＝同性愛者）”に焦げ付くようにひっついているヘテロセクシュアル女性のことを示す言葉であり、蔑称として機能している (平野 , 1994, p. 19)。そこで想定されている女性像は、「女のセクハラ」をしてくるような、「新宿 2 丁目あたりでゲイにくっついて遊んでる女の子」である (伏見 , 2004, p. 565)。つまり、マスメディアで描かれているような「理想的ゲイ男性」のイメージを内面化し、それを一方的に全てのゲイ男性に対しておしつけてくるようなヘテロセクシュアル女性のことを、ゲイ男性の側から“オコゲ”と称したのである。

先にも紹介した K さんは、“オコゲ”として扱われた経験も持っている。K さんはゲイ男性 4 名に同伴して、海外旅行に行ったことがある。K さん自身は、「たまたまゲイの友だちと知り合う機会が多かった」だけであり、「ゲイの友だちも、ゲイだから友だちなわけじゃな」く、単に仲が良いために一緒に旅行をしたと考えている。しかし、その旅行の思い出を話した際に、「ノンケの男の人には、別になんにも言われないんだけど、ゲイの男の子に、『や、俺がノンケ

だったらそういう女はマジひく』とか言われたことはある」のだという。ここではゲイ男性と一緒に旅行に行ったことが、“オコゲ” 的な行動として捉えられている、と考えられる。

Kさんは、ヘテロセクシュアル男性のなかには、「（恋人の女性が）ゲイだとは言ってるけどやっぱり男の子とばっかり遊んでるのはいやだ、みたいな、ことを言う人もいる」ということを経験的に理解している。そのため、ゲイ男性が「俺がノンケだったらそういう女はマジひく」ということは、決して的外れなことではない。ただし、ここで確認しておきたいのは、Kさんがゲイ男性の友人と海外旅行に行ったことに関して『マジひく』と言っているのは、ゲイ男性である、ということである。この発言をしたゲイ男性は、「ノンケだったら」という言葉を挟み込むことによって、この差別的発言は自分の思っていることではない、として、発言に対する責任を回避しようとしたと考えられる。しかし、この前置きをしてはいるものの、実際に『マジひく』とKさんに告げたのは、ゲイ男性だ。Kさんはヘテロセクシュアル男性の友人からは、「別になんにも言われ」たことはなく、また、ヘテロセクシュアル女性の友人には、「『Kちゃんもオカマみたいだもんね』って言われたの（笑）『だからわかるわそれ』って言われて（笑）」というように、理解を示されたと考えている。しかし、『俺がノンケだったら』と前置くことで、自分以外の人間もそう考えていることを仄めかしつつも、Kさんの交友範囲のなかではゲイ男性だけが、『マジひく』とKさんに告げているのである。

4 まとめ

本研究では、「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」にフォーカスを当て、両者の間でどのような関係が築かれているかを明らかにすることを目的とした。確かに、“ゲイ・ブーム” 研究のように、マスメディアにおけるゲイ男性の表象の在り方や、その受容の在り方に対する批判は必要である。本研究で見てきた通り、“ゲイ・ブーム” で描かれた「理想的ゲイ男性」像に近しいイメージを抱いている対象者も見られた。また、ヘテロセクシュアル女性に無関心であったり、良い感情を抱いていないゲイ男性の存在もまた、改めて浮き彫りとなった。しかしそもそも、ヘテロセクシュアル女性がゲイ男性と知り合うきっかけや、そこでどのような関係が築かれているかには、様々なパターンが存在しており、興味本位がきっかけであってもそれぞれにゲイ男性との間で良好な関係を築いているのである。

今後は、ヘテロセクシュアル女性が実際にゲイ男性たちの間でどのような振る舞いをしているのか、また、ゲイ男性たちがヘテロセクシュアル女性をどのように扱っているのかを、ゲイバーやゲイナイトでのフィールド調査を基に分析していくことも、必要な課題だろう。そして同時に、ゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティと実際に関わりを持つ人々の声を、様々なかたちで拾い上げていく研究をしていくことが、今後必要であると考えられる。

【付記】

本稿は、2008 年 3 月国際基督教大学大学院教授会提出修士論文「『ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性』をめぐる性抑圧構造」の一部を再構成し、加筆訂正したものである。

Reference

伏見憲明 . (2004).「プライベート・ゲイ・ライフ」. In 伏見憲明 ,『ゲイという「経験」[増補版]』(pp. 559-659). 東京 : ポット出版 . (Reprinted from『プライベート・ゲイ・ライフ―ポスト恋愛論』, by 伏見憲明 , 1991, 東京 : 学陽書房)

Hall, Jonathan Mark. (1998).「偽りの友　―男性同性愛のあらわれと女性の観客、救済の罠」. In 風間孝 , キース・ヴィンセント & 河口和也 (Eds.),『実践するセクシュアリティ』(pp. 80-92). 東京 : 動くゲイとレズビアンの会（アカー）.

Hall, Jonathan Mark. (1999).「消費する男、処理される女、その間に賭けられた同性愛」.『現代思想　1999 年 1 月号　特集＝ジェンダー・スタディーズ』, 27(1), 231-237.

平野広朗 . (1994).『アンチ・ヘテロセクシズム』. 東京 : パンドラ .

石田仁 . (2006).「セクシュアリティのジェンダー化」. In 江原由美子 & 山崎敬一 (Eds.),『ジェンダーの社会理論』(pp. 153-165). 東京 : 有斐閣 .

石田仁 . (2007).「ゲイに共感する女性たち」.『ユリイカ 2007 年 6 月号臨時増刊号 総特集 腐女子マンガ大系』, 39(7), 47-55.

石田仁 . (2007).「「ほっといてください」という表明をめぐって　やおい／ BL の自律性と表象の横奪」.『ユリイカ 2007 年 12 月臨時増刊号　総特集 =BL スタディーズ』, 39(16), 114-123.

掛札悠子 . (1992).『「レズビアン」である、ということ』. 東京 : 河出書房新社 .

ヴィンセント , キース ., & 小谷真理 . (1996). 対談「徹底討議：クィア・セオリーはどこまで開けるか」[Dialogue].『ユリイカ』, 5, 34-56.

McLelland, Mark. (1999). Gay Men as Women’s Ideal Partners in Japanese Popular Culture: Are Gay Men Really a Girl’s Best Friends? *U.S.-Japan Women's Journal English Supplement*, No.17, 77-110.

McLelland, Mark. (2000). *Male Homosexuality in Modern Japan: Cultural Myths and Social Realities*. New York: Routledge Curzon.

東京レズビアン＆ゲイパレード 2006 実行委員会 . (n.d.).「TLGP2006：東京レズビアン＆ゲイパレード 2006 公式ホームページ」. Retrieved December 1, 2007, from http://www.tlgp.org/index_pc.html

吉澤夏子 . (2006).「ジェンダーとルーマン・システム論」. In 江原由美子 & 山崎敬一 (Eds.),『ジェンダーの社会理論』(pp. 91-103). 東京 : 有斐閣 .

Footnote

[1] 現在の人間の性の在り方は、「生物学的性別・性自認・性的指向」の組み合わせだけでは当てはまらないものが多く存在する一方で、「女性」または「男性」という二分律的な構造、すなわちジェンダーによる分断によって説明されることが多い (石田 , 2006)。本論文では、この二分律化されたジェンダーの構造が与える影響を考察し、また、この構造が命令され続け、再生産され続けていく状況を考察したいと考えた上で、ヘテロセクシュアル女性・ゲイ男性をこのように定義する。なお、レズビアン女性は「レズビアン女性：生物学的性別が女性、性自認が女性、性的指向が女性である（とされている／と感じている）人」、ヘテロセクシュアル男性は「生物学的性別が男性、性自認が男性、性的指向が女性である人」と定義したい。

Heterosexual Women who have Close Friendships with Gay Men

Yuji KATO

This study is based on interviews with heterosexual women who have close friendships with gay men. In the Japanese media's "Gay Boom" phenomenon that arose in the 1990s, gay men were represented as being the ideal partners for heterosexual women. While this has stimulated research and incurred various criticisms from gay and lesbian academics and activists, there has been no qualitative research of heterosexual women.

This study is based on interviews of 14 heterosexual women who have close friendships with gay men. The interviews were of one hour in length and consisted of questions such as "Where did you meet your gay friend and what kind of relationship do you have with them?," "What kind of relationships do you have with heterosexual women and men?," and "Do you have lesbian friends?" Various patterns were discovered in the way heterosexual women got to know gay men and in the kinds of relationships they formed. It also became apparent that even if the initial motivation for meeting had been out of mere curiosity, the relationships eventually developed into close friendships.

Keywords: heterosexual women, gay men, close friendships, "Gay Boom" phenomenon

2008 年度 CGS 活動報告

■春学期

4 月
CGS ニューズレター 009 号発行

4 月 16 日～　春学期読書会 開催
1、『カミングアウト・レターズ』
編著：砂川秀樹　RYOJI（編）
日時：4 月 18 日～（毎週金曜日）
2、『映画でわかるカルチュラル・スタディーズ』
著者：カーラ・フレチェロウ
日時：4 月 18 日～（毎週金曜日）
3、『生のあやうさ - 哀悼と暴力の政治学』
著者：ジュディス・バトラー
日時：4 月 16 日～（毎週水曜日）

4 月 23 日 (水)
講演会「日米間　ジェンダー、文化・スポーツビジネス論」開催
講師：石島コータ（スポーツ通訳者）
場所：国際基督教大学　本館 213 号室

5 月 19 日 (月)
オープンセンター開催

8 月 20 日（水）～ 24 日（日）
「日英 LGBT ユース エクスチェンジプロジェクト　交流プログラム」
(日本側コーディネーターとして参加)
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター　他
協働：Rainbow College
後援：倶進会、ブリティッシュ・カウンシル、第 17 回東京国際レズビアン＆ゲイ映画祭

■秋学期

9 月
CGS ニューズレター 010 号発行

9 月 16 日～　秋学期読書会 開催
1、『ケア　その思想と実践』シリーズ
編：上野千鶴子　大熊由紀子　大沢真理　神野直彦　副田義也
日時：9 月 16 日～（毎週火曜日）
2、フェミニズム理論アラカルト－女性性について
著者：リュース・イリガライ、ジュリア・クリステヴァ、ジュディス・バトラー、ガヤトリ・スピヴァク他
日時：9 月 17 日～（毎週水曜日）

3、『構築主義とは何か』
編：上野千鶴子
日時：9 月 19 日～（毎週金曜日）

10 月 14 日（火）
オープンセンター開催

10 月 18 日（土）・24 日（金）・11 月 1 日（土）・7 日（金）・15 日（土）
ワークショップ「自己尊重・コミュニケーショントレーニング」開催
講師：高山直子（サポートハウスじょむ　スタッフ・カウンセラー）
場所：国際基督教大学教育研究棟 347 号室
後援：倶進会、三鷹市

■冬学期

12 月 11 日～　冬学期読書会 開催
『Other Asias』
著者：ガヤトリ・C・スピヴァク
『In a Queer Time and Space』
著者：ジュディス・ハルバースタム
日時：12 月 11 日～（毎週木曜日）

12 月 22 日 (月)
CGS　クリスマスパーティー 開催
場所：国際基督教大学　シーベリーチャペル

3 月
CGS ジャーナル『Gender & Sexuality 04』発刊

注
CGS 公式ウェブサイト「CGS Online」では随時、情報を更新しています。
CGS ニューズレター、CGS ジャーナル『Gender & Sexuality』は「CGS Online」でダウンロードできます。

AY 2008 Activity Report, ICU Center for Gender Studies (CGS)

■ Spring Term

April
Publication of the CGS Newsletter, No.009

From the week starting April 16
CGS Spring Term Reading Groups
1. *Kamingu auto retaazu* (Coming Out Letters)
Eds.: Hideki SUNAGAWA and RYOJI
Dates: Fridays, from April 18

2. *Eiga de wakaru karuchuraru sutadiizu* (*Popular Culture: An Introduction* in Japanese translation)
Author: Carla Freccero
Dates: Fridays, from April 18

3. *Sei no ayausa – aitoh to bouryoku no seijigaku* (*Precarious Life: The Power of Mourning and Violence* in Japanese translation)
Author: Judith Butler
Dates: Wednesdays, from April 16

Wednesday, April 23
Lecture: "Nichibei-kan jendaa, bunka, supootsu bijinesu ron" (A Cross-cultural Study of Gender, Culture and Sports Business in Japan and the US)
Lecturer: Kohta ISHIJIMA (Sports Interpreter)
Venue: Room 213, Honkan, International Christian University

Monday, May 19
Open Center at CGS

Wednesday, August 20 – Sunday, August 24
Exchange Program Event, UK-Japan Youth Exchange Project
Venue: National Olympics Memorial Youth Center, etc.
Co-hosts: CGS and Rainbow College
Sponsors: Gushinkai, British Council, The 17th Tokyo International Lesbian & Gay Film Festival

■ Autumn Term

September
Publication of the CGS Newsletter, No. 010

From the week starting September 16
CGS Autumn Term Reading Groups

1. *Keaa – Sono Shiso to Jissen* (Care – Theory and Practice Series)
Eds.: Chizuko UENO, Yukiko OHKUMA, Mari OSAWA, Naohiko JINNO, Yoshiya FUKUDA
Dates: Tuesdays, from September 16

2. Feminist Theory "A la carte" – A Selection of Works on Femininity
Authors: Luce IRIGARAY, Julia KRISTEVA, Judith BUTLER, Gayatri SPIVAK, et al.
Dates: Wednesdays, from September 17

3. *Kohchiku-shugi towa nani ka* (What is Social Constructionism?)
Ed.: Chizuko UENO
Dates: Fridays, from September 19

Tuesday, October 14
Open Center at CGS

Saturday, October 18; Friday, October 24; Saturday, November 1; Friday, November 7; and Saturday, November 15
Workshops: "Jikosonchou komyunikeeshon toreeningu" (Developing Self Esteem and Communication Skills)
Lecturer: Naoko TAKAYAMA (Counselor and Staff Member, Support House Jomu)
Venue: Room 347, Honkan, International Christian University
Sponsors: Gushinkai and Mitaka City

■ Winter Term

From the week starting December 11
CGS Winter Term Reading Group
Other Asias and In a Queer Time and Space
Authors: Gayatri SPIVAK (*Other Asias*) and Judith HALBERSTAM (*In a Queer Time and Space*)
Dates: Thursdays, from December 11

Monday, December 22
CGS Christmas Party
Venue: Seabury Chapel, International Christian University

March
Publication of the CGS Journal, Gender & Sexuality Vol.04

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the CGS official website. The CGS newsletters and journals may also be downloaded from the site

日英 LGBT ユースエクスチェンジプロジェクト
2008 年 8 月 19 日〜 31 日

コーディネーター：
国際基督教大学ジェンダー研究センター、
ブリストル市役所 Youth and Play Services

協働：Rainbow College
後援：財団法人倶進会、ブリティッシュ・カウンシル、第 17 回東京国際レズビアン＆ゲイ映画祭、大学生ナイト
協力：Freedom Youth、ピアフレンズ、レインボーカラーアクセサリー＆雑貨 shop L&G Timpani、尾辻かな子事務所、NHK 福祉ポータル「ハートネット」、“共生社会をつくる” セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク、パフスペース、ラブピースクラブ、デルタ G、LOUD、Create Media Online、ピープルズ・プラン研究所、有限会社スタジオラック
賛同：有限会社アップリンク、NPO 法人アカー（OCCUR）、G-FRONT 関西、ゲイジャパンニュース、NPO 法人 GIDMedia、性と人権ネットワーク ESTO
（順不同）

日英 LGBT ユースエクスチェンジプロジェクトとは、日英の若者がセクシャルマイノリティーに対する差別を克服するため、お互いの経験を共有し、LGBT の若者に対する支援を強化するよう社会に働きかける一助となることを目指して企画されたプロジェクトである。本プロジェクトは、国際基督教大学ジェンダー研究センターが日本側のコーディネーター、ブリストル市役所 Youth and Play Services (YPS) がイギリス側のコーディネーターとなり、共同関係を結び実現した。

＜なぜイギリスと日本なのか＞
イギリスでは、過去 20 年間、LGBT を取り巻く環境が大きく変わってきた。社会での認識と、法律の両面が変化してきたことにより、これまで LGBT に対して制限されてきた機会が広がってきている（一例に雇用がある）。人権や平等に対する意識の低い社会で、未だに差別と抑圧に抵抗しながら生活をする日本の若者の経験とは大きく異なる環境といえる。一方そんな日本でも、レズビアンを公言する議員があらわれ、さまざまな LGBT の若者たちのグループが、イギリスのような法的・社会制度的支援のない環境にも拘らず、活発に活動を展開し続けている。本プロジェクトの第一の目的は、このように異なる文化的背景を持つ若者たちが一堂に会し、交流し、共に考え、計画し、情報交換し、語り合い、そして自分と社会の将来に関して自由に思い描き、それを共有することが出来る機会を提供することであった。
様々な社会の変化があったとはいえ、LGBT の若者はその性的指向を理由として、未だに多くの社会的な機会から遠ざけられているのが現実である。社会に根強くはびこる同性愛嫌悪などの経験によって、自信を失い、自尊心を低下させている者も多い。このような若者の中には、社会に対して閉塞感を感じていたり、薬物濫用や自傷行為、摂食障害などの自己破壊的な行為に至ったりするケースも少なくないのである。特に日本の LGBT の若者は孤立し、社会の中で多くの難関に突き当たっており、将来や自分自身について悲観し、マイナス思考に陥っている。この問題にどうアプローチしていくかを考える際に、イギリスの例は大いに役立ちうるだろう。イギリスの LGBT の若者も同様に、学校での同性愛嫌悪によるいじめなどを経験しているというが、しかし同時にそこには LGBT の支援のネッ

トワーク、若者自身による LGBT グループ、ロールモデルとなる大人の LGBT の存在がある。行政主導で変革がもたらされたイギリスの若者たちには、公的な支援の全くない中でも自主的に活発な活動を展開している日本の若者たちの創造性は大いに刺激となるだろう。LGBT を取り巻く環境の違う日本とイギリスの若者が交流することは、お互いの良いところを学びあい、新しい活動に対する自信や困難に立ち向かう意思を強めるための助けとなりうるのである。

＜プロジェクト日程＞
2008 年夏にイギリス側の若者を迎えるにあたり、2007 年 11 月にイギリスから関係者が来日し、本プロジェクトに関する会議が持たれた。その後、具体的に準備が開始され、2008 年 1 月には CGS のスタッフがブリストル市を訪問し、YPS 部の視察を行った。2008 年 5 月には、再度イギリス側が来日し、打ち合わせや下見と共に、「IDAHO ＝イギリス × 日本？ ～ LGBT ユースの現状とこれから～」（主催 Rainbow College）というトークイベントを行うなど、準備と告知が進められていった。また、直前には、レインボーグッズの販売を行い、来日のための資金集めや、プレイベント（7 月 21 日「みんなのレインボーカフェ」YEP 実行委員会主催）を開催し参加者募集など周知に努めた。これらの取り組みと倶進会の助成、個人・団体からの寄付、協力によって 2008 年 8 月 19 日から 31 日までイギリスから 7 人の LGBT の若者が来日することができた。具体的な来日の日程と行われたワークショップは次の通りである。

日程	内容	備考（場所等）
18日	成田到着	
19日	ウェルカム・パーティー	ブリティッシュ・カウンシル（非公開）
20日	ワークショップ1 テーマ：「自分自身について」	東京海員会館 （非公開）
	ワークショップ2 テーマ：「カミングアウト」	東京海員会館 （非公開）
21日	ワークショップ3 テーマ：「学校生活」	東京海員会館 （非公開）
22日	豊島区訪問	
23日	ワークショップ4 テーマ：「ホモフォビア、トランスフォビア （社会の中のLGBT）」	東京海員会館 （非公開）
	ワークショップ5 テーマ：「セクシュアルヘルス、HIV」	東京海員会館 （非公開）
24日	公開ワークショップ	国立青少年オリンピック・センター （公開）
25-28日	関西方面を訪問	
29日	和太鼓体験	国際基督教大学（公開）
30日	さよならパーティー	東京海員会館
31日	イギリスへ帰国	

日本側のメンバーは、国際基督教大学ジェンダー研究センターを窓口として、日英LGBTユースエクスチェンジ実行委員会を設置し、参加者を募った。ワークショップの参加者は各回およそ 20 名、のべ 100 人となり、公開イベントの参加者も 100 名以上にのぼった。
非公開のワークショップでは、参加者たちは 2 人のプレゼンターのリードのもとで数人のグループに分かれて、まずはテーマに沿ったディスカッションを持つことになった。そして最後には、再び全員で集まって、各グループが話し合ったことを皆に報告するのである。LGBT に関するイベントに始めて参加するという若者もいたが、非公開でアットホームな雰囲気の中、他の参加者が自らの体験をもとに自由に発言するのを見て、次第に緊張を和らげ積極的に発言するようになっていった。ディスカッションの外でも彼らの会話は続き、連絡先を教えあい、その後も個人的な交流が続いている。このワークショップは 24 日の公開ワークショップにも結実し、彼らの報告は、両国のアクティヴィズムの可能性が将来に向けて大きく広がっていることを会場に実感させるものとなった。
ワークショップ終了後、イギリス側は京都・大阪を訪問し、関西で活動している LGBT 団体と交流するなど、有意義な時間を過ごし、無事に 8 月 31 日までの滞在を終えることができた。また、本プログラムには NHK 教育テレビの取材班が入り、10 月 2 日に放送された NHK 教育「ハートをつなごう」の「LGBT 第 1 弾」2 夜目において、その模様が全国に紹

介された。
プロジェクト終了後、実行委員会が主催で、プロジェクトに関する写真展を行うなど、その活動が続いている。今後の展望としては、日本側からイギリスのみならず、ヨーロッパの国々を訪問し、様々な国の LGBT がおかれている環境から学び、若者同士の交流を行いたいと計画している。また将来的には日本側のパートナーとしてアジアの LGBT の若者を迎え、「日本と欧米の交流」という構図を越えて、より広い規模での網の目状の相互交流を目指したいと考えている。

本ワークショップは財団法人倶進会による助成、個人・企業の寄付、後援、協力によって実施することが可能となった。末筆ながら改めて感謝を申し上げたい。

ジェンダー研究センター事務局長　井上有子

Japan-UK LGBT Youth Exchange Project
August 19-31, 2008

Coordinators: ICU Center for Gender Studies,
Bristol City Council's Youth and Play Services

Collaboration: Rainbow College
Sponsorship: Gushinkai, British Council, 17th Tokyo International Lesbian and Gay Film Festival, Daigakusei Night
Cooperation: Freedom Youth, Pier Friends, Rainbow Color Accessory and Gift Shop L&G Timpani, Kanako Otsuji Office, NHK Welfare Portal "Heartnet," Kyousei shakai wo tsukuru National Support Network, PA/F Space, LOVE PIECE CLUB, Delta G, LOUD, Create Media Online, People's Plan Study Group, Sutajio rakku
Supporting Organizations: UPLINK, NPO OCCUR, G-FRONT KANSAI, Gay Japan News, NPO GIDMedia, Sexualities and Human Rights Network ESTO

(Listed in random order)

The Japan-UK LGBT Youth Exchange Project (YEP) aims to help Japanese and UK LGBT youths overcome discrimination against sexual minorities, by helping them to share their experiences and by working to strengthen the support for them in society. This project is an initiative under the joint auspices of the ICU Center for Gender Studies in Japan and the Bristol City Council's Youth and Play Services (YPS) in the UK.

Why the UK and Japan?
The past twenty years in the UK has seen a significant transformation in the situation for LGBTs. Due to changes in both social awareness and the law, opportunities that were once closed to LGBTs have begun to widen. The employment sector is just one such example. This is quite a different situation to that of Japanese youths who continually face oppression and discrimination in a society where there is much less awareness of human rights and equality issues. Yet, even in Japan, there are politicians who have recently come out publicly and various LGBT youth groups who are actively working towards effecting change. This is all in spite of the fact that there is no legal or social support in comparison to that of the UK. The primary objective of this project is to facilitate interaction among young people from such different cultural backgrounds so they can think and plan together, exchange information and share their experiences. The project aims to provide opportunities for them to develop and share their visions for the future direction of themselves as individuals and of society as a whole.
Despite the many social changes that have occurred over the years, LGBT youth are still denied many opportunities in society owing to their sexual orientation. After experiencing first-hand the deep-rooted abhorrence of homosexuality that pervades society, many of these young people lose their confidence and their self esteem. Many of them feel trapped and may resort to drug-taking, eating disorders and other kinds of self-injurious behavior. Japanese LGBT youth are particularly alienated and face numerous obstacles in society. They tend to become increasingly negative and pessimistic of their future and of themselves. In considering how to approach this

problem, the situation in the UK will no doubt prove to be extremely useful. LGBT youth in the UK also experience bullying at schools but at the same time there are LGBT support networks, LGBT groups formed by the youth themselves and LGBT adults who function as role models. LGBT youths living in a country like the UK where reforms have been effected through government initiatives will indeed be stimulated by the creativity and imagination of the activities led by Japanese youth who have no public support at all. Japanese and UK youths who come from such differing environments can learn much from each other and their interaction will help them to strengthen their resolve to face difficulties, develop new initiatives and engage in further activities.

Project Schedule

In preparation for the visit by UK youth in the summer of 2008, a conference was held in Japan in November 2007 with guests from the UK. Preparations then began in earnest with CGS staff members visiting the UK in January 2008 for a study tour of YPS in Bristol city. Then in May, 2008, there was another visit from the UK team for meetings, preliminary tours in Japan and a talk session entitled "IDAHO = England and Japan? LGBT Youth Today and in the Future," hosted by Rainbow College. In the lead up to the visit, funds were raised through the sale of rainbow goods at various events and the YEP steering committee organized a PR function on July 21 called "Everyone's Rainbow Café." Through these efforts, the sponsorship of the Gushinkai, as well as donations and support from organizations and individuals, 7 LGBT youths from the UK were able to visit Japan from August 19 to 31, 2008. The following is an outline of their itinerary in Japan and the workshops that were held:

Date	Activity	Notes (Venue, etc)
18	Arrive Narita	
19	Welcome party	British Council (private)
20	Workshop 1 Theme: About Oneself	Tokyo Marine Building (private)
	Workshop 2 Theme: Coming Out	Tokyo Seaman's Building (private)
21	Workshop 3 Theme: School life	Tokyo Seaman's Building (private)
22	Toshima Ward visit	
23	Workshop 4 Theme: Homophobia, Transphobia (LGBTs in Society)	Tokyo Seaman's Building (private)
	Workshop 5 Theme: Sexual Health, HIV	Tokyo Seaman's Building (private)
24	Public Workshop	National Youth Memorial Olympics Center (public)
25-28	Visit Kansai area	
29	Wadaiko experience	ICU (public)
30	Farewell party	Tokyo Seaman's Building
31	Depart Narita	

Participants from Japan were organized by the Japan-UK Youth Exchange Project Steering Committee based at ICU Center for Gender Studies. There were 20 participants in each workshop, 100 altogether. There were over 100 participants for the public events.

The workshops, which were not open to the public, began with presentations by two of the participants which led to small group discussions based on the designated theme. At the end of each workshop representatives of each small group summarized their group's discussion to the others. Even though it was the first LGBT event for some participants, they gradually loosened up in the friendly atmosphere of these private sessions and grew confident as they followed the lead of others who spoke the opinions freely and openly shared their experiences. Their discussions continued long after the workshops and many of them exchanged contact details. The fruits of their interaction were evident in the workshop on the 24th that was open to the public, where their reports provided the audience with a vision of the broadening potential for future activism in the two countries.

After the workshop, the UK team visited Kyoto and Osaka to spend meaningful time with LGBT groups in the Kansai area, before departing for the UK on the 31st.
The event itself was featured on the second night of an NHK documentary series on LGBTs called "Heartnet" that aired from October 2nd.

After the project, the steering committee has continued its efforts with a photo exhibition and other activities. One of its future objectives is to expand the project to include other European countries in order to learn from their situations and to facilitate further exchange among LGBT youth. Eventually the project aims to include other Asian nations and create a more extensive network for Asian and European LGBT youth.

This project could not have been realized without the sponsorship of Gushinkai, or the donations and cooperation we received from individuals and businesses. We wish to express our sincere gratitude to you all for your support.

Yuko INOUE
Secretary-General, Center for Gender Studies, ICU

少数派の孤独は国境を越えて
――日英ＬＧＢＴユースエクスチェンジプロジェクト――

ミヤマアキラ

国際基督教大学ジェンダー研究センターと英国ブリストル市役所ユースアンドプレイサービスがコーディネーターとして提携し、昨秋から約 10 カ月の準備を経て実現された、「日英 LGBT ユースエクスチェンジプロジェクト（通称 YEP）」。8 月 19 日から 30 日にかけて、英国ブリストル市の LGBT の若者 7 人とスタッフ 3 人が来日し、日本の LGBT の若者や支援者たちと交流を行った。

「保健体育の教科書は異性愛中心。異性以外を好きになる人はどこにも存在しない」「先生や同級生がホモを笑いのネタにしている。自分が笑われているようでつらい」「学校のトイレや更衣室は男女別。性別に違和感のある人はどちらにも入れない」「学校の制服は男女で分けるのではなく、自分が着たいほうを選べるようにしてほしい」
これらは日本の LGBT の若者たちから聞かれる、学校での過ごしにくさについての声だ。
学校は教育を受ける場ではあるが、それ以前に、異性愛中心の価値観を前提とした環境では LGBT の（LGBT かもしれない）若者にとっては、自分の指向や存在が常に否定され続けているように感じられ、勉学どころの話ではない。

英国では 1999 年に制定された性差別禁止（性別再指定）規則により、LGBT への差別を禁止すべく、各自治体が予算を組んで LGBT の若者たちのサポートを行っている。ユースアンドプレイサービスもそのひとつだ。だが、学校ではいまだに多くの LGBT の若者たちが同性愛嫌悪とトランス嫌悪によっていじめを受け続けている。

一方、日本では公的支援がまったくない中で、LGBT の若者が中心となって学校教育のあり方をより望ましい方向へ変えていこうと働きかける、RainbowCollege（レインボーカレッジ、略称 RC）という団体がある。RC では、教科書の異性愛中心性を分析したり、性的少数派の人権やライフスタイルについて、学問的観点から考察するなどの活動が行われている。

世界中で、同性愛／トランス嫌悪による差別や迫害は、残念なことにいまだなくならない。嘆かわしい共通点を強みに変え、LGBT の若者たちが国境を越えて出会い、いかなる性的指向や性自認であっても尊重される社会の実現を目指して問題解決を図ろうとプロジェクトは企画された。

8 月の交流プログラムでは、「カミングアウト」「学校生活」「同性愛嫌悪、トランス嫌悪」など 5 つのワークショップが連日開催され、24 日には公開イベントがあった。日本の LGBT は「いないこと」とされている。その消極的な差別が問題視されているが、英国では身体的暴力が頻繁に起こり、学校の先生ですら黙認している状況であるという報告などがなされた。

社会システムの偏向によって生じる孤独は、国や文化の違いを超えてなお共通する課題で互いを引き寄せあう。この矛盾こそが、孤独な者たちの最大の強みとなるだろう。交流会で交わされた意見や要望をもとに、YEP では今後、行政や教育機関に配布するためのパンフレット制作を行う予定。

※LGBT とは
レズビアン（L）、ゲイ（G）、バイセクシュアル（B）、トランスジェンダー／トランスセクシュアル（T）の頭文字を合わせたもので、性的少数派として想定される主なアイデンティティー・カテゴリー。トランスジェンダーとは男女の性別のどちらにもカテゴライズされたくないと感じる人のことであり、トランスセクシュアルは出生時に判定された解剖学的性別とは違う性別で生きたい／生きる人のこと。

【付記】
本報告は、『ふぇみん 2008 年 10 月 5 日号』に掲載されたものを、『ふぇみん』と執筆者の許可の下に再掲載しております。

Minority Loneliness Crosses National Borders The Japan-UK LGBT Youth Exchange Project

Akira MIYAMA

The UK-Japan Youth Exchange Project (YEP) is an initiative coordinated by the Center for Gender Studies (International Christian University) and Youth and Play Service (Bristol City Council, the U.K.). After ten months of preparation from last fall, seven LGBT youth and three staff members from Bristol city visited Japan from August 19 to 30, 2008, and met with young Japanese LGBTs and their friends.

"Health Education textbooks are heterosexist. They don't mention non-heterosexual individuals at all." "Teachers and classmates make fun of homos, and it hurts because it feels as if they are laughing at me." "All the restrooms and change rooms at school are segregated by gender. There are no options for students with gender dysphoria." "School uniforms should not be gender-specific. We should have the option of wearing either uniform."

These are typical comments by young LGBTs on the difficulties of school life in Japan. School is a place of education, of course, but it also provides an environment full of heterosexist values which continues to deny the sexual orientations and the very existence of LGBT and questioning students. How can these students be expected to focus on study under such circumstances?

In the U.K., following the 1999 legislation that banned gender inequality and granted sex reassignment rights to its citizens, local governments have supported LGBT youth and even have fiscal budgets specifically for that purpose. The aforementioned Youth and Play Service is one such government-funded support group in the U.K. But in school, bullying that is based on homophobia and transphobia still prevails.

In Japan, where there is no official, governmental support for LGBT individuals, students themselves have formed an inter-college student organization called Rainbow College (RC), which is aimed at effecting positive change in education. Their activities include analyses of heterosexism in textbooks and discussions on sexual minority rights and lifestyles from an academic perspective.

Unfortunately, homophobic and transphobic discrimination and oppression persist throughout the globe. The YEP was created in order to turn this brutal fact into a strength, by facilitating the interaction of LGBT youth across borders so they can join hands to work towards the creation of a society in which all kinds of sexual orientations and gender identities are respected.

As part of the August exchange program, five workshops were held, entitled "coming-out," "school life," "homophobia and transphobia," and so on. On the 24th, there were presentations and performances by the LGBT youth and their friends for a wider audience that included members of the public and the press. One presentation, for example, reported on the problems of LGBT invisibility in Japan on the one hand and,

on the other, the physical violence in UK schools that even teachers often pretend to ignore.

The feeling of loneliness and isolation, caused by social systems, can cross such boundaries as national borders and cultural barriers, and bring us all closer. I believe it is this very contradiction that gives us strength. The YEP administrators and staff are now reviewing opinions and requests gathered at the final event on the 24th and are planning to compile educational pamphlets for government and educational institutions.

*LGBT… LGBT is short for Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender/Transsexual and signifies the major categories of sexual minority individuals. Transgender refers to those who refuse to be categorized as either male or female. A transsexual individual, on the other hand, is a person who lives or wants to live as the opposite sex of the physiologically assigned sex upon birth.

「自己尊重・コミュニケーショントレーニング」
心のクセ 見なおしてみませんか
～自分が変われば、相手が変わる～

主催：国際基督教大学ジェンダー研究センター
後援：三鷹市
助成：財団法人倶進会

国際基督教大学ジェンダー研究センターは、倶進会の助成、三鷹市の後援によって行なわれた「自己尊重･コミュニケーショントレーニング」は､全 5 回､2 ヶ月にわたって行なわれ､11 月 15 日の第 5 回ワークショップをもって終了した。

各回のタイトル
第 1 回は「私の短所を長所に」
（自分の短所と長所を理解して、短所を長所に思考パターンの転換）
第 2 回は、「ストレスに対処する」
（ストレスを理解して対応する）
第 3 回は、「肯定的に話すスキルを身につけよう」
（コミュニケーションを円滑にする肯定的な話し方）
第 4 回は、「怒りを理解する」
（怒りとは何かを理解した上で、どう表現するか、どう怒りと向き合うか）
第 5 回は、「職場で使えるハラスメント対策・コミュニケーション術」
（職場での人間関係の中でいかに自分の意思を伝えるか、そしてハラスメントなどの障害をどう乗り越えていくのか）

各回の詳細については､CGS Online（http://olcs.icu.ac.jp/mt/cgs/）に､配布資料とスタッフによる報告が掲載されているので、そちらをご参照頂ければ幸いである。

簡単にではあるが、各回の内容を紹介すると、
第一回は、「私の短所を長所に」。ほぼ全員が初対面という状況で、ペアになってそれぞれ自分ではなく、パートナーのことを皆の前で紹介するという他己紹介から始まり、自己紹介よりもポジティブ、自分では言わないようなことが他己紹介では紹介されるという意見が出た。人は会ったばかりの相手の場合、なるべくよいところを見ようとする。適度な距離感をもって、相手に踏み込み過ぎないように気をつけること。講師の高山さん曰くこれが「尊重」という。こういった安心があって初めて信頼関係が成り立つ。ここから「自己」を「尊重」するということは、自分を信頼すること、大切にすることだとわかった。

第 2 回は「ストレスに対処する」。この回を経ればストレスがなくなるということではなく、どうしたらストレスを減らし自分を癒せるか、ということを学んだ。社会、自然、環境、他人は簡単には変わらない。変えられるのは自分だけ。自分の行動パターンを知り、ストレスを減らすように変えていく方法を身に付けることがポイント。
この回で印象的だったのは、ストレスはうつ症状を招くこともあるが、うつは風邪ぐらいだと思った方がよいということ。人は一生の間に何度も風邪を引く。絶対に引かないようするのは難しいが、手洗いやうがいで防ぎながらうまく付き合っている。うつもそれと同じだという。ストレスはゼロにはならない。でも自分を優しく癒してあげる良い口実ができたと思えれば、うまく付き合っていけるかもしれない。

第 3 回は、「肯定的に話すスキルを身につけよう」。自分も相手も我慢しないコミュニケーションを目指して、話し方のスキルを学び実践した。まず、友人、家族、恋人、上司、同僚など身近な人に対して、普段はなかなか言えないことを話し言葉で書き出してみた。これは後ほど、以下のようなテクニックを使って書き直すことになる。そのテクニックとは、「アイメッセージ」(「アイ」は eye と I。目線（eye）を合わせてコミュニケーションを取ること、「私」を主語にして文章を作ること)、個人と問題を分ける、アサーティブコミュニケーション等。他には、「言葉」で伝わるのは、メッセージ全体の 10%程度で、声のトーン、身振り、手振り、表情、口調など様々な要素が合わさって、一つのメッセージとなる。また、批判・批評・非難をする言葉、命令・強調する言葉等、何気なく発する言葉で相手に否定的な印象を及ぼし意思疎通の妨害になる言葉がある。すぐに使えそうな内容がたくさん盛り込まれていたワークショップで、「聴いたことの 30%、見たことの 50%、やったことの 80%しか身につかない」と高山さんは言う。毎日の生活で実践し、身に付けて「自分も相手も我慢しないコミュニケーションを」実践していきたいと感じた。

第 4 回は「怒りについて」。一番人気の回。怒りの構造を理解した上で、どう怒りを表現するのか、向き合うかについて学んだ。ディスカッションから、怒りという感情そのものがネガティブではない、嬉しさ、悲しみなどと同様、怒りもまた人間が感じるべき感情の一つ。ネガティブなのは、怒りに伴う行動なのだ。自分や他者を傷つけ、否定してしまう言動こそがネガティブなのだ。怒ってしまった自分を受け止めるのは難しい。また寛容であることに気をとられ怒らないでいると、自己否定に陥るばかりでなく、他者とも健全なコミュニケーションをとれなくなる危険性がある。怒りはあくまでも二次的な感情に過ぎず、一時的感情として挙げられた、自分がないがしろにされた切なさ、プライドを傷つけられた悔しさ、などを「怒りのサイン」と共に確認することで、それがどう怒りに変容するのかを学んだ。ある人にとっては怒りを増大させる行為が、別の人にとっては減少させる行為でもある。怒りの構造を理解することで、自分を知るだけでなく、相手をもより深く理解できるようになる。ワークショップの最後には先人の「怒り」の哲学が紹介された。中でも参加者の共感を得たのは、「あなたが頭にきている一分間の間にあなたは六十秒の幸せを失っている」というラルフ・ウォルド・エマーソンの言葉だった。参加者は怒りの構造についてじっくり考えることで、本企画のそもそもの目的である「自分も他人も否定せず、円滑なコミュニケーションを図るためのスキルを実践的に」身につけたと言える。

最終回である第 5 回 WS のテーマは「職場で使えるハラスメント対策・コミュニケーション術」。ハラスメントとは何かを学んだ後にロールプレイを行い、最後に対策について考えた。被害者グループと加害者グループに分かれたロールプレイを通して、ハラスメントを体験する中で、加害者は演技であるにも関わらず何としてでも誘い出そうとエスカレートした。追い詰めることを楽しむ気持ちも生まれたという。一方被害者は、ハラスメントに対抗できない無力感を覚えていた。周囲からの理解や協力を得にくい場合もあり、またハラスメントに対して「NO」と言うことが強要されるが、それは非常に難しい。利害関係のある職場ではなおさらだ。結果、被害者は、加害者 (上司など) も所属する組織 (会社など) も変えられず、唯一コントロールできる自分に矛先を向ける。服装や対価を理由に、自分に落ち度があったと自身を責めることで着地点を見つけようとする。しかし、加害がなければ被害はない。怒りへの対処法が通用しない、支配力や攻撃力の強い相手が増えている。それでも必ず取り組んで欲しいこととして、講師の高山さんは記録の重要性や相談先の候補など、自身の経験を踏まえて話した。ハラスメントに撤退を選ぶしかない時も、自分で納得してプロセスを踏めば次に繋げられることが話され、終了した。周囲に言われて行動するのではなく、自分を責めるのでもなく、自分の道筋を決める。傷付き動揺した時に何

かを決断することは容易ではないだろう。それでも、自分で決断し堂々と撤退することがその先の自分を救う。

参加者について
全 5 回の合計で、80 名。
1 回：44 名、2 回：58 名、3 回：53 名、4 回：61 名、5 回：40 名
という多数の応募を頂き、少人数制ワークショップという企画の趣旨の関係上、全員にご参加頂くことはできなかったが、各回とも、 7 割から 8 割の方が三鷹市民の方という構成で行なうことができた。

会場について
当初は、三鷹市の公共施設での開催を目指していたが、秋の文化行事シーズンと重なったこともあって、5 回連続で使える三鷹市施設がなかったために、学内の会議室での開催となった。会場が大学内会議室になったことで、市民の方の参加が難しくなるかと心配されたが、毎回、7 割から 8 割の方が三鷹市民の方という構成で行なうことができたのは、幸いであった。

会場は、当センターと同じ建物内の会議室に設定した。結果として、このことが良い結果を招いたのは、以下の 2 点についてである。
一つ目は、ワークショップの内容等により、会場にいること自体が辛くなったときの避難所として当センターを利用することができたことである。
本ワークショップの特徴として、自らの内面をパートナーもしくは、参加者全員とシェアすることになる。自らの内面に関わることだけに、自分が発表しなくても、人の発表を聞いたりすることで、過去のつらい出来事がフラッシュバックしたりする可能性がある。その場合、一度、会場から出て、どこかで心を落ち着ける、という逃げ道が必要になってくる。ワークショップでも、戦略としての「その場から去ること」について語られていたが、思いがけないショックを癒すのは、やはり静かで落ち着ける場所が必要であるという要請にセンターが応えられたのは幸いだった。
二つ目は、センターと会場が近かったため、参加者の皆様が講演の前後にセンターを訪れて下さり、日頃の活動やセンターの蔵書等を見て頂くことができ、おもいがけず当センターの活動を理解して頂くチャンスに恵まれたことである。

アンケートの結果によれば、この講演を知ったのは、三鷹市報、バスの車内広告、三鷹市施設においたチラシ等が多かったことを考えあわせれば、広報の段階できちんと市民の皆様の目に触れるように準備しておけば、今後同様の企画を催す際にも、大学内会議室を会場として設定しても大丈夫ではないかと考えている。

今後に向けて
参加者のアンケート結果において、今後の企画に希望することとして、今回学んだことの発展形を求める声とともに、自分以外の人にも知って欲しいということで、全く同一の企画を繰り返し行なって欲しいとの声もあった。最も応募者が少ない回でも、半分ほどの方が抽選にもれたことを考えれば、来年以降も同様の企画に対する需要は一定程度あると思われる。今回の経験と反省を生かして、より良い企画に洗練して、来年度以降も計画していきたい。

ジェンダー研究センター副手　丹羽尊子

Developing Self Esteem and Communication Skills "Let's Take a Look at Your Mental Habits" – A New You, A New World

Host: ICU Center for Gender Studies
Suppport: Mitaka City
Sponsorship: Gushinkai

ICU Center for Gender Studies hosted a series of workshops on "Developing Self-Esteem and Communication Skills," with the support of Mitaka city and a grant from Gushinkai. A total of five workshops were held over a period of two months, concluding with the final workshop on November 15, 2008.

Workshop Titles
(1) Turn Your Weaknesses Into Strengths
(Understanding your own weaknesses and strengths and learning to see your weaknesses in a different, more positive light)
(2) Dealing With Stress
(Understanding, accepting and dealing with psychological stress)
(3) Skills In Positive Speaking
(Learning positive speaking skills to facilitate smooth communication)
(4) Understanding Anger
(Understanding the mechanism of anger in order to effectively express and deal with it)
(5) Dealing With Harassment and Improving Communication Skills At Work
(Learning how to express your feelings to your colleagues and bosses at work and how to overcome difficulties like workplace harassment)

Handouts distributed at the workshops and detailed reports by CGS staff members may be viewed on the CGS website, CGS Online (http://olcs.icu.ac.jp/mt/cgs/).

The following is a brief summary of the topics covered in the workshops.

The theme of the first workshop was "Turn Your Weaknesses Into Strengths." The workshop started with an "other-introduction" session in which participants were briefly divided into pairs to get to know each other and then everyone introduced their partners to the other participants. Some people remarked that in an "other-introduction," more positive remarks were made about the partners and some things would have never been expressed if it had been a conventional self-introduction. Most of the participants had never met each other, and people usually try to see good things about those they meet for the first time. They create appropriate distances from them and try not to invade their personal space. This is what the lecturer, Ms. Takayama, calls "respect." It creates a sense of trust, she says. And participants learned that "self" "respect" is about trusting yourself, and taking care of yourself.

"Dealing With Stress" was the theme of the second workshop. What participants learned here is not how to avoid psychological stress, but how to reduce it and

thus heal yourself. Society, nature, environment, and other people will not change overnight. The only thing you can change drastically and immediately is who you are. The trick is to know your own behavioral patterns and figure out ways to reduce stress.

What was most impressive about this workshop was that Ms. Takayama told us that even in situations where stress leads to depression, you should think of it as something similar to a cold. We all catch colds numerous times in our lives. It is almost impossible to avoid a cold, but we all deal with it by washing our hands and gargling. She said that depression was no exception; you cannot avoid stress altogether, but if you use it as an opportunity (or even an excuse) to take time to be nice to yourself, help yourself heal and recover, depression becomes a more tolerable thing to live with.

Developing positive speaking skills was the main topic of the third workshop. The activities helped participants learn "pain-free communication skills," that is, how to communicate without the need for anyone to suffer. They wrote down things that they wanted to say but were never able to say to their friends, families, partners, bosses and colleagues. Then later on, the comments were rewritten using the techniques such as "ai-message." Ai has a double meaning; (1) ai as in "eye," meaning communication should be performed eye-to-eye, and (2) ai as in "I," meaning you should make statements with "I" as the subject. Other techniques included assertive communication and learning how to separate problems from individuals. Participants also learned that verbal expression can only communicate 10% of what you want to say, and thus, non-verbal forms of communication such as the tone of your voice, gestures, facial expression and intonation all contribute to the meaning of your message. It is also important to understand that things like criticisms, critiques, accusations, orders and undue emphasis on specific things, that you may voice without thinking can all be obstacles in communication by giving a negative impression of yourself to others. Though the workshop was full of useful tips that one could seemingly adopt with ease, Ms. Takayama said, "only 30% of what you heard today, only 50% of what you saw today, and only 80% of what you did today will stick." The participants were left feeling more encouraged to continue their endeavors to practice "pain-free communication for themselves and others" in their daily lives.

Anger was the theme of the fourth workshop. This workshop was the most popular of all. Participants learned the mechanism of anger and how to express and deal with anger. The following important points were made by Ms. Takayama and the participants in the discussions. Anger per se is not necessarily a negative feeling but one of the various natural, psychological emotions inherent in human beings just like happiness and sadness. What is negative about anger is the action that often accompanies it, that is, words and deeds that can deny and hurt yourself and other people. While it is difficult to come to terms with your own anger when you are angry, denying your anger in an effort to be tolerant may potentially lead to self denial as well as an inability to communicate healthily with others. It is therefore important to understand that anger is only a secondary feeling and that you should

look at primary feelings such as the heartache one feels from being excluded or the frustration experienced from slights to your pride and dignity. These feelings lead to the secondary feeling of anger. Understanding this is the key to achieving healthy communication. This is what Ms. Takayama means by the mechanism of anger, a process in which primary feelings can be transformed to anger. By understanding this mechanism, we can also understand that the same things that escalate anger in some people, may appease anger in others. This helps us understand both our own anger and other people′ s anger. At the end of the workshop, some philosophical accounts of anger were introduced. The most popular one was Ralph Waldo Emerson's words: during one minute in which you're angry, you are losing sixty seconds' worth of happiness. By seriously thinking about the mechanism of anger, the participants learned the practical skills necessary for smooth, pain-free communication, which is the overall theme that unifies this workshop series.

Lastly, the theme of the fifth workshop was how to deal with harassment and improve communication skills at work. It began with a lecture on the nature of harassment. This was followed by a role-playing activity, in which the participants were divided into two groups - victims and perpetrators - and played out a harassment scenario. The perpetrator group reported that an aggressive feeling developed and escalated in the course of the roleplay. They also said that they found the exercise quite entertaining. On the other hand, the victim group reported on the feeling of powerlessness and inadequacy in trying to resist the harassment that they were subjected to. It is sometimes difficult for the victim to receive compassion and understanding from a third-party, who in turn may blame the victim for not having said "No." This is particularly seen in the workplace as it is characterized by power relations. Thus the victim turns away from everything but themselves, the only thing they can control, since they feel powerless against the perpetrators (such as their bosses) and the institutions (such as their company). So the victim's only resort is self-blame, saying, the way they were dressed was wrong, the benefit they received in return was enough, et cetera. But no victim exists without a perpetrator.

In contemporary society, it is increasingly difficult to resist harassment. People in power are growing stronger against resistance. One thing Ms. Takayama emphasized was the importance of making your own choices. Specific tactics such as making records on what happened and obtaining resources such as support hotline numbers were introduced, as well as Ms. Takayama's own experience, but she concluded that, even when you choose to withdraw (from the workforce, from an institution, from the industry, and so on) to avoid further harassment, an appropriate process of making sense of what you are doing will lead you to a brighter future. You should not let other people make decisions for you. You should not blame yourself. When you are hurt and confused and upset, it might be difficult to make your own decisions. But, as Ms. Takayama said, the only way to save the future you is to be confident of your decision and, if you decide to withdraw, withdraw with a smile.

Participants
A total of eighty people participated in this workshop series.

First: 44 people; Second: 58 people; Third: 53 people; Fourth: 61 people. Fifth: 40 people.

We were very pleased with the number of participants. Due to the limited number of seats and the small-group policy, we were unfortunately not able to accommodate all those who had contacted us. 70 to 80 percent of the participants in each workshop were from Mitaka City.

Venue
Our initial plan was to hold the workshops at one of the city council buildings but due to the schedule conflicts with cultural events of the autumn season, one of the conference rooms at International Christian University was chosen for the event. We were initially concerned that the venue would discourage non-student participants, but were delighted to see 70 to 80 percent of the participants had come from Mitaka City.

The conference room was located in the same venue that houses the Center for Gender Studies. It turned out to be an ideal venue for the following two reasons.
Firstly, those who were upset during the workshop for whatever reason (e.g. lecture content, sharing stories of harassment, etc.) were able to retreat to the Center for Gender Studies for a little while until she or he felt comfortable again. One characteristic feature of the workshops was that participants shared their own personal stories with their partner or the floor, and sometimes flashbacks are triggered by an innocent comment made by others or even themselves. In that case, it is necessary that those who become upset are allowed to leave the room and calm down somewhere else. Strategic withdrawal was also one of the important points that Ms. Takayama made in the workshops. So we were happy to be able to provide participants with such a space to take a break.

Secondly, because the meeting room and Center for Gender Studies were just one floor away, many participants stopped by the center before and after the workshop and met with the staff and students. It was a very good opportunity for us to share with them the resources we had such as books, booklets and information, and give them a quick look at our daily activities.

According to the questionnaire, many of our participants had found out about the workshops from the Mitaka city newsletter, bus advertisements, and flyers distributed to Mitaka city institutions. Given that these methods helped to gain the participation of a number of Mitaka citizens in the workshops, we now realize that we can attract more participants for future events with thorough preparation, such as having flyers available to the wider public well ahead of time. Furthermore, a venue like a university conference room does not necessarily make an event inaccessible for participants from the general public.

Future Prospects
Unfortunately, we were unable to accommodate more than half of those who had

contacted us for this workshop series. Moreover, the feedback forms at the end of this series indicated that a number of participants desired more of the same kind of workshops, as well as further, more detailed workshops in future. There certainly appears to be a high level of demand for this kind of event. We hope to make use of what we have learned from our experience this year in order to continue creating better workshop opportunities for everyone.

Takako NIWA
Clerical Assistant, Center for Gender Studies, ICU

2009 年度 CGS 活動予定

CGS ニュースレター 011 号
発刊予定：2009 年 4 月

春学期読書会
日時：2009 年 4 月～ 6 月
場所：ジェンダー研究センター

ジェンダーとクイア・ポリティクスに関する講演会
日時：2009 年 5 月
場所：国際基督教大学

多摩地区「ジェンダーと大学教育ネットワーキング」プロジェクト
日時　5 月より随時
場所　国際基督教大学および周辺大学

CGS ニュースレター 012 号
発刊予定：2008 年 9 月

秋学期読書会
日時：2009 年 9 月～ 11 月
場所：ジェンダー研究センター

ワークショップ「自己尊重・コミュニケーショントレーニング」
日時：2009 年 10 月～ 11 月
場所：三鷹駅前コミュニティーセンター（予定）

冬学期読書会
日時：2009 年 12 月～ 2010 年 2 月
場所：ジェンダー研究センター

CGS ジャーナル『ジェンダー＆セクシュアリティ』第 5 号
発刊予定：2010 年 3 月

注
CGS 公式ウェブサイト「CGS Online」では随時、情報を更新しています。

AY 2009 CGS Activity Schedule
CGS Activity Schedule, AY2009

CGS Newsletter No. 011
Slated for publication: April 2009

CGS Spring Term Reading Groups
Dates: from April to June, 2009
Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Lecture on Gender and Queer Politics
Date: May 2009
Venue: International Christian University

"Gender and College Education Networking" Project
Dates: Regularly from May
Venues: International Christian University and neighboring universities

CGS Newsletter No. 012
Slated for publication: September 2009

CGS Autumn Term Reading Groups
Dates: from September to November, 2009
Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Workshop: "Self-Esteem and Communication Skills"
Dates: from October to November, 2009
Venue: Mitaka Community Center (subject to change)

CGS Winter Term Reading Groups
Dates: from December 2009 to February 2010
Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

CGS Journal, Gender & Sexuality, Vol.05
Slated for Publication: March 2010

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website.

執筆者紹介
Author profiles

池田理知子
国際基督教大学　教養学部　教授
専門：コミュニケーション学
Richiko IKEDA
Professor of International Christian University
Communication

高橋すみれ
名古屋大学国際言語文化研究科　博士後期課程
専門：視覚文化研究、メディアとジェンダー、言説分析
Sumire TAKAHASHI
Ph.D. course, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University
Visual Culture, Media and Gender, Discourse Analysis

川坂和義
国際基督教大学大学院比較文化学科　博士後期課程
専門：哲学、クィア理論
Kazuyoshi KAWASAKA
Ph.D. course, Division of Comparative Culture, Graduate School, International Christian University
Philosophy, Queer Theory

加藤悠二
国際基督教大学大学院 行政学研究科 博士前期課程修了
専門：社会学、ジェンダー・セクシュアリティ研究
Yuji KATO
International Christian University, M.A. (Master of Arts in Public Administration)
Sociology, Study of Gender and Sexuality

国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS）所員
Regular Members of the Center for Gender Studies, ICU

Hidenori FUJITA
藤田 英典
Sociology of Education, Comparative Education, Gender and Education

Junko HIBIYA
日比谷 潤子
Language Variation and Change, Language Contact and Change, Phonology and Phonetics

Richiko IKEDA *
池田 理知子
Communication

Natsumi IKOMA *
生駒 夏美（冬学期センター長）
CGS Director (Winter term)
Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

Aki ITO
伊藤 亜紀
Storia dell'arte italiana, Storia del costume italiano

Insung JUNG
鄭 仁星
Educational Technology and Communications

Takehiko KAMITO
上遠 岳彦
Biology

Etsuko KATO *
加藤 恵津子
Cultural Anthropology, Gender Studies

Takashi KIBE
木部 尚志
Normative Political Theory, Positive Political Theory, Philosophy of Social Science

Hideaki KIKUCHI
菊池 秀明
The Social History of China in the 17-19th Century

Tzvetana I. KRISTEVA
ツベタナ・I・クリステワ
Japanese Literature

Shaun MALARNEY
ショウン・マラーニー
Cultural Anthropology

Hazuki MORI
森 葉月
History of thoughts in Japan, Religious Anthropology

Kei NASU
那須 敬
History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

Nana OISHI
大石 奈々
Labor Migration, Globalization, Gender

Megumi TAKASAKI *
高崎 恵
Cultural Anthropology, Religious Studies

Norie TAKAZAWA
高澤 紀恵（春・秋学期センター長）
CGS Director (Spring and Autumn term)
Social History of Early Modern Europe

Kazuko TANAKA *
田中 かず子
Sociology, Gender studies, Gender Stratification, Care Work

* 編集委員会 (Editorial Bourd)

ICU ジェンダー研究所ジャーナル
Gender & Sexuality
第 5 号投稿規定
2009 年 3 月現在

ICU ジェンダー研究所ジャーナル
Gender & Sexuality
第 5 号投稿規定
2009 年 3 月現在

１）ジャーナル概要
『Gender and Sexuality』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあって、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の一側面を報告するもの）を掲載する。書評部門では、ジェンダー・セクシュアリティに関連する近刊書の書評を掲載する。

２）第 5 号発行日：　2010 年 3 月

３）第 5 号論文投稿締切：　2009 年 8 月 31 日（月）必着

４）原稿提出先：　国際基督教大学　ジェンダー研究センター　編集委員会
郵送：　〒 181-8585　東京都三鷹市大沢 3-10-2　ERB301
E メール：　cgs@icu.ac.jp

５）応募要綱

a）原稿
・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。
・使用言語は日本語または英語に限る。
・原稿の書式は、Publication Manual of the American Psychological Association (2001 年発行第 5 版) とする。
・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通す。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる可能性がある。
・姓名・所属・専門分野・E メール・住所・電話および FAX 番号は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿の他の部分では執筆者氏名は一切伏せること。
・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。
・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえたうえで原稿を執筆すること。
・本規定に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1）研究部門
・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 16,000 ～ 20,000 字、英語の場合は 6500 words ~ 8500 words の長さとする。
・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 12,000 字以内、英語の場合は 5000 words 以内の長さとする。
・タイトルは日本語で最長 40 字、英語で最長 20 words とする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであることが望ましい。
・英語による 500 words 以内の要旨（タイトルを含む）および 5 words 以内のキーワードを別紙にて添付する。

a-2）フィールド部門
・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 12,000 字、英語の場合は 5000 words 以内の長さとする。
・タイトルは日本語で最長 40 字、英語で最長 20 words とする。簡潔明瞭で、主要なトピックを押さえたものであることが望ましい。
・英語による 500words 以内の要旨（タイトルを含む）および 5words 以内のキーワードを別紙にて添付する。

a-3）書評部門
・書評部門の原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 5,000 ～ 10,000 字、英語の場合は 2000 words ~ 4000 words の長さとする。
・タイトルは評する書籍、論文のタイトルが主題、若しくは副題のいずれかに含まれているものとし、日本語で最長 40 字、英語で最長 20 words（日本語と英語で表記すること）。
・要旨およびキーワードの提出は求めない。

b）図表および図版
・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。
・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。
・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。

ｃ）提出原稿
・原稿は、印刷コピーと電子ファイルの 2 種類を提出する。
・印刷コピーは、A4 用紙に印刷したものを 3 部提出する。
・電子ファイルは、MSWord 等の一般的な文書作成ソフトで作成し E メールに添付して上記アドレスに提出する。
・添付ファイルおよび印刷コピーの内容は、完全に一致したものであること。
・提出された原稿等は返却しない。

6）校正
校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7）審査過程
投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が

考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

8）著作権
投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9）原稿の複写
原稿が掲載された執筆者には 3 冊（執筆者が複数いる場合は 5 冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

10）購読申込
該当誌の購読の申し込みは E メール　cgs@icu.ac.jp で受け付ける。

当規定は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU
Gender and Sexuality
Journal Regulations for Vol. 05
as of March, 2009

Gender & Sexuality
Journal of the ICU Center for Gender Studies
Submissions for Volume 5
Regulations as of March 2009

1) Journal Overview
Gender & Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies (*1), and Research Notes (*2). The field section shall feature case studies by activists, and field reports (*3) concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels. The final book review section shall contain reviews on upcoming books pertaining to gender and sexuality.

*1 Research Papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.
*2 Research Notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.
*3 Field Reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 5: March, 2010

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 5: Monday, August 31, 2009, as indicated by the postmark on the envelope.

4) Address for Manuscript Submissions:

ICU Center for Gender Studies Editorial Committee
Postal Address: ERB 301, International Christian University
3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo, 181-8585
E-mail: cgs@icu.ac.jp

5) Rules for Application

Manuscripts
-Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, either in full or part.
-Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.
-Manuscript format should be in accordance with the Publication Manual of the

American Psychological Association (5th Edition, 2001).
- Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.
-The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address, telephone number, and fax number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese.
To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text.
-There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.
-Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.
-Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section
-Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6500 to 8500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
-Research Notes should be less than 12,000 Japanese characters or less than 5000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
-Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or no more than 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
-A summary (including the title) of no more than 500 words and a list of no more than five keywords, both in English, should be attached on a separate sheet.

a-2) Field Section
-Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or no longer than 5000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
-The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or no more than 20 English words in length. It should also preferably address the main topic. The title should be submitted in both Japanese and English.
-A summary of no more than 500 Japanese characters and a list of no more than five keywords should be attached on a separate sheet.

a-3)Book Review Section
-Manuscripts should be between 5,000 to 10,000 Japanese characters or 2000 to 4000 English words, including figures, graphic images, references and footnotes.
-Titles should be no more than 40 Japanese characters or no more than 20 English words in length. The title of the book or research paper reviewed should appear in the main title or subtitle.
-Submission of a summary and keyword list is not necessary.

b) Figures and Graphic Images
- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.

- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.
- The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission
- Manuscripts should be submitted in both digital and hard copy.
- 3 hard copies should be submitted. They should be double-spaced on single-sided A4 paper.
- The digital copy should be submitted as an e-mail file attachment in MSWord or any other regular word-processing software format for creating documents.
- The digital and hard copies should be completely identical.
- Manuscripts submitted will not be returned.

6) Revisions
If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the Editorial Committee.

7) Screening Process
Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarliness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright
Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's own manuscript.

9) Journal Copies
Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

10) Purchasing Orders
Orders for the journal can be submitted by e-mail to cgs@icu.ac.jp.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記
生駒夏美

第４号が完成しました。初号より試行錯誤を重ねてまいりましたが、今号から論文部門に新たに研究ノートというセクションを設けることになりました。論文にする途上にあり、論文とするには完成度が不足しているけれども、一度読者の批評を仰ぎ更に完成度を高めていきたい場合などに活用できるセクションです。どうぞ奮ってご投稿下さい。今号につきましては掲載は招待論文と投稿作品より選り抜かれたものを合わせて４本と少なめですが、どれも読みごたえのあるものだと思います。いつもながら、丁寧な査読にご協力くださった査読者の皆様、また編集作業に尽力してくださったCGS関係者の皆様、そしていつも当ジャーナルをご支援くださる読者の皆様に、心より御礼申し上げます。どうぞこれからも引き続き、あたたかいご支援をよろしくお願い致します。

Postscript from the Editor
Natsumi IKOMA

The fourth volume of our journal is finally complete! After much trial and error since our first volume, we have added a new section called Research Notes. It is a section for research papers in progress, so that the authors may benefit from a variety of comments before they complete their work. Therefore we would greatly welcome any critical feedback from our readers. While this volume is relatively slim, one invited paper and the three working papers have been carefully selected for their depth and significance. We wish to thank our referees for their detailed readings and reviews of the papers as well as the staff and friends of CGS for their editorial efforts. Finally we reiterate our appreciation to our faithful readership. Thank you all for your continued support.

Gender and Sexuality
The Journal of the Center for Gender Studies,
International Christian University
Printed and published on March 31, 2009

Editor International Christian University
Center for Gender Studies Editorial Committee
Publisher International Christian University
Center for Gender Studies
ERB301 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN
Tel& Fax +81-422-33-3448
cgs@icu.ac.jp
http://subsite.icu.ac.jp/cgs/
Printing Digital Works Co.,Tokyo
Tel + 81-424-25-2288

Copyright in Japan, 2005
by the Center for Gender Studies, all rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センター ジャーナル
『ジェンダー＆セクシュアリティ』
2009 年 3 月 31 日 印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会
発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター
〒 181-8585
東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB301
Tel& Fax 0422-33-3448
cgs@icu.ac.jp
http://subsite.icu.ac.jp/cgs/
印刷 有限会社デジタル・ワークス
Tel 0424-25-2288

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、
著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。

ジェンダー＆セクシュアリティ
国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル

ISSN 1880-4764